俳　句　雑　誌

若竹

わかたけ

12月号
No. 1100

二〇二三年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第九七巻第十二号（通巻一一〇〇号）

創刊1100号記念特集

（題字　若竹　村上鬼城筆）

若竹吟社

俳誌「若竹」創刊 1100 号　記念大会のご案内

【日　　時】　**令和６年１月21日（日）**
受付　午前10時より
当日句出句締切　10時30分

【場　　所】　**三河湾リゾートリンクス**
コンベンションホール　Fuga ～風海雅～
☎（0563）32－3711

【大会行事】

⑴　記念式典　（10時40分開始）
・開式のことば
・同人会長あいさつ
・主宰あいさつ
・若竹功労者表彰
・新報俳壇賞・若竹俳句賞・募集句　表彰
・新同人紹介
・句集上梓者に花束贈呈

⑵　祝賀会　（12時開始）
・開会のことば
・達磨点睛
・祝賀演奏（ファーストママ笛の会）
・主宰あいさつ
・乾杯
・来賓祝辞
・卒寿以上会員　記念品贈呈
・句会（代表選）
・当日句入賞者表彰
・閉会のことば
・記念撮影

主　　催　　俳誌「若竹」創刊 1100 号記念大会実行委員会
主宰　加古宗也
同人会長　池田あや美
大会実行委員長　鈴木帰心

主宰近影

加古宗也主宰（令和５年10月　名古屋市市政資料館にて　撮影・川嵜昭典）

冬山の日当るところ人家哉

（鬼城遺墨）

若竹アルバム

能登総持寺祖院にて

左から
浅井仁水、市堀玉宗氏

岡崎市内で　宇佐美魚目氏と

東吉野村　右端 藤本安騎生　運河同人会長の案内で

犬山市尾張富士　宗也句碑開眼　　左 有馬朗人氏

宗也主宰　還暦祝賀会（名古屋マリオットホテル）

復本一郎氏

村上　護氏

三和村　最明寺
潮児・宗也句碑除幕式
左から　潮児・うしほ・宗也

段戸山　文学の森
宗也句碑除幕

荘川桜にて。左より木暮陶句郎、大元祐子、池田澄子、浦川聡子、日下野由季、村上護、奥坂まや、橋本榮治、宗也主宰、越村蔵の皆さん。

名誉主宰　百寿祝賀会

隠岐吟行
右から３人目　48代 村上助九郎氏

『花の雨』出版記念祝賀会

田口茉於さん石川啄木奨励賞受賞

西尾茶摘俳句大会
稲荷山吟行　潮児句碑の解説をする主宰

宗也主宰　詩歌句大賞受賞

東吉野村　天好園句碑
〈水音のおくに水音螢わく〉宗也

東吉野村　天好園螢句碑開き

1000号記念　小中高生俳句募集表彰式
榊原康正 西尾市長（当時）

早乙女 貢氏の祝賀会にて
なかにし礼氏 と

早乙女氏と

村上鬼城顕彰 第30回全国俳句大会
宗也主宰選評

芭蕉蛤塚忌句流し（水門にて）
右 櫂 未知子氏、中央 宗也主宰

若竹新春俳句大会

一色大提灯祭
当日恒例の献詠俳句大会

横蔵寺吟行

新春俳句大会　達磨天晴
宗也主宰と補助 田口風子同人

唐津焼　中里太郎右衛門窯

伊万里吟行会途次

牧野暁行同人会長句碑除幕式（東向寺）

俳誌「桜草」同人一行　守石荘来訪

宗也句碑開眼式（光蔵寺）

加古宗也主宰句碑
老鶯句碑・上
露台句碑・下
東吉野村
光蔵寺

宗也句碑開き（東吉野村・光蔵寺）

文豪・尾崎士郎を偲んで

第五十六回　瓢々忌句会

日時　令和六年二月十一日(日)（受付十時より）

会場　西尾市横須賀ふれあいセンター　多目的ホール

住所　愛知県西尾市吉良町小牧郷前五

（電話　〇五六三―三五―三一九八）

最寄駅：名鉄西尾線「上横須賀駅」から徒歩十分

駐車場有・隣接のテニスコートの駐車場も使用可

出句　嘱目二句（出句の締切　正午）

会費　一、〇〇〇円（お茶を一本ご用意します）

表彰　尾崎士郎特別賞・西尾市長賞・西尾市議会議長賞・西尾市教育委員会賞・西尾市吉良地域文化協会会長賞・三河新報社賞・若竹吟社賞・吉良俳句の会会長賞（予定）

主催　若竹吟社

主管　吉良俳句の会

後援　西尾市吉良地域文化協会　三河新報社

主な吟行地

・コミュニティ公園（青成瓢吉出立の像、川端康成の言葉）

・地蔵堂（士郎誕生地）

・源徳寺（吉良仁吉墓所）

・福泉寺（士郎墓所・文学碑）

・横須賀小学校（士郎母校・士郎碑）

備考　昼食は、各自ご用意ください。会場の会議室にて召し上がっていただくこともできます。

【問い合わせ】鈴木帰心　携帯　〇八〇（三六一四）〇五六二

祭り四季　（撮影：柘植草風）

新年・寒

舟だんじり（三重県紀北町）　毎年1月中旬

山見鬼出でて舞庭に淑気満つ　加古　宗也

初詣歯固めの石借り申す　酒井　英子

初電話声のみ若き私達　荒川　洋子

人日の海豹のこゑ人に似る　江川　貞代

書初や紙の外まで筆力　辻村　勅代

新しき歯刷子並ぶ大旦　鈴木　玲子

元日会痺れて立てぬ夫は僧　山科　和子

焙りたるするめ一枚どんどの火　平田　眞子

大宇陀や吉野本葛寒晒　石崎　白泉

寒晴や整頓されしゴミ置場　松元　貞子

春

半田市　亀崎潮干祭（5月）

船霊にまつる黒髪鰆東風　今泉かの子

磨り減りし踏絵の板に届かぬ日　鈴木　恭美

初午や野良猫のゐし狐塚　鈴木まり子

チェロを背に走る自転車花菜風　天野れい子

俎を緑に染めて茹で蕨　鈴木こう子

冴え返る毒薬瓶の黒ラベル　奥村　頼子

恋猫の絶叫に夢断たれけり　新部とし子

厠にも志功の天女竜天に　鈴木　帰心

殺風景な小窓に今朝は牡丹雪　竹原多枝子

春立つや孫の葉書にハートの絵　春山　泉

夏

岡崎市　御田植祭（6月）

被爆樹のうすき影借り祈る夏　中井　光瞬

神輿渡御強訴のごとく街を練る　市川　栄司

正倉院曝涼父と歩きけり　田口　茉於

手渡されそのあと困る蟬の殻　堀田　朋子

嫉妬とはこびりつくもの髪洗ふ　渡邊　悦子

剣豪の木刀軽し梅雨晴間　山田　和男

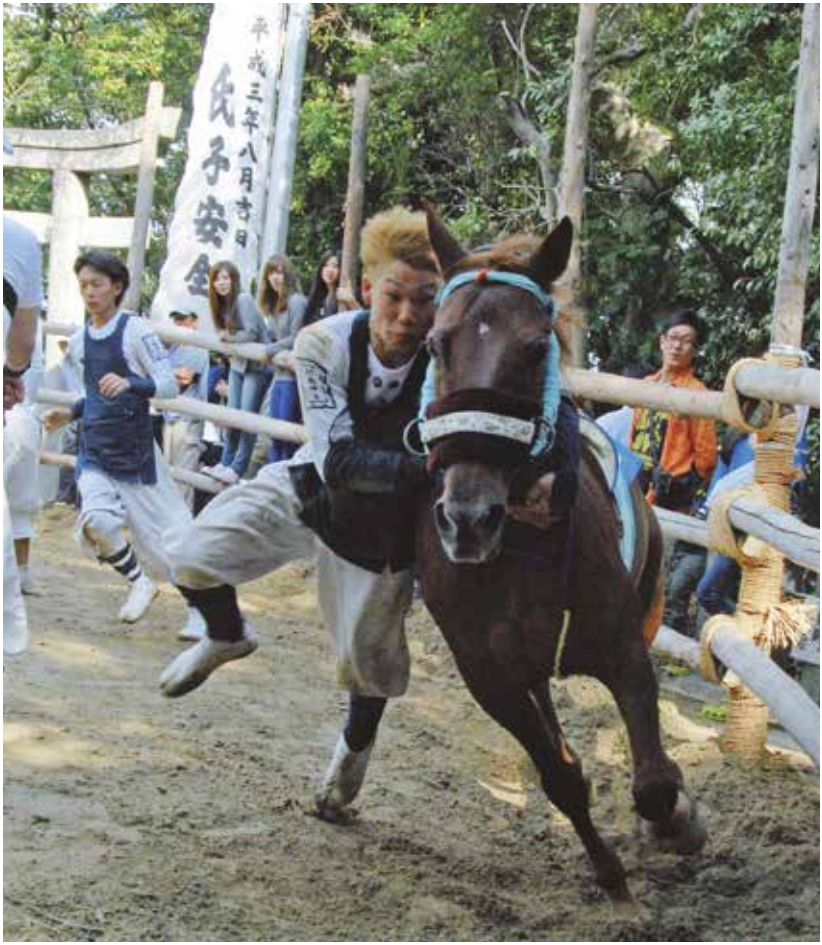
夏の川坊主頭の地元の子　田口　綾子

トンボ玉づくり見てゐる避暑の昼　白木　紀子

父の日やお酒の旨い店探す　飯島　慶子

麦秋や貨物列車の音乾く　服部くらら

秋



知多郡東浦町　村木神社　おまんと祭

姉川も妹川も曼珠沙華　田口　風子

宇陀は秋床柱干す材木屋　髙橋　冬竹

地球儀に破れし山河鳥帰る　工藤　弘子

信濃路や林檎の下のカフェテラス　池田あや美

薬師寺の塔見えあきつ増えてきし　三矢らく子

前の人ふと立ち止まる雁渡し　川嵜　昭典

介護士はつねに小走り鉦叩　鈴木　玲子

名月をもう一度愛で眠りけり　加島　照子

亡き夫の宝のひとつかすみ網　磯村　道子

籠に余るほどの秋茄子もらひけり　金子あきゑ

冬

百寿かぼちゃ観世音　ハズ観音（かぼちゃ寺）

その夜の山河涙の凍る音　荻野　杏子

冬が来てゐる木曽川の波がしら　池田真佐子

冬に入る言葉の端に出る訛　岡田つばな

獅子岩の懐に居て冬銀河　高濱　聡光

茶の花や巨岩の裏に猿田彦　平井　香

七人も産みし母さん茶の咲けり　重留　香苗

冬ざれや枯山水に塵もなし　大澤　萌衣

出刃包丁研ぐ極月の夫の黙　高瀬あけみ

年末で閉めると床屋鏡越し　鶴田　和美

筆跡にその日の気分古日記　髙橋まり子

若竹役員依嘱

主宰　加古宗也

新春より、若竹副主宰並びに若竹同人会役員に、次の皆さんを依嘱します。

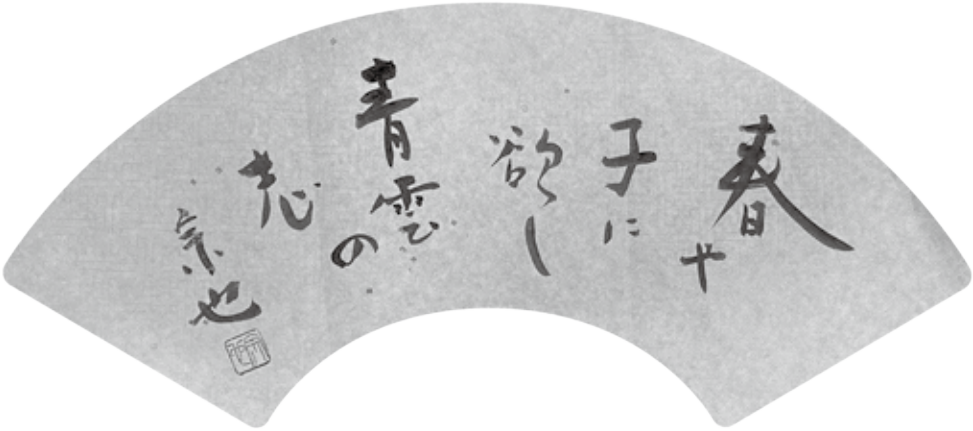
副主宰
田口風子

同人会長
池田あや美

同人会副会長
荻野杏子

幹事長
鈴木帰心

副幹事長
山田和男



春や子に欲し青雲の志

宗也

若竹　通巻一一〇〇号記念号〔目次〕

一一〇〇号記念大会案内　表紙2

主宰近影　1

村上鬼城遺墨「冬山の日当るところ人家哉」　村上鬼城　2

若竹アルバム　3

祭り四季　写真・柘植草風　12

井垣清明の書　25

同人紹介　田口茉於　26

巻頭言「鬼城一本の心地よさ」　加古宗也　28

流水抄(332)　加古宗也　32

光風抄(1)　田口風子　37

特別寄稿・加古宗也俳句論

大正俳句へのまなざし　岸本尚毅　38

火種のごとき　中村雅樹　42

繰り返される出会い　黒岩徳将　46

加古俳句の音楽性　―『舟水車』「新年・春」から―　安里琉太　50

特集・俳句一筋、鬼城一本

鬼城・うしほ・潮児から宗也へ　田口風子　54

村上鬼城論

「ホトトギス」と鬼城の写生　田口茉於　64

変わる価値観・変わらぬ価値観　川嵜昭典　68

「鬼城俳句輪講」より　72

富田うしほ一句鑑賞

高橋冬竹・乙部妙子・清水みな子・鈴木帰心　80

富田うしほ　句　抄出・加古宗也　83

富田潮児一句鑑賞

深見ゆき子・高瀬あけみ・工藤弘子・池田あや美

酒井英子・今泉かの子・荻野杏子　85

富田潮児　句　抄出・加古宗也

加古宗也一句鑑賞

高濱聡光・堀田朋子・坂口圭吾・加島照子

重留香苗・髙橋まり子・村重吉香・山田和男

竹原多枝子・堀場幸子・関口一秀・岡本たんぽぽ

天野れい子・奥村頼子・飯島慶子　91

加古宗也　句　抄出・田口風子　99

若竹俳句賞受賞作家競詠　101
高橋冬竹・荻野杏子・服部くらら・田口風子
工藤弘子・市川栄司・江川貞代・酒井英子
白木紀子・岡田つばな・渡邊悦子・中井光瞬
池田真佐子・中野まさし

若竹巻頭句集　116　抄出・橋本周策　池田真佐子

青竹集　134
酒井英子・髙橋冬竹・辻村勅代・服部くらら・中井光瞬・渡邊たけし
池田あや美・市川栄司・江川貞代・岡田つばな・荻野杏子・工藤弘子

十月号巻頭作家紹介　145　荻野杏子

珠玉三十句　真珠抄十二月号より　146　推薦　加古宗也

翠竹集Ⅰ（同人自選作品）　139

翠竹集Ⅱ（同人自選作品）　181

真珠抄　148　加古宗也　選

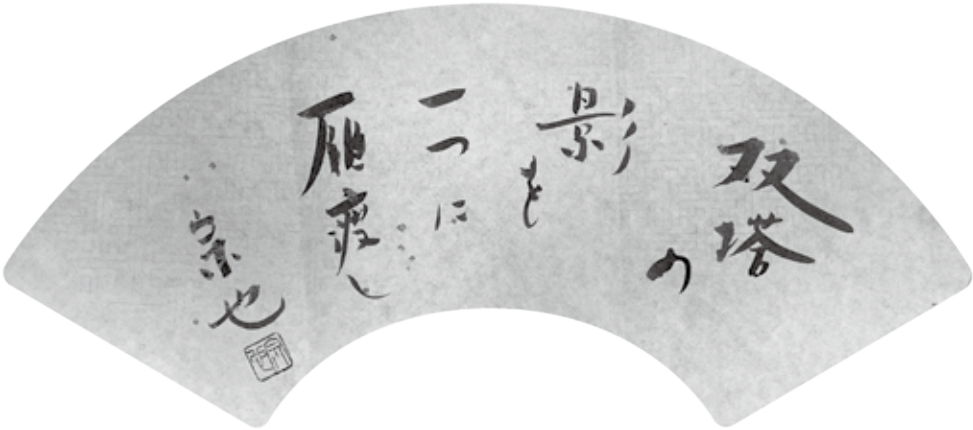
選後余滴　164　加古宗也

山暮らしの日々　第十四話　188　平野雷太郎

同人13人が選ぶ若竹この一年の成果　174

田口　風子　荻野　杏子　江川　貞代　川嵜　昭典　大澤萌衣
荒川　洋子　服部くらら　中井　光瞬　三矢らく子　池田真佐子　新部とし子
山田　和男　今泉かの子

とりごよみ ⑮	髙橋伸夫	167
俳句の自由 (35)	橋本　直	168
竹林のせせらぎ（青竹集・翠竹集作品鑑賞十月号より）	今泉かの子	170
一句一会	川嵜昭典	172
句集の扉	天野れい子	186
若竹ウェブ便り (40)		190
俳句をユネスコへ ⑭	津久井富雄	166
ふた葉ガーデン	服部くらら	193
会報	抄出・服部くらら	194
各支部句会案内		198
若竹同人名簿		200
二〇二三年度「若竹」主要行事・関係行事		206
守石荘だより		表紙3



双塔の影を一つに雁渡し　宗也

義央忌献句会

▽日　時　令和五年十二月十四日（木）吉良義央公第三二一回毎歳忌当日
　※当初の日時と変更になりました。ご注意ください。

▽会　場　法要・吟行　華蔵寺（西尾市吉良町岡山山王山五九）
　昼食・句会　ホワイトウエイブ（西尾市吉良町岡山大岩山七〇）

▽日　程　午前八時半より　受付（華蔵寺山門）
　八時四十五分～十時　墓前法要・仏前法要
　十時～十一時　吟行（華蔵寺・花岳寺）
　十一時半　昼食（ホワイトウエイブ２Ｆ）
　十二時半　投句締切（三句）
　十三時半　句会（ホワイトウエイブ２Ｆ会議室）

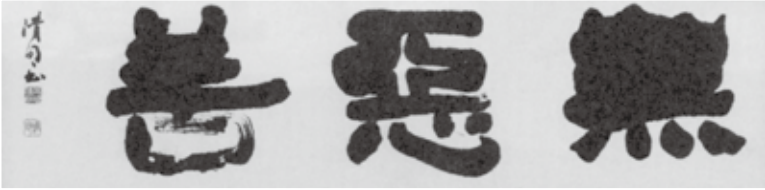
▽会　費　毎歳忌参加費　二千円（華蔵寺山門にて各自お支払いください）
　句会参加費　五百円（お茶一本を用意します）
　※昼食は各自ご用意ください（ホワイトウエイブにレンストラン有）。

▽申し込み　〒四四四－〇五二一
　西尾市吉良町上横須賀宮前一五〇　鈴木帰心　宛
　鈴木帰心携帯　〇八〇（三六一四）〇五六二

▽備　考　※各自の葉書、または、電話にてお申込みください。
　先着三十名にて締め切らせていただきます。

主催　若竹吟社
主管　吉良俳句の会

井垣清明の書 ㊴



無悪善

平成11年（一九九九年）十一月
第19回武蔵野書人会展（埼玉会館）

釈　文

無悪善（さが無くて善し）
（『宇治拾遺物語』）（『十訓抄』も）

嵯峨天皇に向って「いない方がよい」とは申し上げにくい。

何でも読みこなすと評判の小野篁（おのの たかむら）（８０２～８５２）が朝廷に呼び出された。「無悪善」を読め、というのだ。『宇治拾遺物語』を引用してみる。

帝、篁（たかむら）に「よめ」とおほせられたりければ、「よみはよみ候ひなん。されど恐（おそれ）にて候へば、え申（まうし）さぶらはじ」と奏しければ、「ただ申せ」と、たびたび仰（おほせ）られければ、「さがなくてよからんと申（まうし）て候（さぶらふ）ぞ。されば、君をのろひ参らせて候なり」と申（まうし）ければ、「おのれはなちては、たれか書かん」と仰（おほせ）られければ、「さればこそ、申（まうし）さぶらはじとは申（まうし）て候（さぶらひ）つれ」と（以下略）（岩波書店・日本古典文学大系27『宇治拾遺物語』1960）（ルビ一部割合）

この物語には続きがあり、嵯峨天皇が出した難題を小野篁が名解答をして、帝の御機嫌も直り、お咎もなく済んだ。滑稽譚の一種といえよう。

いささか面白い話なので、「善」の画数を減らし、丸っこくした。無・悪ともそれに釣り合うようにと考えた。「無」はタテ画4本が上にツノを出している漢代の隷書を使った。

（癸卯霜降・清明　記）

同人紹介

田口茉於

初学の一句

春の猫遠くに聞きて髪を拭く

私が中学生になったころだろうか、母が俳句をはじめた。趣味の多い人なので、また新しい趣味がひとつ増えただけのように思っていたら、だんだんと俳句が生活に溶け込んでいく。楽しそう、私もいつか俳句をやってみよう。でも大人になってから、と思っていた。

初学の一句は、大学を卒業し就職した会社にも少し慣れたころ、やっと始めた俳句の、はじめての教室に持って行ったもの。

隣家の猫の、赤ん坊のような鳴き声を常々うるさく思っていたら、なんと春の季語だった。二十年経った今も、新しいことを知ったあの時の喜びのまま続けているように思う。もう十分すぎるほどの大人だが、今でも学ぶべきことが膨大にあることが楽しい。やりたいこともやるべきこともどんどんあって、自由な気持ちになる。

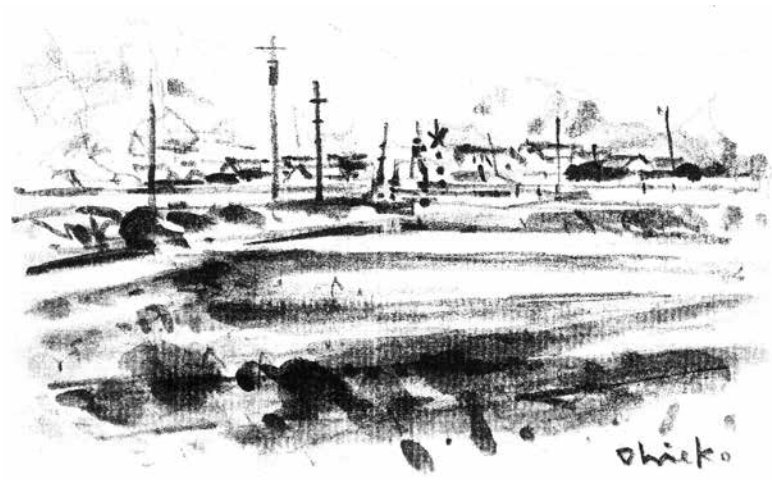
最近は実家に帰ると近くの里山を歩き、母に草花の名前を教えてもらっている。遅々とした歩みをいつも大らかに見守ってくれる加古宗也主宰に心より感謝申し上げます。

現在の一句

西瓜切り分ける大人になつてゐる

若　竹

令和５年12月号



通巻 1100号

巻頭言

鬼城一本の心地よさ

加古宗也

一〇〇〇号の巻頭言では「淡々と歩む」と題して書いた。それから一〇〇号。世界情勢も、日本の政治・経済・社会情勢も大きく変貌してしまった。

一つに疫病・コロナの世界的大流行がある。日本国も逃れる術もなく大流行の渦中に入った。毎日、罹患者数がテレビやラジオ、新聞等で報道され、有名タレントの死亡報道は国民を震えあがらせたといってもいい。外出時は全員マスクをつけること、マスクをつけない人は半ば犯罪者を見るような目で、つまり、睨みつけられるような視線が飛びかった。そして、飲食店など休業に追い込まれたところも多くあった。勢い経済の低迷が日毎に深刻なものになっていった。

三年余り続いたコロナ禍は俳句界においても、各種の俳句大会の中止あるいは延期。通常、輪になって行われていた句会も、郵便、ＦＡＸ、メール、リモートなどを使っての句会が増えた。しかし、これでは句座に十分な熱気は生まれない。そうした状況の中ふと「連衆」のありがたさを思った俳人が多かったに違いない。「目は口ほどに物を言う」ではないが、集まった人々の表情を見るだけで、そこにコミュニケーションが生まれることに気づいた人は多かったのでは。そ

して、連衆の温もりを思ったに違いない。
コロナによる不況は世界不況へ発展しており、ロシアとウクライナとの戦争は一年を越えた。そして、いままた、中東に戦争の火の手があがった。泥沼の様相にのめり込んでゆきそうで心が重い。
ある報道番組で、人類の戦争の歴史を見てみると、多くの場合、異常気象、凶作、飢餓、戦争という流れを見ることができるという。地球温暖化の問題はすでに長い間、言われつづけており、それぞれの国の思惑もからんで解決の目途が立っていない。というより深刻さを増しているのではないかと思う。ある専門家は、戦争は本質的に「人の殺し合いに他ならない」と言う。それが国家のお墨付が与えられたとたんに正当な行為になってしまうのだという。
巻頭言としてはいささか暗い話題になってしまったが、それにしても地球上からどうして戦争が無くならないのか。人類の最大の愚行「戦争」がどうしてやまないのか、哀しいことだと思う。
さて、やっと本題に入るが、「若竹」は本号をもって一一〇〇号に達した。時に遅刊もあったが、いずれにしても一一〇〇冊発行し、それを「若竹」の仲間に届け続けてきたことは確かだ。昭和三年六月号が創刊号だから、戦中・戦後の休刊、例えば戦中には「俳誌統合」という命令が軍部から出されたとき、富田うしほは、「俳誌は独立して、その主張を持つものであり、統合など、もってのほか、と軍部の忠告をはねのけて、自ら休刊に踏み切っている。戦後は、今度は極端な紙不足で休刊の止むなきに至っている。にもかかわらず二十二年には早々と復刊、襖紙をはがした仙花紙などを利用して印刷したものがしばらく続いている。つまり、若竹発行も順風満帆というものではなかったが、しぶとく発行を続けてきた富田潮児の胆力には感慨深いものがある。
富田潮児は十七歳のとき事故で視力を次第に失ってゆく。にもかかわらず、じつに心の強い人

だった。私は五十年にわたるお付き合いだったが、一度も人前で怒りをあらわにしたことはない。百一歳という長命だった。私は潮児の人となりを尋ねられれば、即座に「生身魂のような人」と答えてきた。

逆に、その父富田うしほは若い頃はかなり気性の激しい人であったようだ。私はうしほ晩年の弟子であったので、初めから「宗也君、宗也君」といって、かわいがってくれた。私もうしほ爺さんが好きで、暇さえできればあちこち、吟行のお伴をした。初めから俳人になるつもりがあったわけではないが、うしほ翁の俳句をつくる姿を見ながら、作句にのめり込んでいった、というのがほんとうだ。俳句をときどき見せる私がかわいくて、句会に誘われるようになった。暇ができれば句会のお伴もするようになり、二十代の俳人は当時でも珍しく、ほんとうに皆さんにかわいがっていただくという幸運なデビューだった。

その頃、話題になったことの一つに富田うしほの第三句集『好日』に載った画家・小川千甕の序文がある。それは次のようなものだ。

俳句一筋、鬼城一本――
うしほ氏を語らんには、この八字のみで
全貌を盡したりとするのであります。
多年旧交の氏なれば、憶ひ出は多々
複雑で幾多の挿話を並列し得
べきも、其等を掩ひ去つて、一途一徹の
氏に冠するには、右の八字に如かず

とするのであります。
敢へて、これを新タな全句集の
序言とします
昭和四十三年　新春
千甕老人識

昨今はＩＴ時代で、それが日本人にとって、いいことなのか悪いことなのか。私にはわからない。

しかし、俳句という、これ以上どうにもならないほど単純な詩型は、それによってますます面白くなってくるように思う。平和の大切さ、自然の大切さ、それをじっくりと考える時代がいま来ているように思う。人生の原点に立ち帰って、自身幸せを考えるいい機会だと思う。そして、俳句との出会いをありがたく噛みしめてみたいと思う。

毎朝、守石荘の庭を眺めることから私の一日は始まる。袋庭ではあるが、そこには、村上鬼城、富田うしほ、金子刀水の三師の句碑が立っている。〈伊勢の海見えて菜の花平らかな　鬼城〉〈ゆるぎなき赤城榛名や常閑忌　うしほ〉〈荒鵜飛んで伊勢の神島潮ぐもり　刀水〉。その空間に熱い気息が飛び交っており、明日への力をくれる。

「若竹」はもうすぐ創刊百周年を迎える。それを視野に一一〇一号へ踏み出したい。

流水抄

（432）

加古宗也

松色を変へず出雲の大社

初霜や石の屋根持つ産湯井戸

抱き上げて母が遺愛の茎の石

熱々の茶漬茎漬てんこもり

茎漬や甕は伊部の紐づくり

参道に箱ごと並べ蜂屋柿

西尾八剣八幡宮

時雨華やぐ宝剣髭切丸どこへ

能面展あり床花は西王母

鳰潜きをり殿橋の見えてをり

小春日や曲尺を抱く太子像

小春日和や神君のお成り道

義直が寄進の鐘や冬ざるる

前橋にて　三句

鷹匠に女弟子あり鷹を抱く

熊鷹や鷹匠の面（つら）凜々しくて

新雪の浅間臨江閣より直面

空港島すぐそこに見え鴨の陣

鴨の陣軍艦島を囲みけり

目出し帽即ち奴の冬帽子

北風抜けて旧監獄の太格子

薔薇窓の床に降ろされ十二月

旧裁判所マヌカンの片手套

呉服座(くれはざ)のすつぽんに首十二月

薔薇窓を透けきて冬日虹を生む

きしめんは音たてて食べ師走街

珈琲に少しの酸味師走来る

軍神の軍刀に房開戦日

十二月八日場末のジャズライブ

十二月八日隣家でぼや騒ぎ

あらぬ方突き上げ一丁潜りかな

水の面のひととこ窪みかいつぶり

耳ふさがるる如き静けさ鳰の湖

綿虫やゆつくり回る転車台

北風吹きつのり反転の転車台

飯桐の実や山禽の騒がしき

師弟句碑愛で南天の実を愛づる

吉良華蔵寺

吉良公が寄進の鐘や霜晴るる

華蔵界晴れ侘助のまた落つる

扁額はコバルトブルー冬椿

小春日やゆつくり下る女坂

冬桜鉄眼一切経蔵す

四十七人の刺客義士の日とは笑止

梵鐘の余韻とことん冷まじき

義央忌済まば穆の枯れ急ぐ

冬靄の霄れ鶴の石亀の石

吉良寺の赤き瀧なす冬紅葉

冬晴や三河平野の端に住む

本陣の跡とや柚子の実のたわわ

円墳の裾たんぽぽの帰り花

帰り花かつて土葬の村なりし

裸木に耳当て生死確かむる

光風抄（1）

田口風子

燈火親しうしほ潮児の鬼城論

青北風（トンボロ）やさざ波のたつ忘れ潮　三句

足元にもう潮満ち来雁渡し

トンボロを横切つて鷹渡りけり

福田美蘭展　三句

美蘭着る志村ふくみの藍の秋

秋声のゴッホ二次元と三次元と

蛇穴に入るプーチンのデッサン画

ユトリロの街はみな坂（さか）道冬隣

午後の日を水平に飛ぶ秋あかね

突つついてみて蟷螂に嫌はれし

《特別寄稿》

加古宗也俳句論
大正俳句へのまなざし

岸本尚毅
（「天為」「秀」同人）

加古さんにこんな句がある。

地ねぶりの春呼ぶ伊達の郡かな『花の雨』

「原裕氏とみちのくの旅へ」と前書がある。さらに「深吉野にて」と前書のある、

石鼎の山居に在りぬ旧端午『花の雨』

という句がある。

石鼎、コウ子を継いで「鹿火屋」主宰をつとめた原裕氏が亡くなったとき、加古さんは

ゆたかなる秋果確かに遺されし『花の雨』

と詠んだ。

加古さんは「若竹」主宰。大正俳壇の雄であった村上鬼城の師系を継ぐ。その加古さんは若き日に「鹿火屋」に投句し、原裕氏の選を仰いだことがあった。原裕氏は昭和五年生まれ。加古さんは昭和二十年生まれ。加古さんにとって原裕氏は「兄事」の対象であったと想像する。

「鹿火屋」昭和五十三年十月号の「鹿火屋集」に加古さんの作品が載っている。当時の「鹿火屋集」には、原和子、北澤瑞史、岩淵喜代子、小室善弘、森川光郎、脇祥一などといった人々が投句していた。

曼荼羅のあせて秋暑の堂宇かな　宗也

月光ゲをしぼりくる風ありにけり

粉本の紛れて棚の青ふくべ

二か月前の「鹿火屋」の新誌友紹介の欄に加古さんの名前があった。加古さんは入会直後に投句し、この三句が入選した。このとき三十三歳。色褪せた曼荼羅のある寺の秋暑。月光を吹きしぼるような一陣の夜風。粉本がどこかに

紛れてしまったとき、目に映るものは瓢の棚の青瓢であった。いずれも伝統的な素材を詠んだ句でありながら、どこか初々しい感性を感じさせる。

「若竹」と「鹿火屋」、鬼城と石鼎という大正俳句にこだわりつつ、加古さんの初期の句を紹介した。加古さん自身にも大正俳句へのこだわりがある。

「曲水」昭和六十年四月号の俳誌月評（執筆者は森田かずや氏）に、加古さんの評論が紹介されている。以下はその一節である。

加古宗也氏（昭和二十年生）は「大正俳壇を意識した昭和の中興俳壇があってもいい」のではなかろうかと、まず「俳壇」十二月号の「昭和五九年諸家自選ベスト一句」を巻首から十五句を抽き、別に大正初期の「ホトトギス」第一期黄金時代を形成した、鬼城、蛇笏、石鼎、普羅、水巴のピークをなす時代の作品五句を抽出して、句の傾向と骨格を参考に挙げている。

要旨は、現代の俳壇には、大正俳壇の五家に見られるべき骨太な把握がない。現代俳句には骨細りが目立つ。その理由の一つに……各俳句結社の主宰は、選句に、句会指導に、各種俳句大会にと東奔西走、実作者である前に有能な経営者であることを強いられている。といった指摘、「全霊をかけた実作と、片手間の実作の間にはおのずと開きがでてくる」と直言する。

蛇笏の句の格調の高さ、正しさを。また鬼城を、水巴を、石鼎を。あるいは普羅を如何にして現代に取り込むか。と氏の論やなかなかに意欲的であった。

この記事が載った「曲水」もまた、大正俳壇の大家渡辺水巴が創刊主宰した俳誌である。

大正俳句の骨太さにこだわる加古さんには、輪郭のしっかりした作品がある。

戛々と鳴り改暦の掛時計『舟水車』

「改暦」が新年の季語。カの頭韻、ことに「戛々」が淑気を伝える。年が改まることの厳粛さが感じられる作で、「戛々と鳴り」は骨太な、力強い表現である。

富田うしほには「大東亜戦争講和」と前書のある〈**改暦の地球は世紀同じうす**〉（『好日』）という句がある。加古さんの句とうしほの句の共通点は「改暦」という言葉の響きを生かしていることだ。

大うねりして水青し下り簗『舟水車』

川の表面の白さではなく、うねりつつ貫き流れる実体を「青し」と捉えた。「大うねりして水青し」という言葉の調子それ自体が力強くうねっているかのようだ。

うしほには〈**簗宿の水音こもる夕かな**〉（『続 好日』）という温雅な佳品がある。

崩れ簗ながれに挑む力なく　潮児『夢窓庵随唱』
錆鮎に松籟日がな衰えず　同

富田潮児にもこのように悠揚迫らぬ句がある。〈崩簗ならめひょろひょろひょろひょろと　阿波野青畝〉とも詠まれた崩れ簗のさまを「この簗にはもう、流れに挑む力が残っていないのだ」というのである。一見間接的な表現だが、力の抜けたような崩れ簗の景の本質をとらえている。

「錆鮎に」の句は、錆鮎の頃の川に一日松風が音を立てて吹き続けている、という意味。単純な景だが、大正俳句の格調を思わせる句だ。

嚔して向うに月のありにけり『舟水車』

嚔が響く。そのはるか彼方の月までの虚空を感じる。嚔が出た直後に、正面に月があることに気づいたのだ。そのような心持ちを「ありにけり」で表現している。

「ありにけり」といえば〈川底に蝌蚪の大國ありにけり〉（『鬼城句集』）や〈月さして一間の家でありにけり〉（同）を思い出す。このような句に触発された高浜虚子は「絵に空白を存する叙法」という俳論を書いた。

山羊の髭地をすり草の紅葉づれる『舟水車』

「地をすり」という観察が見事。山羊のゆっくりとした動きが想像される。山羊の髭から草紅葉への視点の移動が自然である。

囀りや岩の上なる札所寺『八ツ面山』

大きな岩山に載るように建てられた寺は札所であって、巡礼が通る。岩山の聳え立つような空間に「囀り」が響く。

加古さんの句柄の大きい句とは対照的に、うしほにはこんな句がある。

囀の一羽影ある障子かな『続好日』

囀っている鳥の影がちらちらと障子に映っているのであろう。温雅な作である。

纜を走る鼠や初嵐『八ツ面山』

舟から陸地へ走るのか、あるいはその逆か。「纜を走る鼠や」のスピード感がいい。「初嵐」には力強い、言葉の張りがある。この句からも大正風の古格が感じられる。

べた凪や五指にからめて海髪を引く『花の雨』

おごのりの採取である。「五指にからめて～引く」からおごのりの質感が感じられる。「べた凪や」という、ネットリとした言葉の響きも句柄に合っている。

ド・ロ壁に邯鄲昼を鳴いてをり『雲雀野』

ド・ロ神父が考案した「ド・ロ壁」。時を経た壁であろう。そこに今、昼の邯鄲が鳴いている。

油蟬鳴く鍼力屋の金鋏『雲雀野』

「鍼力屋の金鋏」の質感、存在感。油蟬の濁った声。

冬瓜のいつもごろごろしてゐたり『雲雀野』

「いつもごろごろ」が横着な人間のようで、可笑しい。

取水口数多渦生み水の秋『雲雀野』

描写を主眼とした句だが、「取水口」という無粋な上五がかえって可笑しみを誘う。

大津絵に座頭の褌唐辛子『雲雀野』

犬に褌を噛まれる座頭を描いた大津絵。唐辛子はそのへんの点景であろうが、なぜか可笑しい。

うそ寒や小野篁大男『茅花流し』

平安朝の官人を代表する知識人であった小野篁は大男であった。「うそ寒」が哀れにも可笑しい。

鞆の津の春や遊船いろは丸『茅花流し』

「鞆の津」という古雅な土地に配合するに「いろは丸」という他愛のないネーミングが楽しく、可笑しい。

時雨来て電氣ブランの酔ひ心地『茅花流し』

「時雨」と「電氣ブラン」の取り合わせが絶妙。「酔ひ心地」という下五が骨太だ。

昭和以降の俳句は繊細さや緻密さを追求した。昭和以降の俳句の多様化は前向きに評価したいが、大正以前の俳句の骨太さや大らかさが恋しい。大正俳句の再評価を提唱する加古さんの意見に同感である。その加古さんの句の大らかなユーモアはたしかに「大正」的だ。

加古さんの句を読み解くための参考資料として、加古さんの先師である富田潮児の『夢窓庵随唱』を読んだ。おしまいに、同句集から感銘句を引いておきたい。

波模様ある硝子器や冷し麺

「波模様」というストレートな言い方に惹かれる。

豚の子の砂嗅ぐところ蟻地獄

よくぞ見つけた、と思う。

叢に田舟うずもれ秋の風

野菊咲く野に馴れ子づれ狸かな

「野に馴れ」が練達の措辞だと思う。

亜炭坑あと標のみ猫じゃらし

百寿翁矍鑠と麦とろろかな

鬼城の〈麦飯に痩せもせぬなり古男〉と読み比べると楽しい。

破蓮や水潜る鳥見え隠れ

牛乗せて沼越す舟や水ぬるむ

池跨ぎ建つ亭のあり水草の芽

系図見て踏む父祖の地や鼓草

避雷針つんつん虹の港町

町のあちこちに立つ避雷針を「つんつん」と見た感性に驚く。雷雨の後の「虹」であることも想像される。

わが帽子それも古びて霜の声

古びた帽子から「霜の声」への展開の鮮やかさ。

喪籠りの友に駄菓子の寒見舞

「駄菓子」に、言うに言われぬいい味がある。

大正俳句には昭和俳句にない魅力がたしかにある。鬼城の系譜を継ぐ「若竹」の益々のご発展を祈念申し上げ、拙い筆を擱くことにしたい。

火種のごとき

中村雅樹
（「晨」代表）

加古宗也と言えば、鮮やかに脳裡に浮かぶ句が二つある。一つは宗也の句、もう一つは宇佐美魚目の句である。

春や子に欲し青雲の志　　宗也

思わず声に出したくなるような、気持ちのよい句。『花の雨』に収められている。自註によれば、尾崎士郎の顕彰句会で「立志像の前に立ったとき一気呵成にできた句」であるという。こういう句は、やはり一気呵成に勢いとともに詠まれるべきであって、ぐずぐずと言葉をこね回したりしてはいけない。

何よりも、「春や子に」という句の出だしが魅力的。春と言えば、草木が芽吹き、動物の活動もいよいよ活発になるとき、進学や就職という人生の一転機のとき。それだけに、鬱勃とした闘志の一方で、ややもすると大きな不安に襲われもする苦しい時季でもあろう。このようなときに、「春や子に」と高らかに詠んだのがこの一句。ぼそぼそと心中を吐露したのではない。立志像の前に立ち、世の少年少女、年少の者に「かくあれかし」と期待しつつ、励まし、呼びかけているのだ。子とは、自分の子どものことであろうと、小さく理解してはまったく面白くない。このようにわたしが書けば、多少は説教臭くもなるのだが、句そのものは、昂った心からおのずからほとばしり出たものである。

話は少しとぶが、むかし、「青雲の志」を抱いた若手が集った俳句会があった。「青雲会」と言って、橋本鶏二が指導した「年輪」の句会である。魚目もそこに参加していた。その魚目が後年詠んだのが、次の一句である。

鬼城忌の火種のごとき蜂を見し　　魚目

『紅爐抄』に収められている。これは宗也を詠んだ句であると魚目から聞いた。また宗也本人からも、そのようなことをどこかで聞いたように思う。「火種のごとき蜂」とはうまく言ったものである。火種とは火をおこす際の元となる火。これがなければ、炎は生まれない。燎原の火もここから始まる。俳句においても同じことであろう。そも

そも胸中に火種がなければ、何事も始まらない。句も生まれてはこないだろう。火種とは熱い志である。この「火種のごとき蜂」に「鬼城忌」が付けば、言うまでもなく、村上鬼城の志を継ぐ火種である。その志を絶やすことはできない。

宗也の作品のなかでとくにわたしが好きなのは、衒いなくまっすぐに詠う高朗の句。その分、格調が高く、古格の趣がある。このあたりは鬼城の句を学んだことにあるのかもしれない。詩とは志である、と言われるが、まさにその志が宗也の句の根底を貫いている。

ところで魚目にとって蜂は扱いなれた句材であった。句にしばしば詠んだのであるが、ここで蜂と言えば、「刺す」俳句を、と魚目が言っていたのを思いだす。短刀で急所を一刺しする、そのような句、短い言葉で興趣の中心を深く言い留める句である。ついでをもう一つ言えば、『紅爐抄』には〈大志ありて昼寝欠かさぬ人なりし〉、この句も収められている。宗也を詠んだとは聞いていないが、この句を思うと、悠揚迫らぬ宗也の姿が目に浮かぶのである。

さて、宗也の句に戻ろう。第一句集である『舟水車』には、「宇佐美魚目氏に」という前書きを付けた句が収められている。

雲雀啼くや空海の書の機微にふれ　宗也

魚目は書家でもある。書家であれば、当然空海の書にも学ぶであろう。空海についての造詣も深いに違いない。「空海の書の機微」とは、その墨痕に現れている筆の勢いとか濃淡を言っているのではないと思われる。空海と言えば「風信帖」。その「風信帖」からうかがえる空海と最澄とのやり取り、そこに現れている「機微」であろう。書物を貸して欲しいという最澄の願いを空海は断ったという。平安仏教を創り上げた空海と最澄という両雄の気迫のぶつかる、静かなやり取りを、魚目が熱をこめて語ったのではあるまいか。

宗也は、雲雀の啼く空のもとで、この話を聞いたのかもしれない。あるいは両雄の言葉が宗也には、あたかも天上に囀る雲雀のように聞こえてきたのかもしれない。いずれにしても、この句の奥から見えてくるのは、空海と最澄のそれぞれの熱い志のぶつかり合いである。それぞれ相手を敬いつつ、見事な筆で言いたいことは言うという二人であった。宗也はそこに感じるものがあったのであろう。宗也と魚目との交流の一端をうかがうこともできよう。

以上、まず思いだす二句を取り挙げてみた。話の流れで三句になってしまったのだが。ところが熱い志ということであれば、他にも気になる句がいくつかあるのだ。

花の雨熱きものいま身辺りに　宗也

『花の雨』所収。「熱きものいま身辺りに」の「熱きもの」とは何であろうか。宗也は簡単に、「花の雨は情熱をむしろ掻きたてるようだった」と簡単に書いてあるのだが、これでは少々ものたりない。自註を離れてあれこれ想像するのも読者の特権である。

もしかすると、熱い茶の入った碗を傍らに置きながら、桜に降る雨を見ているのか。しかし、雨が降っていて少し冷えを覚えるから、「いま」何か熱いものを、というのではあまりにも貧弱な想像力であろう。このように考えたのでは、それほど面白い句にはならない。宗也は「花の雨は情熱をむしろ掻きたてる」と言ったが、この句に言う「熱きもの」とは、やはり心あるいは志に関わるようなものに違いないと思うからである。

句中の「いま」とは、単なる現在の「いま」ではないであろう。「花の雨」に挑みかかるような、突き刺さるような「いま」である。「花の雨」だからこそ、何か切羽詰まったものが「いま」宗也の心にある。句を詠むという営みの、本質に関わるような何かであろう。勝手に想像すると、書物が机上に置かれているのかもしれない。たとえば、「花の雨」にかこつけて言えば、「風雅」について「見るところ花にあらずといふことなし、思ふところ月にあらずといふことなし。像花にあらざるときは夷狄にひとし、心花にあらざるときは鳥獣に類す」と述べている芭蕉の一本。

『雲雀野』に次のような句がある。〈仏頭の命は眉間花の雨〉。「仏頭の命は眉間」とは、白毫のある眉間こそ仏頭の命であるという意味であろう。興福寺にあるかの仏頭を思うのであるが、これも熱きもの。先ほどの句に詠まれている、身辺りにある熱きものとは、あるいはこの仏頭かもしれない。さらにこの「仏頭」の句の隣には、〈花冷の膝の上で書く一行詩〉。この一行詩も熱きものである。宗也の句に触発されて、あれこれ想像してゆくと、おのずから「熱きもの」に人影を、またその人の「志」を感じるのである。

男晴れとは天抜けて富士開く

『雲雀野』所収。「富士開き」と前書き。自註によると、「『男晴れ』とは快晴のことで、五千石さんのイメージから生まれた造語」とか。抜けるような青空と、その天を突き抜けるように聳える富士。「天抜けて」がその上の言葉を受けつつ、その下の「富士」にもかかっているという大きな句である。富士の頂を覆っていたものが一気に雲散霧消したかのような、まさに「富士開き」に相応しい句。

それとともに、晴れ晴れとした五千石の笑顔が脳裡にうかぶのだ。〈山開きたる雲中にこころざす〉と詠んだ五千石への挨拶句でもあろう。自註を読んだから言うわけではないが、宗也のこの句からはある種の「男気」を感じるのである。尾崎士郎の『人生劇場』でもあるまいが、「雲中

にこころざす」という五千石に意気投合しているようだ。志を同じくする五千石との友情は言うまでもない。宗也という俳人は、人並以上に熱い心を持った俳人であるように思う。

〈詩とは熱風白秋も朔太郎も〉。『雲雀野』には、このような句も収められている。季語は「熱風」。白秋という、いかにも冷ややかでスマートな名前の詩人も、何となく軽快で小気味のよい印象を与える名前でありながら、母や妹から終生グズ呼ばわりされた、朔太郎という詩人も、その詩は熱い魂があってこそ。「詩とは熱風」という大胆な措辞が、詩に関わる宗也の胸中を垣間見させる。なお、白秋とは秋のことでもあるが、「熱風」につづく「白秋」によって、言葉のうえでの面白さが醸し出されている一句でもある。

宗也は愛知県西尾市に生まれ、学生時代のほかはこの土地を離れたことがない。尾崎士郎や吉良仁吉といった血の気の多い人物もこの地の生まれである。かりに宗也がこれらの人物をよく知ったからと言って、ただちに何らかの志が芽生えてくるというものではないように思う。志が志として芽生え、それを大きく育むのは、人ではない、より大きなものによってである。

麦踏んで麦の青さに吹かれをり　宗也

『舟水車』のこの一句は宗也の「原風景の一つ」。「広びろとした麦畑の青さは生命力そのものだ」と書かれている。志とは、「生命力」としての「原風景」から生まれてくるもの。それはあるときは麦の青さであり、またあるときは黄金色に実った麦畑である。「原風景」は最も近くにあることによって、わたしたちには忘れられやすい。しかしわたしが忘れていても、その風景はわたしを忘れてはおらず、突然にわたしの胸中に姿を現したりするのだ。それは詩人にとって、あるいは俳人にとって見えない原点のようなものである。

故郷とはそういうもの。故郷とはたんに人が生まれ育った場所を言うのではない。それは何よりも言葉の生まれる場所であり、そこから詩が生まれる豊かな土壌であろう。西尾は宗也の故郷である。宗也の作品には旅吟も多い。どこで句を詠むにしても、その句の背後には故郷の平野と海浜が控えているのだ。

志とは、まさにこのような故郷の「生命力」が、その人において現れている、その力を言うのかもしれない。たんに鬼城や富田うしほ・潮児の志を継ぐ、ということだけで説明されるものではないように思うのである。

小さな「火種のごときもの」の下には、大きなマグマ溜まりが潜んでいる。

繰り返される出会い

黒岩徳将
（「いつき組」「街」同人）

加古宗也既刊五句集を読み、一句の重心が低く、大きく構えた安定の句群が作家の特徴としてその後も貫かれていると捉えた。第一句集『舟水車』の序句は〈鰡とんで重陽の海真つ平ら　富田潮児〉。海への愛を感じさせる名の師から、凪の穏やかさを称え、重陽という息災を祈る季語の設えられた挨拶句を与えられた宗也40歳の出発の心意気はいかほどのものであっただろう。宇佐美魚目氏の「宗也さんは偉丈夫、それに今がさかりの若さ。」「あとは作品に放胆と無頼が加わればよい。もうそれだけでよい。」という帯文と合わせて、帆がしっかりと貼られた船が想像された。

「舟水車」は馴染みがない言葉だと思うが、句集あとがきに、「ガラ紡船」ともいい、西尾市の織布業の原初的形態と宗也解説がある。文化遺産オンラインのサイトで「紙本著色行く春図〈川合玉堂筆／六曲屏風〉（1916）」でその姿を見ることができる。穏やかでゆったりとしており、かつ生まれ育った土地への敬意を忘れずに進みたいという思いが明確である。宗也は土着の徒・旅人の俳句の両輪を追い続けている。

貝寄風やぽかりと巨船現はるる

たとえば草田男の〈貝寄風に乗りて帰郷の船迅し〉の逸る気持ちと比較しても、「ぽかりと」「現はるる」の驚きを体全体に受け止め、ユーモアが染み出していくような体感がある。

『舟水車』はゆるやかな速度感と気力の横溢を両立させる。

　　戞々と鳴り改暦の掛時計

劈頭句。新年を迎えるという意味での「改暦」だろう。「戞々」は堅い物の触れ合う音がするさま。オノマトペのような趣もありながら、この漢字の表記が妙に形式ばった気がして可笑しい。言わずもがな「か」の刻み方が楽しい。周りの人と迎える新年の気分を、時計の秒針という物に集約させている。

　　蟻穴を出づ狛犬は陶づくり

　　陶榻のころげ夏芝青々と

質感に対する目の向け方の細やかさを見るに、宗也は陶器への愛着が強いのだろう〈素材としては他に「石」も多い〉。〈せめぎあふ陶都の軒や走り梅雨〉の「陶都」は隣の

県の岐阜県多治見市なのだろうか。軒を「せめぎあふ」と描写したところに町の活気を感じさせる。道にひしめく軒が印象的で、雨もほろほろと感じられる。

霊峰の影を引き込み野火猛る
水韻をひき寄せ田芹青むかな
嘘して向うに月のありにけり

一、二句目。視線の先にある畏怖の対象である自然の原風景に神経をとどかせて、自分の近くのものと合わせて空間にとりこむことで詩として昇華しようとする。立体感を表すための骨法と言えるような作りだが、リズム感が盤石でかつエネルギーが込められている。そんな作者が三句目のようにふっと嘘をしたときに気づいたときの月の明るさにも気づくことに、俳句に向き合う姿勢の余裕さと、ポエジーに対する射程の広さを感じさせる。心安らぐ思いがあるのだろう。

春の雷乾坤ほのと匂ひ出す

万物の生命の動き出しに対する心の寄せ方が大らかであることが特徴である。巨船の句と語法が似ており、このあたりの句が初期の真骨頂と言えるだろうか。この句を下敷きに「舟水車」を読んでいくと、宗也の鼻の効き方は〈禅堂や花栗山気濁らしむ〉〈燈台の白し四温の日の匂ふ〉などに見られるように、鋭敏かつ範囲が広い。

日の匂ひ甘し落葉の潦

極め付けはこの句であろう。簡明な調べに、読めば飴を口に含むが如くその味わいが広がる。冬の水たまりが冷たすぎず、快い。鼻から舌へ、そして足を通った皮膚感覚へ。移行の感覚に拙速を感じないのは、調べのなだらかさがあるからではないだろうか。宗也句が感受の旅であると捉えて他の句も読み進めていきたい。

傘たたむとき骨鳴れり木の芽寒
啓蟄のいま山鳴りか耳鳴りか
蝶乱舞して甘藍の玉を解く
黄砂降るとき神鏡のくもるとき

状況同士の出会いが一句に溶け合うように合わさることで、俳句でしか表すことのできない重層性を表現したいようにも思われる。一、二句目の方が三、四句目より想像の余地や膨らみがあるのではと考える。自己の肉体に引きつけて詠むことでこの世の出来事を自分ごととして捉えているというだけではなく、季語と措辞のイメージの距離感が、俳句によって世界と共鳴するのに適していると思うからである。〈木の芽寒とは骨あげしあとの背〉が平成五年作にある。芽吹くころの寒さは季節の変わり目を強く感じさせるが、肉体や死が一回性のものであるということは、この時期にいっそう感じられるのかもしれない。自らの骨と、他者の骨どちらにも同じ季語をもって反応する感受の仕方に、優しさを感じる。

第二句集『八ツ面山』。題は宗也の故郷の丘の小山ということなのだが、そのイメージに反して旅吟が多く、あち

こちを移動するその活発さに驚く。宗也句集に限らず、日本各所をふんだんに見、感動を書きつけるスタイルの句集がこの先何年生み出され続けるだろうかという心配すら脳裏にうかぶ。

誰が言い出したかはわからないが、句会での批評の言葉に「絵葉書俳句」という言葉がある。ありのままの風景を描くことに終始してしまい、一句から書かれている言葉以上の強い感動が呼び起こされないという批判を言うのだろう。旅吟・吟行は一般に「絵葉書俳句」に陥ってしまう恐れがあるように思うのだが、宗也がどう心を砕いたかを見てゆく。

春に口開け入定の岩祠
胡座して掻き込む瀬田の蜆飯

一句目は前書き「小浜空印寺　二句」の後者。祠を擬人的に捉え、春という大いなる空間・概念の捉え方が入定の空疎感に合わさる。「口」が、人魚の肉を食べて不老不死の力を得たという八百比丘尼の口も想像させ、春らしくて切ない。言葉の象徴的意味の膨らみを伴うからこそ、訪問報告を超えた空気感、臨場感がある。二句目、瀬田蜆を「胡座」のくつろぎと「飯」に乗せることで堪能する。瀬田蜆が大粒であることが「胡座」のくつろぎに照応する。句の安定感は読後感の安心に繋がる。優れた旅吟というのは、あくまでも己が傍観者や通りすがりの者でしかないという立場から、その土地に根ざす人や物に敬意を表しつつ、出会いの感動を見逃さず、自身の中に取り入れ、その鮮度を保ったまま一句に小細工なく出すことで生まれるのではないだろうか。加えて、宗也は風物との出会いを軸にしているが、自身の奥にある世界観の表現のために対象を利用しているようには感じられない。吟行対象が持っている意味から大きくははみ出した詠み方はされておらず、それでいて感受はしているという姿勢が全体の基本である。

仏教をはじめとした古めかしい素材を堂々と詠み込む一方で、（当時の）新素材への目配りがないわけではない。

木の芽谷いまハーレーの一団が
インデアンテント一張端午の日
みんみんやスケボー淀みなく辷る

これらの句には、季語の古い歴史的側面というよりは現代的風俗との呼応があるが、作者が新素材をおそるおそる試そうとしている様も含めて微笑ましさを感じられる。

第三句集『花の雨』。劈頭句〈双塔の影を一つに雁渡し〉の言いしれぬ寂寥感や、宇佐美魚目も傾倒した香月泰男展への心の動きを直截に表現した句、イタリア吟行が印象的ではあるが、句集題の艶っぽさに合う落ち着いた句が見逃せない。

鷹鳩と化し陶片はトルコ瑠璃
膨らみある調べや韻の響き、リズム感の堅牢さは健在。
でんがくの串干してあり萩の茶屋

また打つのに使う串を干す庶民的生活感は、行ったことがないのに懐かしい。

一筋の畦に七草摘み足りし

簡明な表現に小さな驚きを寿いでおり、良き年を願える。第四句集『雲雀野』では『舟水車』のころの緊張や張りがやや薄れ、一句の情報量が少なくなり、更に挨拶性が増す。

吾亦紅あちやとだんべの国境

「白根山は信濃と上州の国境」という但し書きがある。「あちや（あちゃ）」は、「あら」のような感動詞か。「だんべ」は推量か。特に意味を限定せずとも、方言の境を意識しているということだけで面白い。吾亦紅の揺れがノスタルジーを誘う。

雲雀野を来て円空の微笑仏

宗也句でも屈指の長さの前書きが付されている。前書きにある通り、西尾市浄名寺で発見された円空仏をインターネットにて検索して写真を拝見する。鼻が大きく柔和であり、さきほどまで堪能した雲雀の声も木仏に快く跳ね返る。

句集内でも同じ地域を複数回訪れている。周期の長い定点観測と言えるだろう。たとえば土地を再び訪れるとき、一度目の挨拶を作者は思い出すはずだ。二度目は違う趣を加えてさしあげたいと思うのではないか。

振り返るとき余呉日照雨春の虹

第二句集『八ツ面山』に〈鴨の鍋つついて余呉を身内にす〉がある。すでに親しいものと思っている余呉の湖に反射する日照雨が贈り物をいただいたように見えたのだろう。

最新句集『茅花流し』。あとがきには芭蕉の「物の見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし」を愛唱しているとあった。「言ひおほせて何かある」ではなくこちらを採用していることに、句の印象から納得した。

うぐひすや只管打坐とは退屈な

二百十日孫と楽しむ指相撲

物と同時に、堪えきれずに言いたかったという思いが溢れる句が見られた。特に指相撲の句は、その慈しみに思わず口角が上がりそうだが、風の名を冠した句集の掉尾が、風鎮めの意を含む季語を用いることに静けさや祈りをも覚える。

鬼城忌の山河きちきちばつた飛ぶ

文学の森の書斎訪問ＹｏｕＴｕｂｅインタビューにて、宗也は鬼城句〈ゆさ〳〵と大枝ゆる、桜かな〉〈紅葉すれば西日の家も好もしき〉などを挙げて、鬼城が物の本質を捉えていることを指摘する。広やかな時空を抱えた大自然の一点に小さな命が、童心を備えた己の鳴き声をもって躍動することに宗也は鬼城との繋がりを見ているのかもしれない。

俳句が、観光パンフレットや博物館の解説・キャプションを超えた詩情を生み出せるなら、それは何の力によって生じるのかということを考えざるを得ない句群であった。通念や類想とのぎりぎりの戦いも終わらないだろう。自己の美意識をことさらに開陳して飾り立てる句はなかったことに気づいた。多くを語らないことも、また作者の美学なのではないだろうか。

加古俳句の音楽性 ―『舟水車』「新年・春」から―

安里琉太
（「群青」「滸」同人）

比較文学者の川本皓嗣は、芭蕉の句を評しながら俳句の余白に関して次のように述べている。

まして俳句のような短詩型は、句の余白を埋めようとする読者の協力なしには、ほとんど成り立たないジャンルだと言ってよかろう。天下の名句として知られる、

古池や蛙飛こむ水のおと　芭蕉

にせよ、

此道や行人なしに秋の暮　芭蕉

にせよ（これら二句も、文法的には前の二句と同じ不完全な「言いさし」の構造をもっている）、もし表面上のメッセージだけをそのまま素直に受け取って、それで事終われりとするならば、句はほとんど何の意味もない雑談や独り言の断片でしかなくなってしまう。古い池に蛙が飛び込んで、その水音が聞こえたからといって、それが一体どうしたというのか。晩秋の日暮れ、この道は人っ子一人通らない――こういう発言をする機会はふだんいくらもあるだろうが、たとえそう言ったとしても、ふだんなら、相手が聞いてうなずいて、それでおしまいということになる。

このように一見ありふれた発話が、古今にすぐれた俳句として尊重されるのは、読者の協力があればこそである。言い換えれば、作者も読者のそうした協力を予期し、それを計算に入れた上で句を作るのであって、周知のように、こうした句が外国語に訳されると、読者からの適切な協力が期待できない場合の「詩」の無力さが、にわかに露わになる。

『俳諧の詩学』（岩波書店・二〇一九年）

括弧内の「これら二句も、文法的には前の二句と同じ不完全な『言いさし』の構造をもっている」とは、同じく芭蕉の〈蛸壺やはかなき夢を夏の月〉と〈閑さや岩にしみ入蟬の声〉の二句を指している。川本は本論の中で、俳句の作者の仕事は「いひおほせる」ことではなく、マラルメの

言を引きつつ、読み手を「夢見させる」ためのことばの装置を組み上げることにこそあると述べる。

興味深いのは、上五の「や」切れの句について、川本は「不完全な『言いさし』の構造」（「や」で投げ出し、体言止めで突き放すという素っ気なさ、文としてとしてのまとまりの悪さ）として受け止めている点である。これは西洋の詩が基本的に長いものであって短詩の試み自体が珍しく、それより更に短い俳句、いわば俳句のその短さを念頭においた受け止め方であろう。俳句の短さはたとえば、坪内稔典の「片言的な表現は、その単純化や誇張、思いがけない比喩などにおいて、固定しがちな私たちの思いや感覚をゆさぶる。俳句形式は、そういう片言的な表現の活力を、最大限に発揮させようとする装置のようなもの」（「片言の抒情」『俳句の根拠』静地社・一九八二年）という主張にも関することであるし、また岸本尚毅が「短歌にも上五を『や』で切る例はありますが、俳句ほどの切れ味は感じません。俳句の場合、ただでさえ短い十七音をさらに切り刻むように『や』で切ります。短い形式を切れ字でさらに短く寸断するのです。〈略〉三十一音の短歌は言葉の『しらべ』を生かしつつ、上の句と下の句から成る相応の長さを持った構造によって一個の言葉の秩序を作り出します。しかし十七音の俳句には『しらべ』を成すほどの長さはありません。『しらべ』を奏でるには俳句は短すぎます。俳句の長さ（短さ）は、歌い始めたらすぐに終わる歌のようなものです」（『俳句の力学』三樹書房・二〇〇八年）と述べるように、短歌と比べた際の切れ字の働きとも関連することであろう。

川本の論に対してもう一つ興味深く感じるのは、その中で「一見ありふれた発話」が詩としていかに昇華するのかについてを述べたり、その言を引用したりして示唆されるマラルメの言説である。やや遠回りになるが、このあたりを踏まえるためにも、マラルメの「詩の危機」の有名な一節に触れておきたい。

「私が、花！と言う。すると、私のその声がいかなる輪郭をもそこへ追放する忘却状態とは別のところで、認知されるしかじかの花々とは別の何ものかとして、あらゆる花束の中には存在しない花、気持のよい、観念そのものである花が、音楽的に立ち昇るのである」

『マラルメ全集2ディヴァガシオン』筑摩書房・一九八九年

私たちが「花」という言葉を発する時、それは現実の花を示すことが日常的な言語活動のおおよその前提となっている。ただしマラルメはこうした日常的な言語とは異なる「詩的言語」（韻文などの呼吸にあらわれ、意味形成以前の言語の深い次元から発せられる「声」とでも言おうか）を

挙げ、そうした現実の事物に対する指示作用を止め、「花」という音声が音楽的に作用して、その都度未知の花を立ち昇らせることを目指した。

この地点において、「一見ありふれた発話」が詩的に作用することに際して、詩における調べや語の連なりが、あるいは短歌の短さにおいてもその調べが、ただ俳句という詩の形式においては、その短さと切れとを念頭においた場合、さてどう考えるべきだろうかという問いは重要なものではないか。

＊

そのような問いを措定したあとに、いま私は、先に引用したマラルメの「音楽」という言葉から連想して、橋本榮治が加古俳句について、そのハーモニカ演奏の腕前に絡めて評した論を思い浮かべる。

ところで、ハーモニカ演奏は俳句とは一見関係なさそうにみえる。だが、高濱虚子が松山藩の能に繋がりのある家の出であり、その中兄が雑誌「能楽」を発刊し、次男の池内友次郎が東京藝術大学の音楽部の教授であったように、また、弟子の松本たかしが宝生流の能役者の家の出であるように、調べというものに注目すると、音感のよしあしは俳句と密接な関連がある。加古さんの第一句集『舟水車』をそういう目で見ると、

麦踏んで麦の青さに吹かれをり
啓蟄のいま山鳴りか耳鳴りか
黄砂降るとき神鏡のくもるとき
灯にすがり灯にはじかれし火取虫
秋燕の舞ひ陶の町海の町

を始め、対比や並列、反復など顕かに調べを優先して句を成している作品が多い。音感に鋭い方でないとここまで腐心しないであろう、という数になっている。実景から得た感動を言葉に換える過程に、音楽の要素が入る余地がある。

「加古俳句の音楽性と芸術性」『俳壇』二〇一〇年九月号

無論、ここで述べる「音楽」がマラルメの述べるそれとすれ違っていることは分かっている。ただ、橋本が指摘する「対比や並列、反復」をはじめとする述べ方で「調べを優先して」いる句は、第一句集『舟水車』はもちろん、この論考以後に刊行された第五句集『茅花流し』に至るまで見られる特徴であることは注目したい。加古俳句を読む時、俳句の短さにおいても、たしかに調べを優先してことばの装置を組み上げることはあるなと強く感じさせられるのである。

そして、その調べについての加古俳句の特徴を十二分に踏まえた上で、改めて第一句集『舟水車』から読みなおす

時、私が殊更興味深く思ったことは、上五の切れについてである。

加古俳句において上五に切れを設えた句、その中でも「や」ではっきりと切った句は多く印象的である。たとえば、『舟水車』の冒頭の章「新年・春」の場合、その八十六句中、上五の切れの句は、仮に上五の切れと判断していいか迷うものを抜いたとしても二十八句ほどに上る。いわば、章の四分の一以上となる。また、その中でも特に印象深いのは、

歌留多取るや去年の余燼を払ふごと
目貼はぐや日脚の中の薄埃
雲雀啼くや空海の書の機微にふれ
鳥交るやすぐそこに立つ営林署
鳥交るや伝通院の墓所

などの上五の字余りを許容しても置かれる「や」である。川本が述べる「不完全な『言いさし』の構造」（「や」で投げ出し、体言止めで突き放すという素っ気なさ）の句もここにはあり、またそれだけに留まらず、字余りによって調べを侵してさえいる。

橋本が指摘したような調べを優先してことばの装置を組み上げる加古俳句の傾向から考えれば、この「や」の用い方は非常に特徴的に感じられる。これが「や」の、詠嘆を重んじてのことか、それとも切れを重んじてのことか、あるいはその両方に留意してのことなのかは判然としない。ただ、この「や」の用い方には、調べよりも優先して組み上げられた、そんな何か意思らしい手つきを感じさせられるのである。

また、加古俳句の「音楽性」を考える際、思うにそれはこれまで着目したような述べ方、叙法にのみ終始するのではなさそうである。それは時に漢語の活用によっても奏でられる。

霊峰の影を引き込み野火猛る
水韻をひき寄せ田芹青むかな
春の雷乾坤ほのと匂ひ出す

同じく『舟水車』「新年・春」から引いたが、いずれも漢語の音の締まりが句の響きに作用しており、またその響きがそのまま季語に対して〝重さ〟となって纏わされている。前掲書の岸本の言を借りるならば、「俳句には『しらべ、メロディ』より『響き』あるいは『ハーモニー』という言葉が似合」うというところだろうか。

〈論文中敬称略〉

《特集》俳句一筋、鬼城一本

鬼城・うしほ・潮児から宗也へ

田口風子

俳句一筋、鬼城一本――

うしほ氏を語らんには、この八字のみで全貌を盡くしたりとするのであります。多年旧交の氏なれば、憶ひ出は多々複雑で幾多の挿話を並列し得べきも、其等を掩ひ去つて、一途一徹の氏に冠するには、右の八字に如かずとするのであります。敢へて、これを新タな全句集の序言とします。

『好日』序　千甕老人識（日本画家・小川千甕）

「若竹」は本号で一一〇〇号を迎えた。この綿々と繋がれた「若竹」は、富田うしほの「俳句一筋、鬼城一本」から始まったといえるのではないだろうか。

村上鬼城・出自

鬼城は慶応元年（一八六五）、七月二十日（旧暦五月十七日）鳥取藩士小原平之進の長男として江戸藩邸に生まれる。本名荘太郎。小原家は五百石の知行取りであったが、三代養子が続いたため、藩の定めによりその都度五十石ずつ減ぜられ、荘太郎の祖父文左衛門の代には三百五十石になっていた。しかし、この代にして漸く念願の嫡子平之進が生まれた――と、

これまでの鬼城の出自については右のように伝えられていたが、平成二十七年八月号「若竹一〇〇〇号記念号」に発表された「村上鬼城出自考」（井田信也・大妻女子大学名誉教授）に小原家五百石説の新たな研究成果が発表された。井田信也氏は、小原家は禄高三人扶十八俵、生まれは神田ではなかったか、としている。従って鬼城の出自について、この稿では井田信也説によりたいと思う。

そもそも小原家五百石伝承は、鬼城が俳誌「ホトトギス」（大正二年九月号）に寄せた自伝的写生文「夏書」に

余の家は、代々養子で継いで来たのだ、来る養子にも、来る養子にも、子がなくつて、養子から養子に伝はつて、祖父に至つたのだ、祖父も養子だ、其間、藩の法で、幾代となく、五十石づゝ減らされ、今後、十代養子すると、断絶するところだつていつた。

と書いたことに端を発するようである。

なぜ鬼城は五百石が三百五十石になってしまった、としたのだろうか。それは、親の言うことを案外素直に信じてしまったのではないかという説がある。

『鬼城句集』に序を寄せた虚子が「同君が高崎藩の何百石といふ知行取りの身分でありながら（後略）」と鬼城の出自に敬意を表したことが、伝承にいわばお墨付きを与えたかたちになり、また『鬼城俳句俳論集』の年譜慶応元年（一八六五）の項に

五月十七日（新暦七月二十日）鳥取藩小原平之進長男江戸藩邸に生る。本名荘太郎（ショウタロウ）、祖父小原平右衛門は大阪御蔵奉行を勤め家禄五百石を受けた。三代養子が続きたるため鳥取藩の家風として養子の都度五十石を減ぜられ、父君平之進は三百五十石の俸禄を受く

と掲げられたことが、その後のすべての鬼城出自の典拠となったと考えられる。

というのが、井田信也氏の「村上鬼城出自考」である。

鬼城高崎へ

明治五年、父平之進は廃藩置県後、江戸を離れ群馬県前橋に県史として移住、翌六年、一家は高崎に住居を移し永住を決意した。ここで父平之進は高崎区裁判所の代書人となる。明治八年、荘太郎こと鬼城は母方の村上姓を継ぎ村上源兵衛の養子となった。鬼城は高崎に移り住み終生この地を愛して暮らしている。ここで鬼城の句をあげてみる。

月さして一間の家でありにけり　　鬼城
榛名山大霞して真昼かな
雹晴れて豁然とある山河かな

聾鬼城

明治十五年頃は自由民権運動が盛んで、高崎においても同様であった。鬼城も弁論大会などで活躍、彼の演説集「紅顔」が今も村上家に残っている。鬼城は陸軍士官学校一次試験に合格、また明治義塾法律研究所で学ぶも耳の疾患（突発性難聴）により断念したと周囲には語っていたようだ。だが、それだけではなく家の貧乏もあったといわれている。貧しいゆえに父の後を取る形で裁判所の代書人に甘んじたのだった。

村上鬼城

けさ秋や見入る鏡に親の顔　　鬼城

と詠んだ。その父をかばったのではないかと思われる。

先天性ではなく後天性な耳疾により聾となった鬼城は落款も「大聾鬼城」「聾鬼城」を用いたりもした。

世を恋うて人を怖るゝ余寒かな　鬼城
治聾酒の酔ふほどもなくさめにけり

鬼城とホトトギス

鬼城の「ホトトギス」への投稿は明治三十二年一月号からで、河東碧梧桐選に次の句がある。

埋火や遺孤を擁して忍び泣く　鬼城

鬼城三十四歳。幼子二人を残して妻は逝った。無邪気な幼子の寝顔を見る鬼城の胸の張り裂けるような心情である。鬼城の「ホトトギス」のデビュー作である。鬼城はこの後「ホトトギス」俳句欄に四年間名を連ねた。

浅間山の煙り出て見よ今朝の秋　鬼城

この俳句欄は間もなく立ち消えとなり、明治四十五年七月号から改めて虚子による雑詠欄が復活した。そして、大正二年四月、高崎の俳句大会で虚子の天位に採られたのが、

百姓に雲雀揚りて夜明けたり　鬼城

である。鬼城四十八歳。この日虚子は鬼城を激賞したといわれる。この後、大正三年一月号から、同七年七月号にかけて虚子選雑詠欄で十八回巻頭を得た。大正期の「ホトトギス」で巻頭を競ったのが飯田蛇笏、渡辺水巴、前田普羅、原石鼎である。「ホトトギス」第一期の黄金時代を築き上げた五人であるが、圧倒的にスターの座にあったのが鬼城であった。また、虚子は雑詠入選句をさらに厳選した『ホトトギス雑詠選集』を大正十一年に刊行したが、入選句の上位収載者は左記の通りである。

村上鬼城　一五一句
原　石鼎　五九句
飯田蛇笏　一五句
前田普羅　一四句
長谷川零餘子　六句

この雑詠選集に所載された鬼城の句は一五一句、総体の一五％強を一人の俳人が占有するという驚異的な評価を得たのである。虚子の選句基準からすれば、この時期、鬼城は「ホトトギス」派の俳人の頂点に立ったといえるだろう。

五月雨や起上りたる根無草　鬼城
冬蜂の死にどころなく歩きけり
己が影を慕うて這へる地蟲かな
春寒やぶつかり歩く盲犬

鬼城は多くの境涯俳句を詠み開花させたが、その境涯と

からめて語られ過ぎた感はある。また「耳疾」、八女二男をかかえての「貧」「老い」と、その境涯をねたむ声も出たほどだ。鬼城自身も「俳句について考えるに俳人にして境涯さえあれば、満目ただ之れ俳諧にして、苦心も糸瓜もいらないのである」などと述べている。だが、鬼城の句のすばらしさは境涯のみにて生まれたものではない。格調の高さと骨格の正しさ。虚子は「軽快、繊細、荘重による強い主観が常に背景をなし、錚々たる響きをなしている」と評している。ところで、境涯の一つとされた「八女二男をかかえて貧窮の生涯を送った」ことは別の方向から捉えれば、案外と豊かで幸せそうである。

美しき娘の手習や春の宵　　鬼城
男子生れて青山青し夏の朝
たんと食うてよき子孕みね桜餅
春逝くと娘に髪を結はせけり

貧しさの中でも娘、息子全員に高等教育を受けさせるなど、子どもの成長を殊のほか喜び、家族を細やかに気遣う父の姿がある。

富田うしほ

この頃、三河の地で「ホトトギス」を夢中で読んでいたのが富田うしほである。うしほも虚子や鬼城のように小説を志しながら、経済的なことも重なり、その道を断念しなければならなかった。それでも文学から離れられずにいたうしほがのめり込んだのが「ホトトギス」の鬼城の句だったのである。大正二年、鬼城は頭角を現し始めたころで、まだ未知数の俳人だった。だが、うしほはいち早く鬼城の才能を信じ、句を信奉し、俳句の師は鬼城ではならないと入門を強く望んだのである。

鬼城への入門

うしほは大正三年、早くも鬼城に入門した。といってもスムーズに入門できたわけではなく、そのあたりの経緯をうしほは次のように語っている。「一回目の懇願には、鬼城は『門人はとったこともないし、その器でもないから』と断られた。折り返し再び頼むも『前に云った通り』と簡単な返事があった。三た

右からうしほ、潮児

び依頼するとやや躊躇したが、真情を述べて歎願したら『それほど云ってくれるなら今後友人として相談に乗ろう』という返事が来てやっと入門が許された」。これをうしほは「押しかけ門人になった」と謙虚に述べている。うしほ二十五歳。その後、鬼城はうしほを中心とする俳誌「山鳩」の雑詠選者となり、極端な出不精の鬼城が西尾を七回も訪問した。鬼城の西尾への心の傾斜の表れといえよう。鬼城とうしほのゆるぎない師弟関係は昭和十三年、鬼城が亡くなるまで続く。

「山鳩」

大正五年一月、うしほが創刊した「作楽俳壇」は、途中「サクラ俳壇」、「サクラ」、「佐久羅」と通巻十三号のうち四度題字を変えた。そして、大正六年二月号から浅井意外、津川百竹、太田可香、沼田の金子刀水、伝田専人らが加わり「山鳩」と改題し、昭和七年九月終刊まで、一地方俳誌としては稀にみる発行部数と内容の充実を誇った。改題に際して、意外、うしほ、百竹、可香が各自考えた中から、三、四を鬼城の許に送って選択を乞うた。ほどなく鬼城は次のように回答した。

山鳩の名が最もふさわしいかと存候。温健なること鳩の如く……

そして鬼城が題字「山鳩」を揮毫した。「山鳩」は、浅井意外、津川百竹、太田可香、鈴木狂石、富田うしほが同人となって華々しく幕開けをしたのである。

鬼城の「山鳩」への力の入れ方は尋常ではなく、毎月巻頭論文を書き、雑詠の選をし、選者吟五句を送ってくるほどの力の入れようであった。

鬼城の俳論は「ホトトギス」を除けば、主要なものはほとんど「山鳩」に発表されている。『鬼城俳句俳論集』などを見れば、鬼城は自由に筆を執っているようである。「ハト」と愛称して鬼城が力を入れたのが「山鳩」である。

「山鳩」の鬼城の厳選

大正十年代に入ると他誌に例を見ない鬼城の厳選に「山鳩」の同人たちの鬼城への不満がふつふつと湧きあがってきた。そして鬼城の雑詠選をめぐる同人たちの対立が深刻なものになっていった。

鬼城は七回の西尾訪問により、多くの友人知己を得たが、殊に俳句に関しての厳しさは相手がいかに親しい者であろうと終生変わることがなかった。それは「山鳩」の雑詠選の結果に表れている。鬼城は「よい句ばかりなら百句が百句とも選出する」と言っていたというが、因みに、昭和五年三月号の雑詠投句者は、百七名でうち入選作者二十二名、その入選句は二十三句である。投句総数に対する入選割合は僅か二・一％に過ぎなかった。この時は、知名の作家の

大部分が落選したのである。

富田潮児「若竹」創刊

昭和三年六月、「若竹」は富田潮児を中心に十代の少年たちによって、雑詠選者に浅井意外を迎え（意外は昭和五年二月号で選者を辞退）「山鳩」の子雑誌として創刊された。少年たちというのは当時、父富田うしほが経営していた印刷所の少年工員たちで、潮児・たけを兄弟と少年たちは毎晩のようにうしほの指導で句会をしていた。その延長線上で俳誌創刊の情熱が噴出してきたのだ。

十数年来「山鳩」を通じて鬼城一辺倒であった西尾俳壇も鬼城の厳選を巡って分裂の危機が迫っていた。

「若竹」の創刊によりその勢いがさらに加速した。一方、全国の鬼城ファンが「若竹」の創刊を知って続々と申し込んできた。そのことで一層「山鳩」の同人間の対立が決定的になってしまい、うしほは昭和五年十二月「山鳩」の同人を辞去することになった。うしほが辞めた「山鳩」は、昭和七年九月号で休刊を告知したものの、そのまま廃刊となった。十六年間西尾俳壇を大きく育んだ「山鳩」は静かに消えていった。

「若竹」という名は鬼城が付けてくれた。少年たちの熱意に感動してすくすく育つ「若竹」のようにという思いであり題字も鬼城が揮毫した。「若竹」はそういう少年たちの情熱の中から生まれたのである。

潮児の失明

主幹となった潮児は十七歳、この二年前、東京府立工芸学校印刷科に入学したが、まもなく腹膜炎に罹り、その後病状が悪化し帰郷して治療に専念するが失明してしまった。

当初「山鳩」同人であるうしほは潮児たちの俳誌発行には難色を示していたが、「若竹」の創刊を許すきっかけになったのは、この潮児の失明にあった。失意の息子を不憫に思い、励まそうという思いだった。潮児は「一度黄泉に旅だったが、諦めきれない父うしほの一喝でこの世に戻ってきた。それと引き換えに目の光を失った」と言っている。

盲子の膝撫でている袷かな　　うしほ

「ひとの親となり、生き先長き我が子の、不憫や、明を失してあやめもわからず、袷着て、悄然と膝を撫づる姿を、眼前に見る時の親の心はいかであるべき。かかる時、誰彼をわかず、人間の本心を露呈して明鏡止水の心境に居る。この心境こそ、俳諧の一大事にして、この心境に生る、俳諧、即ち、心の俳諧なりと知るべし」と鬼城はうしほ句集『好日』の序に書いている。

俳号

富田うしほは明治二十二年一月生まれ、本名兼三郎、若いころは小説家を志し上京して、徳富蘆花の指導を受けていただけではなく、「潮花」というペンネームを貰っていた。帰郷後すぐに結婚、経済的なこともあり小説家を断念、その後「潮花」の「花」を蘆花に返し、俳号を「うしほ」とした。

富田潮児はうしほの長男として明治四十三年に生れる。本名良二。潮児の俳号は「うしほ」の息子、即ち「潮」の「児」という意味の潮児である。

潮児の東京遊学

大正十四年、潮児十五歳、東京府立工芸学校に入学、同時に東京美術学校の聴講生となる。新橋芸妓組合長で、俳誌「緑光」主宰の山田巴雪（後に「若竹」同人）が西尾出身で父うしほと親しかったことから、巴雪の経営する置屋に下宿。そこで「ホトトギス」派の長老・内藤鳴雪と知り合うこととなる。内藤鳴雪は正岡子規よりも二十歳も年上の大先輩、子規没後も日本派の長老だ。潮児は往年の鳴雪翁の句会へ毎日のようにお伴をしていたのだという。

憚らず伴せし憶い鳴雪忌　　潮児
燗熱う蕎麦たのみ待つ鳴雪忌

少年が俳句を作り、老先輩の句会に列しているということも珍しかったのであろう。当時の俳誌「破魔弓（馬酔木の前身）」の発行所の佐々木綾華和尚の寺などには、毎月二度ほど訪れて、時にはキャッチボールの球拾いを仰せつかったり、俳誌「獺祭」の主宰・吉田冬葉居士ともキャッチボール（と云うほどでもなく球投げ）に興じたこともあったという。

鳴雪の伴をして東京各所の句会を訪ねたのが縁で、潮児の俳壇的な交流が急速に広がり、「破魔弓」を始め十誌ほどの印刷をうしほ印刷所が引き受けている。その縁で水原秋櫻子、山口誓子とも親しくなったという。

守石荘

いせの海見えて菜の花平ら哉　　鬼城

昭和九年七月、鬼城の古希を賀して建てられたこの句碑は阿弥陀寺という寺にあったが、同寺のこの敷地が売りに出されることになった。そこで敷地の一部を買い取り、句碑を守るように潮児の家が建てられた。鬼城翁の句碑を守り、また鬼城の精神を守るための俳句道場になったのである。ここは文字通り碑苑であり、守石荘なのである。

「守石荘」の句碑を見渡せる八畳間は、村上鬼城を偲ぶ西尾の俳句殿堂といえるかもしれない。廊下の障子を開け

ると四本の襖の墨痕鮮やかな鬼城の条幅が、まず飛び込んでくる。

世を恋うて人を怖るゝ余寒かな　鬼城
露涼し形あるもの皆生ける
遠村にとき〴〵あがる花火かな
何も彼も聞知つてゐる海鼠かな

それと隣室との境の襖四本にも、同じく張り込んである。

ゆさ〳〵と大枝ゆるゝ桜かな　鬼城
傘にいつか月夜や時鳥
紅葉すれば西日の家も好もしき
初雪の美事に降れるおもとの実

かつてはこの句襖の部屋で守石荘句会が開かれていた。

「若竹」鬼城俳句を継承

あらぬ方向いて手出しぬ柏餅　潮児
行水やこわごわ脱ずす小褌

このように若くして光を失った潮児こそ、後年鬼城俳句の神髄を最も理解しえた者のうちの一人として、多くの門人に鬼城俳句の神髄を語り、創刊号から平成二十三年九月号（九五三号）まで俳句を発表し続けた。

三師の忌

うしほは昭和五十二年九月十九日、八十八歳をもって天寿を全うしたが、自身が歿するまで生涯鬼城忌を修することを欠かすことはなかった。潮児も父うしほの跡を継ぎ、鬼城・うしほ合同忌日句会を、一度も欠かすことなく盛大に修している。そして平成二十三年八月二十九日、潮児が亡くなった後は宗也が「三師を偲ぶ会」として九月に追悼句会を修している。

この灯一つ守るや常閑忌　うしほ
いまわまで筆をはなさず萩惜しむ　潮児
句を案ずとき膝なでて良敬忌　宗也

加古宗也「若竹」継承

うしほが亡くなった昭和五十二年「若竹」十二月号に「うしほ追悼号」の特集号を編集後、編集長に就任したのが加古宗也。宗也は平成二年八月号の「若竹」七百号記念号を機に、同年九月より「若竹」主宰を潮児より継承し、潮児は名誉主宰となった。潮児八十歳、宗也四十五歳。この一年ほど前、というよりもっと以前から主宰継承のことは潮児より言われ続けていたが、宗也は継承の日を九月に強くこだわっていた。鬼城が亡くなったのが九月十九日、うしほが亡くなったのが九月十七日。鬼城、うしほと繋いでき

た先師の意志を後世に伝えていくという強いこだわりが「九月」だった。この七百号を迎え機が熟した思いで主宰を継承したのだという。潮児が建てた「守石荘」も単に鬼城の句碑を守る、石を守ることではない。鬼城の俳句精神を後世に繋いでゆく、これが「若竹」の使命であるという覚悟が「九月」にあった。

主宰を譲って荷を下ろした潮児が弱ってしまうのではないかと、という周囲の心配をよそに、俳誌経営から解放された潮児は百一歳で亡くなるまでの二十年間、実に瑞々しく俳句を詠み俳句を楽しんだ。

稽田の風にも稲の香りあり　潮児
蕎麦殻の枕二つや敬老日
怪物という名をもらい生身魂

宗也は「俳句は消閑の具にあらず。生きる証としての俳句、生きた証としての俳句を作ってゆきたい。単なる閑つぶしでなく、今の感動を十七文字に刻むことで、明日への糧としてゆきたい。俳句という世界短詩型はそれを可能にしてくれるものだと確信している」と主宰継承について述べた。

右から村上護、潮児、宗也

結婚の条件は俳句を作ること

加古宗也は昭和二十年、愛知県西尾市に生れる。本名宗也。昭和四十五年、富田潮児の二女せき子と結婚して娘婿となる。宗也は俳句好きの母親の影響で子供の頃は俳句を作って母親に見せていたこともあったというが、その後俳句とは離れていたらしい。「結婚の条件は俳句を作ること」ではなく、うしほと潮児は娘婿の宗也を、吟行に誘い句会に誘いながら、ゆっくりと、大きく深い気持ちで次の本格俳人へと育てていったようだ。

林泉をのみつくしけり石叩　うしほ
葉桜となり清風の湧くところ　潮児
日の匂ひ甘し落葉の潦　宗也

西尾市最明寺に三師の句碑がある。うしほ、潮児の思いは宗也へ繋がっていったのだ。

宗也の向日性

第四句集『雲雀野』のあとがきに、自身の現在を「順風満帆の幸せな日々」とし、「若竹」一〇〇〇号の巻頭言では「好きなことを好きな仲間とやることに辛いことなどあろうはずもない」そして「淡々と歩いてきた」と書いた。

歴史ある結社を受け継ぐということには、重圧を感じることもあるだろうが、自身の境遇を真直ぐに感謝するこの向日性が、宗也の俳句、更には「若竹」を耕し続けているように思う。

麦踏んで麦の青さに吹かれをり　　宗也
男晴れとは天抜けて富士開く

「若竹」は本号で一一〇〇号を迎えた。これからの「若竹」がどのような成熟期に入っていくのか楽しみである。

加古宗也に師事

平成三年、私は朝日カルチャー俳句講座へ入会した。カルチャー教室の初日、教室のドアが開き目の前を主宰がすっと通られた。私が考えていた年長の先生でなかったことに、少し驚き、少し明るい気持ちがした。この明るい気持ちになった体験が、躓きながらも俳句を続ける力になったかもしれない。当時主宰は四十六歳、若竹主宰を継承されたばかりの頃だったように思う。その日の主宰の顔は全く思い出せないが、主宰が軽やかに開けられたドアの向こうからさした明るい光。今にして思えば、私の俳句の原点は、あの日の軽やかに開いた新涼のドアにあった。

新涼のドア開く日より師弟かな　　風子

※「俳句四季」平成三十年四月号・五月号・六月号「LEGEND 私の源流」より加筆・再構成にて転載

主要参考文献

徳田次郎『村上鬼城の新研究』昭和六十二年九月
井田信也「若竹」平成二十七年八月号「若き日の鬼城」

守石荘にて加古宗也主宰。右が筆者

「ホトトギス」と鬼城の写生

田口茉於

「雑詠欄」の復活

明治四十五年七月、高浜虚子は「ホトトギス」を小説中心から俳誌に戻し、雑詠選を再開させた。そして大正二年「ホトトギス」新年号に「高札」として虚子は「平明にして余韻ある俳句を鼓吹すること」「新傾向俳句に反対すること」を掲げる。〈春風や闘志抱きて丘に立つ　虚子〉も大正二年の作。

虚子は『俳句の作りよう』で句を作るには「じっと物に眺め入ること」「じっと案じ入ること」が大切だと説く。そして「じっと眺め入ること」によって新しい句を得ようとする努力を「写生」という、と定義づけている。俳句を作るうえで、常に意識せざるを得ない「写生」。大正初期「ホトトギス」雑詠選の鬼城句を読み進めながら、この時期の代表作家といえる鬼城は「写生」をどのように実践したのかを見ていきたいと思う。

川底に蝌蚪の大國ありにけり　鬼城
藻を刈つて淋しき沼の無月かな　鬼城

「ホトトギス」大正二年十一月号より。一句目は鬼城の代表句のひとつとして人口に膾炙している。川といっても死水域のような場所だろう。そのあたりに蝌蚪の大群が満ちている。それを大国としたところに鬼城なりの視点、じっと「案じ入る」ことから生まれた世界観がある。二句目、こちらはぐっと素直な写生句である。荒涼とした沼と、無月の夜の風景が「淋しき」に象徴されている。現代ではあまり安易に用いられない「淋し」がこの号の巻頭である原石鼎、二席の前田普羅の句とともに使われていることも印象的だ。

石鼎と普羅

淋しさに又銅鑼打つや鹿火屋守　石鼎
秋風に倒れず淋し肥柄杓　普羅

一句目、「ホトトギス」大正二年十一月号巻頭作品より。のちに原石鼎の主宰した結社が「鹿火屋」ということからも、掲句は石鼎の代表句のひとつである。

「鹿火屋」は田畑を荒らす鹿や猪を近寄らせないために火をたく小屋。鹿火屋守は鹿を追い払うために銅鑼も打つのだろう。今では馴染のない鹿火屋守だが「淋しさ」と切字

の「や」の効果で、現代の私たちにもその切迫したような人恋しさと荒涼とした風景が臨場感を持って迫ってくる。

二句目、おなじく「ホトトギス」同号二席の作品より。肥柄杓が秋風の吹くなか倒れずに立てかけられている。その風情に哀れを感じているのだろう。それを「淋し」と表した。

明治時代に入ってきた西洋思想から、当時の文学者や俳人たちは「私」自身の個の実感を語ろうと模索し始めた。そこから湧き上がる「私」自身の「淋しさ」は今の私たちが軽々と使うそれとはまるで違った重みをもって表現されたのではないかと思うのだ。

大正初期のこの時代、鬼城とともに巻頭を争ったのが、飯田蛇笏、原石鼎、前田普羅。大正二年に鬼城は四十八歳。蛇笏は二十八歳、石鼎は二十七歳、普羅は二十九歳。蛇笏は虚子が選をする国民新聞の俳句欄でも活躍していたが、石鼎と普羅は句歴も短く突如として現れた若きスターだったであろう。大正二年十一月号「ホトトギス」には普羅の〈人殺す吾れかも知らず飛ぶ蛍〉が掲載されており、この頃の「ホトトギス」雑詠欄の充実ぶりは凄まじい。

小春日や石を噛み居る赤蜻蛉　　鬼城

「ホトトギス」大正三年一月号巻頭作品より。小春日という心地よい一日に赤蜻蛉が噛んでいるのは「石」なのである。「石」を噛む赤蜻蛉を穏やかな小春日に配し、その美しさにいっそうの哀れが募る。美しく穏やかな景と哀れを誘う動物の様子を配するというのは、苦しい生活のなかにも楽しさや希望を見出そうとした鬼城のもつ世界観の表出といっていいだろう。多くの人の心を打つ句世界ではないかと思う。

己が影を慕うて這へる地虫かな　　鬼城

「ホトトギス」大正三年四月号巻頭作品より。境涯俳人らしい一句といえるだろう。掲句の隣には〈世を恋うて人を怖るる余寒かな〉も並ぶ。「地虫出づ」は、甲虫などの幼虫が春に地上から出てくること。この句の地虫も穴から出たところであろう。自身の「影」を恃みに這う「地虫」が哀れ。自身を投影するかのようにじっと「眺め入る」鬼城の姿も見えるようだ。目の前を這う地虫をじっと「眺め入る」ことでつかんだ把握ではあるが、自身の姿を投影する視線には主観が強く籠り、それはもしかすると時に読者を遠ざけることもあるかもしれない。

蘆の芽にかゝりて消ゆる水泡かな　　鬼城

「ホトトギス」大正三年五月号より。「蘆の芽」は川岸などに群生する蘆の芽。蘆牙とも言い角状の新芽を伸ばす。水泡がその蘆の芽にかかっては消えてゆく様子を具さに見届けて繊細な写生句。このような客観性の強い写生句があるからこそ、境涯俳句もまた輝くのだろう。

飯田蛇笏

そして、大正三年から五年にかけて鬼城と巻頭を交互に飾るほど争ったのが甲斐の風土と人の姿を詠み続けた飯田蛇笏である。

文読んで烈火の怒り榾を焚く　　蛇笏

「ホトトギス」大正三年一月号より。「烈火の怒り」が湧くとはどのような手紙だったのだろう。「文読んで」「れっかの」と韻律の弾みからもその激情が伝わってきて、巧みだ。

竈火赫とたゞ秋風の妻を見る　　蛇笏

「ホトトギス」大正三年十一月号より。〈芋の露連山影を正うす　蛇笏〉が巻頭句で、蛇笏といえば他に〈くろがねの秋の風鈴鳴りにけり〉といった重厚感溢れる句風をまずは思い浮かべてしまうので、前掲の句や掲句は読むたびに新鮮な思いがする。

「芋の露」の句の隣に並ぶ掲句は「竈火赫と（くどびかっと）」の字余りで始まる韻律に差し迫った勢いがあり、感情の高まりがそこに籠められる。秋風に吹かれる妻が悲しげで小説の一場面のようだ。蛇笏句の小説性は虚子も指摘するところ。そしてその熱情も。

妻激して口蒼し枇杷の花にたつ　　蛇笏

「ホトトギス」大正四年一月号より。巻頭作品。妻が激情のあまり唇を蒼くして立っている。冬に咲く枇杷の花から山国の冬の景色も思われて凄絶な一場面のような一句。虚子は「この妻を憤激せしむるのも、夫の冷淡からではなくてむしろ過度の熱情からであろう」としていて、蛇笏の深い熱情を指摘している。深い熱情からあるからこそ、この情景を冷静に描写できるのかもしれない。

鬼城俳句の多様性

冬蜂の死にどころなく歩きけり　　鬼城

そして、この蛇笏句と同じ「ホトトギス」大正四年一月号にあるのが鬼城句で最も人口に膾炙しているであろう掲句。冬蜂をじっと「眺め入る」からこそ生まれた句だろうが、時代を越えて訴える力を持ち映像的。それでも、鬼城句を多く読んでもそれほど重苦しくならないのは、

夕焼のはたと消えけり秋の川　　鬼城

といった力ある写生句がならんでいるからだ。掲句も「ホトトギス」大正四年一月号に掲載。

相撲取のおとがひ長く老いにけり　　鬼城

「ホトトギス」大正三年九月号より。巻頭作品。そしてまた鬼城句の特徴として注目したいのが、そのユーモア性でもある。大柄の相撲取が老いるとその頤の長さが際立つ

のだろう。なんとなくおかしい、といったユーモアが心地よく、鬼城の確かな写生が効いている。

花ちるや愁人面上に黒子あり　　鬼城

「ホトトギス」大正四年六月号より。巻頭句である。この句も愁いあふれるひとの顔にある「黒子」を詠んでいて、そのユーモアが心地よい一句。中七の漢語の韻律がそのユーモアを上質に引き立てている。こういった句を巻頭に据えたということは、虚子もこの句世界を評価していたということで、句の世界で自由に遊ぶ鬼城は境涯俳句だけでない闊達さも持ち合わせているのだと嬉しくなる。

女性俳人たち

そして、大正五年に虚子は「台所俳句」を提唱し、女性俳人の活躍を応援した。

紅葉の中を来る人を見て料理待つ　　かな女

「ホトトギス」大正七年一月号より。長谷川かな女は、婦人俳句会の幹事を務め、大正四年十一月に開かれた第一回婦人句会にも参加している。紅葉の見える部屋なのだろう。食事会での風景を写生しつつ、その場を楽しむ心持ちが伝わる。この場を用意してくれた主催者への挨拶句ともなっている。

仮名かきうみし子にそらまめをむかせけり　久女

「ホトトギス」大正七年八月号より。大正期を代表する女性俳人といえば杉田久女。大正五年に兄より俳句の手ほどきを受け「ホトトギス」には大正六年一月号にはじめて投句したようだが、翌年に掲載された掲句も娘との穏やかな時間が仮名書きでやさしく表現されており素晴らしい。

花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ　　久女

「ホトトギス」大正八年六月号より。花時の華やぎと花衣を脱ぎゆくときの目の前の濃い色彩。華やいだ時間のあとの愁いやナルシシズムも漂う。大正五年に虚子の提唱した「台所俳句」から三年でこのような名句が生まれた。女性たちの表現したいという欲求を虚子がいちはやく感知し、その選句力でこの才能を見出したのだ。

ゆさ〳〵と大枝ゆるゝ桜かな　　鬼城

「ホトトギス」大正八年六月号より。久女の「花衣」の句と同号である。桜の枝は実際にはゆさゆさとするほど揺れないかもしれない。それを擬音語ではなく擬態語である「ゆさゆさと」とすることで、鬼城は音のない世界の視界いっぱいに満ちた桜を表現したのである。「じっと眺め入る」「じっと案じ入る」を消化した鬼城の最高の写生句がここに結実しているのだ。

変わる価値観・変わらぬ価値観

川嵜昭典

周知のことは承知で、村上鬼城の軽い年表を掲げる。

一八六五年　江戸に生まれる
一八八四年頃　軍人を断念し明治法律学校で法学を学ぶ
一八九四年　高崎裁判所の代書人となる
一八九九年　「ホトトギス」初入選

なぜこれを掲げたかというと、代書人という職にこだわったからだ。代書人というのは、現在の司法書士のような仕事で、揉め事があると、その内容を書式にまとめる仕事である。揉めている当事者が口だけで話していても分からないので、それを書面化するという仕事である。

そもそもこの代書人という仕事は、鬼城の生きていた当時、全く新しい仕事であった。明治維新以降、日本は司法卿であった江藤新平の司法制度改革のもと、三権分立や議会制度の制定など司法の近代化を急速に推し進め、一八七一年（鬼城六歳のとき）に司法省が設立されている。そして翌年の一八七二年に司法職務制定が定められ、代言人、代書人、証書人制度が誕生している。この代言人が、現在の弁護士、代書人が司法書士、証書人が公証人となっていき、特に代言人、代書人は裁判に、ひいては近代国家としての日本の制度に不可欠な職務として位置付けられた。江藤新平は司法制度改革の中で、

一　公正・迅速・簡潔な民事裁判をすること
二　悪人は罰するが、決して冤罪は出さないこと
三　社会的弱者の権利擁護を図る
四　貧者と富裕者とを法の下では平等に扱う

などという理念を掲げ、代言人、代書人、証書人の制度を定めている。そして府県にあった裁判権を裁判所に移している。

この裁判制度及び代言人等の職務が当時、日本の民衆に馴染まなかったことは想像に難くない。西洋の近代化した訴訟制度を国に取り入れるということは、民衆が、価値観の大きな転換に直面したことを意味している。反発も大きかったであろう。そんな中で鬼城は、耳疾のせいで軍人になれなかったとはいえ、明治法律学校で法学を学んでいる。

この明治法律学校は、一八八一年（鬼城十六歳のとき）に設立され、フランス系の法学を学ぶ学校であり、当時の五大法律学校の一つであった。つまり鬼城は当時の最先端の学問、価値観に触れていたといえる。当時は立身出世の時代である。夏目漱石や正岡子規と同様、鬼城もまた向学心や探求心に溢れた、また新たな社会正義を志す若者であったのだろう。

そしてまた司法省は、一八九三年に、明治法律学校を含む九校の法律学校に判事検事登用試験の受験資格を与えている。鬼城の歩んできた道が、かなりのエリートコースであったことがここでも分かる。ちなみに鬼城は、この判検事試験に二度落第している（『鬼城句集』の鬼城の言より）。

井田進也氏も述べているように、鬼城は自由民権運動にも熱心に参加していたようだ（「若竹」平成二十七年八月号〈若き日の村上鬼城・村上鬼城の自由民権〉より）。自由民権運動とはすなわち、憲法、議会、租税、言論の自由など、まさに近代の法的思想の幹となるものである。鬼城の胸に、自由や平等の思いが大きくなっていたとしても不思議ではない。

鬼城は、そのような時代、価値観のもと代書人となった。その代書人という仕事の具体的な日常はどのようなものであっただろうか。

代書人もまた、前出のような、社会的弱者の権利擁護を図ったり、貧者と富裕者とを法の下には平等に扱ったりするような職務倫理が求められていただろう。ところが何せ、これまでの日本には無い考え方、無い仕事である。その現場は混乱を極めていたのではないだろうか。訴訟を起こす人々が、鬼城を混乱させていたのではないだろうか。

法律というのは理念は崇高であるが、実際にそれを運用するのは人々である。そしてその人々は、基本的に自身（及びその一族）を守るためにのみ行動する。要するに、裁判に集う人々はどこまでも保身的であり、自分勝手であり、欲望の塊である。それが生身の人間の姿である。そんな人々の言い分を聞き、取りまとめるような代書人の仕事は、どんなストレスを鬼城に与えたであろうか。そして自由民権運動に参加し、軍人や判事検事を志すも挫折し、それでも知的エリートとして近代の自由や人権意識を持ってしまった鬼城には、その理想と現実との間で、どのような葛藤があっただろうか。

鬼城は新しくありたいと思っていたのである。それは「私は、その頃、法律書を読んでいたので、理路整然たる科学書に慣れた眼には、月並者流（筆者注・月並俳句を詠むもの）の言うことなどは、馬鹿らしく」という言葉にも表れている。ただ、少なくとも本業の代書人ではその力を発揮できないというジレンマを抱えていたのではないか。それは自身の力不足ではなく、制度の転換期という時代の中で、新しい方の価値でありたいという者が抱える葛藤である。そうしてそれが結局は解決せず、欲望のままの人々の世界

に倦んだ鬼城が、別の世界に目を向けようとするのはとても自然なことだ。そしてそれが、鬼城には俳句であった。

川底に蝌蚪の大国ありにけり

人々は自身の欲で阿鼻叫喚している。わざわざ揉めごとをこしらえて、自分を苦しめている。それが人間の世界である。ただ、川に目を移せば、おたまじゃくしはおたまじゃくしで全く別の世界を形成している。しかも川の中ではなく、川底という表現、そして大國という表現から、人間の世界とは全く隔たった世界だということが分かる。この句の詠みぶりは、実に静かである。そしてその眼差しは、どこまでも客観的だ。自分はおたまじゃくしではなく、こちらの世界に居続けなければならない、という静かな覚悟を感じる。

法律家、そして先に述べた「社会的弱者の権利擁護を図る」「貧者と富裕者とを法の下では平等に扱う」という近代的な職業倫理を学んだ鬼城という観点で鬼城の句を眺めると、すっと腑に落ちる句がいくつもある。

春寒や掘出されたる蟇
闘鶏の眼つぶれて飼はれけり
郵便夫同じところで日々霞む
蝙蝠や飼はれてちゝと鳴きにけり
金魚の王魚沈ンで日暮るゝ
さみしさや音なく起つて行く螢

鬼城の句には弱者であったり、耳の聞こえない自身の姿であったりが投影されている、などとよく説明されるが――そしてそれも正しいと思うけれど――対象を客観的に見て、必要以上には対象に没入しないというような姿勢も感じるのも事実である。それは法律家が、対象に同情はするが深入りはしないという姿とよく似ている。むしろそれが、対象を個として尊重している姿勢のように思えるのである。

例えば「春寒や」や「闘鶏の」の句にしても、一見、哀れなものの哀れな姿が詠まれているが、その姿は凛としている。一本筋が通っていると言ってもいい。蟇にしても闘鶏にしても、彼ら自身の力で生きていかなければならないのであり、その生きるとは、必要以上に可愛がられたり、蔑まれたりということではなく、等身大で生きるということ、その場で生きるということである。そこにまさに個の尊重が見てとれる。「さみしさや」の句にしても、螢との別れを寂しがってはいるが、一方でどこかさっぱりしている。

変わる価値観、変わらぬ価値観というものがある。

変わる価値観というのは、鬼城の生きた時代であり、繰り返しになるが、まさに日本の大転換期であった。そして人間の世界は、この価値観が変わり続けることの連続であり、またそこからこぼれる、ついていけない人間も多く出

る。しかしそんな人間がおとなしくしているかというとそうではなく、声高に自身の考えを主張し、正当化する。一方変わらぬ価値観というのは、自身を取り巻く、自然、季節である。自然はどこまでいっても美しく、季節は常に巡ってくる。もちろん鬼城は、単なる（月並な）花鳥風月は否定している。しかしそれは詠み方の否定であって、自然の力を否定しているのではない。むしろ自然を信じている。

ゆさ〳〵と大枝ゆる、桜かな
五月雨や起き上りたる根無草
とく見よや門前月の出るところ
小百姓の酔うてねむるや月の秋
山川に高浪たつる野分かな
大木の表ぬれけり冬の雨

これらの句だけでも鬼城が「境涯の俳人」の範疇にとどまらないことが分かる。「ゆさ〳〵と」の句は、もはや説明の要らない句であるが、そこにはもはや作者の姿はない。桜がその地で吹かれるに任せる、ただそれだけである。「五月雨の」の句は「起き上りたる」という言葉から、鬼城を表しているとも受け取れるかもしれないが、そうではないように思う。やはりここにも根無草のエネルギーが滲み出るのであり、草自体をそのまま詠んだと捉えた方が格調が高い。

近代的な考えを持った鬼城は、人の世界に倦み、それでもその考えを諦められずに自然にその目を向けた。そこは既に、自然の事物のそれぞれが、それぞれに自立して生きている世界であった。その中で人間は「小百姓の」の句のように、力強く、またつつましくその一員として生きている。そんな人々は鬼城には慰めになっただろう。そう考えると、

冬蜂の死にどころなく歩きけり

この句も、鬼城自身を投影しているとは思えなく、むしろ自然という大きな摂理に従っている冬蜂を、鬼城は慈しんでいるかのようである。この、自然という大きな摂理こそ鬼城の求めた平等性ではないだろうか。一見弱肉強食に見える自然も、その摂理の中では全てが平等であり、等しい命を持つ。

世を戀うて人を怖る、餘寒哉

鬼城は変わりゆく価値観の先に、変わらぬ価値観である自然を見出し、その世界で小さな命も大きな命も、滔々と詠むことを止まない俳人であった。また、鬼城の抱く悩みは、価値観が変化し続ける、現代の我々とも共通するものであり、そういう意味で極めて現代的な俳人でもあった。

「鬼城俳句輪講」より

平成七年刊行の『富田潮児文集』の中に「鬼城俳句輪講」が載っている。私が「若竹」に入会したのが平成三年、この時、潮児先生は八十一歳、当然うしほ先生は亡くなられていた。

当時はうしほ先生に直接指導を受けた同人がまだいらしたし、潮児先生の若い頃から師事されていた同人の方も多かった。でも私は潮児先生とお会いする機会は数回ほどで、潮児先生の若い頃を知らない、まして今の会員は潮児先生にお会いしたことすらない。そして、うしほ先生、潮児先生の鬼城俳句の熱い論考を私たち会員が意外と知らないことに気がついた。そこで、今回は『富田潮児文集』の中の「鬼城俳句輪講」を取り上げてみたいと思う。特集を組むにあたり改めて読みなおしてみると、うしほ先生、潮児先生の若々しい声がすぐそこに聞こえてくるような、「若竹」の若さ溢れる当時の活動がありありと伝わってくる。他結社にも鬼城俳句の輪講は見られるが、やはり、直接鬼城の謦咳に接し、行動を共にし、作句当時の環境も知っている若竹人ならではの鬼城俳句輪講は迫力がある。この輪講には若竹同人と有識者を客員に迎え多数の方が参加されているが、この稿ではうしほ、潮児のみを抜いて掲載した。

田口風子

十六夜や水になりたる燗ざまし　鬼城

潮児　昨夜は名月を讃えて文字通りの明鏡止水の心境であったが、十六夜となると何か欠けてゆくような淋しさがある。加えて昨夜月を賞した折の残酒、その「燗ざまし」を家人が心づかいでもって来てくれたが、燗ざましは真に水の如くで味がない。心持ちをいやすどころか却って淋しい気分を深める。「水になりたる」と写実でありながら、強い心の働きがあって主観客観一致の境となり、老まさる翁の身辺が彷彿とする。

うしほ　この句の季題の取り扱い方の巧妙なのが一句を生かしている。無季俳句を主張する人々も、この句にある「十六夜」の季題と「燗ざまし」との関連を千誦して見るといいと思う。無季ではこの句の持ち味は出て来ない。又これが「十五夜」であったならかんざましは絶対にこの句を生かすものでない。季題の取り扱いの重要さがこの句を数誦したらそれらの人にも解るであろう。

綿畑へおりてひろがる狭霧かな　鬼城

うしほ　綿畑だけに中七の文字に不動の重みがある。一時途絶えた三河の綿畑も最近往昔のようではないが山間部で見るようになって一層この句に実感がある。

潮児　具象化された叙法は子規居士が俳壇に写生主義のくさびをうって以来、自然美に立脚したところの純情なる作

風であって、真に優雅な趣である。が今日、新しさに追いまわされたり、何か「ありそうな」思わせぶり俳句にマイマイコする時代にあっては、「綿畑」の句も平明なりと解される。しかし写生に立脚して養った純真さ、大きな自然観を無碍にすることなく、その心をもって私を築くべきであると思う。

うぶすなにみあかしあげて出水晴れ　鬼城

うしほ　蛇足であるが、少年時代の体験に、近所の川の堤が切れそうになったので、老幼者は高みにあった産土神社境内に引き上げさせておいて、活動の出来る人々は防水に当たって事なきを得たことがあった。防水中は、家も肉親も忘れて働いていた人達はとりあえず産土神社によって来て、誰とはなく本殿に灯を入れた。遅れ馳せに来た禰宜さんも交って拝殿の太鼓をそれぞれに打って恙なかった嬉びをしている事を思い出して、この句でそんな場合が目に見えて来る。

潮児　人口に膾炙されている所の迷信や、非科学的であるとかという論はさて置き、神仏に頼むは愚であるが、神仏を崇める心は純情の最極致であると思う。何一つ読めない私が自己流に考えて見ると、神仏は人おのおのの心に宿っていて、その心の磨かれかたによって、浄化される程度と、その象徴の度合いが異るのである。清浄無垢の心を、崇める心が神事となり仏事となって形づくられるのである。御燈明を上げて心の純な面を顕し、それを崇めることによって、更に心を洗練してゆくのである。人力を尽して自然の成り行きに従った郷人も、事なく晴れた洪水によって、不安の状態から解放されたその瞬間の悦びが、動作にもあらわれ、御燈明を上げて感謝するのである。この句は「出水晴れ」の一語を以って感謝の心持ちを飛躍させている。題材の捉え方は新しいとは言えないが、この複雑な境地で、叙景以上の働きは至難と思わるる境地を、しっかり捉えて其の真実を窺わせている。

書初や老妻酒をあたためたり　鬼城

うしほ　軽い句ではあるが、作者が書初めしている心境をうるおす為に夫人が酒をあたためていられることは、ちょっと見ると何でもないことであるが、それは作者にとっては大きな心のゆとりを持たせるものである。昨年私が試筆の折にいつも忙しげに起居している老妻がすすんで紙を展べたりして二三時間を座右に介添して句のことなど話していたことがあった。

介添の妻にも句ある試筆かな　うしほ

というのがある。その時の妻の態度は私に大きなゆとりを持たしてくれた。恐らく翁も夫人の心づくしに愉しく書初めをされたことであろう。

美食して身をいとへとや寒の内　鬼城

うしほ　此句はたしか関西遊行の折に出来た句で、関西からの帰途西尾へ立ち寄られ「大阪で諸君が精々長命するために美食しようといってくれたが、美食することは結構だが、私の生活では出来ない相談だ」と笑って語りながらこの句を示されたことを記憶している。句は概念的であって、いわゆる即興句ともいうべきであろう。

潮児　理性の色彩濃厚なところ、翁の作としては稀である。しかし肉食も今日では当たりまえのことであるけれどけだものの肉をいみ嫌った翁の時代にあっては、寒の内だから身をいとわなければならぬという点から見て、特に勧められたり、勧めたりするところに詩情あふるるものがあったのであろう。

世を恋うて人を怖るゝ余寒かな　　鬼城

うしほ　翁ほどに人を恋しがり、人を恐れた人は少ないかも知れぬ。われわれが翁を訪ねた時などは特長ある切長の目尻に笑みを見せて喜んでくれた。俳句のことで叱られている時は別だが、その外の時はいつでも目尻に笑みが見えている。時にそれが警戒的に見える場合もあったかも知れぬ。耳の不自由な為め心おきなく話の出来る人と会うことは非常にうれしく見えていた。その反対に気の知れない人には会うのを避けられる傾向が多分にあった。最初にお目にかかった頃の補聴機なんか実につまらぬものらしく、その後西尾の方から送ったのは相当重宝がられて永く使用していられたが、兎に角初対面の人にことに補聴機を出して口をきくことは嫌いらしかった。こういえば句の説明はいらないであろうが、しかしよく判っている句でありながら、句全体が作者の概念から出来ている句である事は否めない。それは表現があまりにも滑かに出来ているのでそこに気がつかぬまでであるまいか。と云って此の句などは作者の代表作たる事を失うものではない。

潮児　春寒と云えば既に春がしのびよって居るような感じであって、心をいたみつけ、心をしめつける様な深刻さは無いが、余寒となると禍があともどりして来たかの感がある。翁は世を恋い、世を慕いつつも聴覚障害者なるが故に人との応待は煩しく、時には自嘲し、時には警戒もしておどおどした寒さであるが、まったく不自由な者は人を頼みにしながらも、人になじみきる事の出来ない欠陥が生じてしまうものである。翁の痛感された想像は視覚障害の私にもヒシヒシと迫って余寒の生活を思わしめるものがある。

永き日や寝てばかりゐる盲犬　　鬼城

潮児　盲犬は何をするという術もなく、唯天命を待つと云ったようにわびしさでゴロリ横になって寝てばかりいる。しかも日永の一日を倦みきって体のやりばもなく土間の一隅に寝そべっている不自由な犬を見ると、不自由な鬼城翁も生きながらの屍と云った感を深うして、春愁しのびがたきものがあったのであろう。翁は「春寒やぶつかり歩

く盲犬」とも詠んで盲犬に同情をもっていられるところからみて、翁の飼犬が盲になったかも知れない。私も幼少の頃、隣家に盲犬が棲んでいた。その犬も若い頃は嗅覚をもって駈けずり廻っていたが、老うるに従って、ぐったり寝てばかりいた。まったく術がない、人間の私でさえ視力を失ってからは、やりたい事、思う事は数々ありながらも心のままにならず、些細事までも放棄、あきらめてゴロリと寝そべっているような心持ちの日がある。

うしほ　翁の作品で盲犬や鶏の句が沢山あり、この作品には「春愁」の前書きがある。前書きを一峰氏はなくとも判るといわれているが、実はこの句を作られた当時の翁は、いわゆる翁の一代のうちの尤も苦難時代であった。それは翁に新しく就任してきた裁判所長が、翁の不自由さを知ると同時に翁の司法代書人たることを取り消してしまったので、さし当たり毎日出張っていた裁判所構内へ出かけることもなくなったから、不自由な身である自分の所置にも困って善後策を講じて居りながらも、部屋に籠って寝たり起きたりしているところの翁の姿で、句の上には「盲犬」としてとり扱われている。私らは鞘町時代のこの事実を知っているだけに、作品の出来たころの翁が眼前に今もある。

耕して食ふが御法の有難き　　鬼城

潮児　「働かざれば食はざるべし」と簡単に人間生活の機微を捉えている。そして働いて居れば、耕して居れば、自ずと食えるようになるのである。天の与えは不公平なく自然であると、御法の尊さに感謝された作であるが、句としては前書に「百丈禅師讃」とあるように意匠が勝ちすぎている。

うしほ　「生活というものは妙なもので月々三十円要るところへ十五円よりの収入がなくても、どうにかやってゆけるものだ。どうせ足りない経済ならといって働かずにいたら、直に少しもやって行けるものではない。どんなガタガタの車輪でも曳いていれば廻って行くもので、とも角天分を守って働かねば行かぬ」と常に私をいましめられた。この句も、こうした翁の持論がこの句の上にも現われていてほほえましい。句としてはいささか臭味を含んでいるといえる観念句だ。

妙高山上清水流れて石たたき　　鬼城

潮児　地名の詠みこみは難しいものであるから固有名詞などは余程たしかめてその特殊性を捉えて詠みこまねばならぬと常に門人を戒めていられた鬼城翁は、翁自身の作品も固有名詞の使用には随分注意をはらっていられる。「妙高山上清水流れて」と一気に詠みだされているところ夏山の涼々たる姿が浮かびあがって恍惚とする。其処へ石叩きがピョンピョン遊んでいる。絵画を見るような美しさである。ところが私達のように周囲に高山をもたない者には石たた

きが山に棲息しているかどうかを知らないが、前述したごとく所の特殊性を究めてからでないと地名の詠みこみをされない翁の作風から見て妙高山が親しまれて来る。

うしほ　妙高山上の清水は少しどうかと思う。殊に先生は柏原まで行かれたことはあるが妙高山に登られたことはない筈だから、この句に関するかぎり私は実感句でないことと思う。

雷や猫かへり来る草の宿　　鬼城

潮児　猫の習性と雷の鳴りだした光景が面白く写実されて軽いほほえみを覚える。表現も型にきちんとはまっている。中七の流暢さは、何か物足りない感がする。それは翁の「大獅子の躍りこんだる祭かな」の如く中七の強い表現に比べて「猫かへり来る」はのんびりとしていて躍動する力が乏しく「おどけて帰る」猫の姿を描きつくすだけの強さが無いように思う。

うしほ　猫の嫌いであった先生が、晩年二疋も猫を飼われるようになったのに私は驚いた。先生が外遊中など、その家の猫が膝に来るものなら、煙管を逆に口にして猫の鼻先へふきつけて追われたものだ。それが並榎町に移られてからは野鼠に困って先生も飼われたのである。この句は勿論鞘町時代の句である。

附記　鞘町時代の家も古い家であるから無論鼠は多かったであろうが、並榎町の新居は当時畑中の一軒家であったため、霜がふるようになると野鼠がどんどん家の中へ入って来て随分多かったらしい。私の駅前の新居時代でも冬になると物凄いほど鼠が入って来たものである。

涼しさや小便桶の並ぶところ　　鬼城

潮児　解釈のつくされている句にまた意見を加えると却って句意をそこねる惧れがあるけれども、然し句を志する者としては句を作るばかりが芸ではなく、鑑賞が大事である。句を作りながら鑑賞し、鑑賞しながら句を作る処に本当の向上があると思う。「小便桶」の句は私も両三度評釈したことがあるが、いずれも諸氏の言と大同小異であって、翁の境涯がよく描写されている翁独自の作である。翁は遁世していられるのではなく、世を恋していられるのであるが、障害のため、人を恐れていられるのである。偶々都会に出れば都会の良さもわからない訳ではないが、障害のため煩雑な都会の目まぐるしさが怖しくなって匆々郷里に帰れば土の臭みも小便桶の臭みも身についていて安住の感もひとしおであり、山趣村情の有難さが涼しく感じられるのである。

暑き日や簾編む音ばさり〳〵　　鬼城

潮児　この句は往年の「山鳩」誌上で鬼城翁が自句自釈を連載していられた頃に自釈をこころみられた一句であるこ

とを記憶している。その頃私は、小学校の四、五年生であって頻りに家業を手伝っていたから確か文撰をしたように覚えている。そして簾をあむ音がばさりばさりと間隔をおいて聞こえる。それが暑い日で暑さを加える音でありながらも、流暢なというような事柄が、翁独得の迫力ある論法で畳みかけられていたように記憶する。この記憶は甚だ心もとないが、少年の頃、汗みどろになって一生懸命、あの読みにくい翁の原稿をたどって、無我夢中に文撰していれば、暑さも苦しさもなかった。当時はただ誤字誤植を一字でも少なくしたいという一念であった。

元旦や赤城榛名の峰明り　　鬼城

潮児　私は「鬼城翁の作品私考」及び其他で屢々とりあげて来た礼讃の一句であって、尚言わんとするは徒に駄弁を弄するばかりである。確に翁が大自然を詠まれた中でもこれほど真実性に富み、且又崇高さと雄大さを捉えている点から見ても随一の作品であると思う。赤城榛名の霊峰に相対している翁の家から、日夜その幽玄さにうたれていて自ずと詩心にかられていたものの雄大さを具象化することの出来なかった翁は、永い歳月を経て此の一句をものにされたと仄聞している。従って作意は内燃しきっていて何等の衒いもない。そして翁の風格であるところの「明るさ」が充満していて独歩の境と云うことが出来る。

うしほ　この句については若竹で一両度書いているからそれにつきているし、諸君の説でもつきている。ただここに強調しておきたいのは下五「峰明り」と単純化されていることである。山国の群馬の中でも群峰を抜く赤城榛名、その山顛へ鉄を溶かしたような朱色の初明りの色がさして来る。実にその荘厳さは限りない大自然美というべきである。この句意には往時の御代を謳歌する心持ちが多分に含まれている。翁が詠まれた山の句は数百にも達しているが、この句に比すべき句はないであろう。

利根川の水上に遊ぶ雲の秋　　鬼城

うしほ　広い利根川の水上をとんでいる雲を見て詠んだ句と解する。この句解釈によっては利根川の水源近くに遊んだ句と見てとれぬこともないが、それでは「雲の秋」と結んだところの効果が薄い。おそらく作意は前解の方が正しかろう。「ミナカミ」と訓むのと「スイジョウ」と読むのとで句意に錯覚を生じる。この場合「スイジョウ」と読むべきであろう。利根川上流に「ミナカミ」という地名の温泉があるだけ間違い易い。

潮児　叙し方が不鮮明となっているが、二様の解釈が生じて、その一様は「遊ぶ雲」と接続して切れないから水上に遊ぶ雲と解したがよいというのであり、一様は上十二字で切って「雲の秋」を季感的扱い方とすれば、奥利根に遊ぶという解釈が濃くなる。「雲は秋」でなく「雲の秋」とあるので私は遊ぶ」で切って後者にくみしたい。

くらがりに灯を呼ぶ声や風邪籠り　　鬼城

潮児　屋外の明るさに夕餉時を追われていた家人は、部屋の中の暗さに心づかなかったのである。めいりがちな病人に詫びながら点燈したことであろう。さて表現は平明化されているけれど、能く風邪籠りの憂鬱さと、点燈して気分転換をはかろうとする心情があらわれている。この句意の現わし方は多様にあって、もし「灯をともさせぬ」とするならば、趣はそがれて、しわがれた声も、恙籠りの心情も描きだされないであろう。

うしほ　夕ぐれか、あるいは時間的にもう少し暗くなってからのことであろう。病者特有の心理から風邪籠りしている時にも灯がほしく、勝手元あたりで立ち働いている家人に灯を呼んでいるのであろう。句から受ける感じでは客観句のように思う。句全体を通じていささかの無理もなく、翁の句としてほほえましい句だ。

雷や蝶吹かれとぶ岩頭　　鬼城

うしほ　この作品は作者の境涯の不自由を以て蝶の姿を写生した作品、作者の姿が句の中にあるのである。翁の動物を吟(ママ)んだ句は多い。

芭蕉研究を一応打ち切って鬼城研究をしようという加藤楸邨氏が「闘鶏のまなこつぶれて飼はれけり」の句を翁の第一作品として、翁の家人に推賞されたということであるが、私はなまなましいこの句よりも外にもっともっと翁の姿の沈潜された句をとりたい。「冬蜂の死にどころなく歩きけり」のなどはその一例である。従って闘鶏、雹の句や岩頭の蝶などはまだ作者の作為的なものがある。冬蜂の句に至っては、自然のままに詠まれた翁の境涯の句であって、どこから見ても作意は払拭されているところに冬蜂の句の生命がある。殊に翁に身近く接したことの多いものほどこの感は深いと思う。句の鑑賞ということも、選句と同じで、十人十色という結果になるから、必ずしも自己の主張が正しいというわけには行かぬ。この蝶の句なども翁の名作品ではないが好きな句である。

潮児　この句は素直に単純化され、主観も綺麗にこなされているので、一応平易に受けとれるけれど、実は今にも降り出しそうな雨の気配、雷のもたらす一陣の風に蝶々は煽れ飛んで、よりどころなく時には岩頭に叩きつけられそうになったりする光景が想起される。羽を裂かれた蝶はいたいたしさが生々しく表現されているのに対して、「雷の蝶」はいたいたしさを内にひそめている。含蓄ある作である。こうした取材を変調子な句ぶりで表現するならば多種多様になるであろう。洗練された作は、何処が良いと云う説明をすれば却って味を失ってしまう場合が多い。何処かよいという良さは句を読んだ刹那直感的に感受出来る良さである。

糸瓜忌や俳諧帰するところあり　　鬼城

潮児　主観の強い句で先生の代表的な作品である。子規忌に際して俳諧に対する翁の力強い信念と、毅然とした体構えは自らの句の格調を高めゆるぎなき心の奥底からほとばしる叫びはそのまま私共の句生活の基となっている。子規以前の乱脈であった俳界を是正して、花鳥風月を詠み、写生に立脚した処の忠実な描写を俳句の生命とした子規居士の偉業を偲びつつ「俳諧帰するところあり」と端的に強く云い切って居られる処に人となりが窺われる。

うしほ　芭蕉の俳句、生涯を初老以前の俳諧味と初老以後の俳諧の二つに別ける事が出来るが、初老後の境地には何人も到達出来ず、亦主観が強すぎて芭蕉を旗幟とすることの困難さを悟った子規は俳句の乱れのより深まるを恐れて一般に判り易い蕪村の写生主義を容れ、蕪村を最高として賛えたのである。

然し、芭蕉の具象化された主観句こそ俳諧本然の姿と固く信じられる先生は「糸瓜忌や芭蕉に帰れ」と詠まれたのが翁の真意である。

誰彼も死んで淋しや獺祭忌　　鬼城

潮児　子規と深い交誼を結ばれていた翁が子規忌に詣られ、今迄交厚くされた人々のあまりにも少なく成ったのに「生者必滅諸行無常」の理に直面され卒然と座して御仏に合掌を捧げられる翁の姿が彷彿とする。

うしほ　「誰彼」は特定の人を指している。鬼城翁の句である為好意的に解釈するから佳い句と云えるが類想もあり季語にも不動の重みはない。

小男の馬より強く稲運び　　鬼城

うしほ　俳諧味とそれに小男に対するユーモア以上の深い同情が表れている。句としての価値は「大男の仏男や畑打」より遥かに落ちる。中七のおどけた所に大いに同情を持った鬼城翁の心境が汲みとられる。

潮児　いま傾向の一つに生硬な熟語を捏って、如何にも感情が象徴されているかのように見せたり、詩情が含まれているかのようであるが、それは欺瞞策であって作者の虚栄としか判断の出来ないものが殆んどである。社会は漢字制限をしているのに、俳句は逆行して新熟語を造り、「句をうまそうに」見せようとしている。私達は「うまそうに見せたり、うまくなろう」と考えなくとも、自分の姿をどう現すかということに探究しなければならない。何時の世になっても本質的心理は一つであることを忘れず、心理の深さを究めるべきである。勿論流行の中に不易を見出すべきだが、流行の姿に追いまくっていてはつまらない。

（『富田潮児文集』「鬼城俳句輪講」より抜粋）

富田うしほ 一句鑑賞

盲子の膝撫でている袷かな

盲子とは言うまでもなく長男富田潮児を詠んでいる。若くして光明を失った我が子を見つめる父の心情はいかばかりだったか言葉に言い尽くし難いものがある。悄然として座す我が子の姿は父として慈愛を込めた姿があった。うしほが潮児を詠んだ句として忘れてはならない一句である。

うしほ句集の序文の中で村上鬼城は

凡そ、人の親となり、生い先長き我が子の、不憫や、明を失してあやめもわからず、袷着て、悄然と膝を撫づる姿を、眼前に見る時の親の心はいかであるべき。かかる時、誰彼をわかず、人間の本心を露呈して明鏡止水の心境に居る。此の心境コソ、俳諧の一大事にして、此の心境に生る、俳諧、即ち心の俳諧なりと知るべし。

と述べていてこの句がうしほ句集随一であると賛辞を贈っている。

一方、金子刀水も

潮児君が病後、失明された時の悲しみを親として愛憐の情抑え難く、言外に慰めと慈愛をこめて潮児君の悲嘆絶望を見守って、自己の悶々の情を句に託して居られる。

とうしほ父子に対する熱いまなざしは変わらない。いずれにせようしほ父子を語るには忘れられない一句となった。

高橋冬竹

師を信じ己を信じ常閑忌

この度の一句鑑賞文の依頼を受けて図書館でうしほ師の句集を借りた。『好日』と『続好日』の二冊。お顔を写真でしか知らない私であるが、初めて入会した三和婦人句会には師に直接教えを受けた人が多数おられ、赤城山の句碑開きには大挙参加し花を添えた事も。「うしほ師の武勇伝」的な話もよく聞かせて貰い何となく身内的な親しみを感じていた。

句集の中で最も感銘を受けたのは、「鬼城翁永眠さる」と題された十八句と「鬼城忌」と題して続く五十五句である。

九月初め鬼城翁の病篤しの知らせを受け自分も二ヶ月余の闘病の最中を押して翁の枕元に侍り臨終に立ち合えた幸せ。その後「俳句一筋、鬼城一本」の信念で守石荘を守って行く決意と長い年月の間に生じる少しの「揺らぎ」が伝わる。

御山洗つて巨人に開く岩扉かな　鬼城翁を巨人と称え
秋雨や傘さしそえしお骨壺　お骨の翁をそっと守る
鬼城忌や忌日つづいて露月子規　露月十八日子規十九日
露寒し句碑抱かばやとぞ思う　句碑を守って行く決意
わが命句々に托しぬ常閑忌　俳句一筋の心
己が愚を守りつづけぬ常閑忌　守り抜く事を己が愚と
ゆるぎなき赤城榛名や常閑忌　名山の変わらぬ姿こそ

そして掲出の句。鬼城翁を一途に信じ、その思いを守り抜く心こそ「若竹」を一一〇〇号にまで継続させた力である。

乙部妙子

わが腕によりそう潮児春ぬくし

第三句集『好日』の、旅と雑吟の最後の句で、前書に

家に帰れば常の如く、潮児と町湯に行く。

とある。この句の前の八句中三句に、潮児の名があり、うしほ師が旅中も潮児師を思っていたことがわかる。

明るい町湯（銭湯）が目に浮かぶ。常の如くと前書にあるので、日常の一齣として描かれている。私も銭湯育ちなので、脱衣所も洗い場も湯船も広々としているのだろうと思う。そして、大人も子供もいろんな人がやってきて、くつろぎ、身仕度を整え、世話をしたり、世話をしてもらっていたりする。混んでいるとなかなかたいへんなのだが、すいているとゆったりした気分で入ることができる。すいている時のことのような気がする。たぶん、まだ明るいうちの銭湯通いで、二人してでかけて行く。歩くときもよりそい、脱衣所でも洗い場でもよりそいながらで、湯船でもよりそいながらいるのだと思う。わが腕によりそうで、全くの頼り切りというのではなく、べたべたとしたものもなく、しかし、潮児師が安心しているのがわかる。うしほ師の父としての自負も感じられる。父子の日常の姿を見つけられたという思いが胸にあふれてくる。春ぬくしで、実際の春の暖かさが感じられ、父子の心の温かさも感じられる。

清水みな子

親馬に欣々として仔馬かな　うしほ

「子を持って知る親の恩」とは至言である。子に対する親の愛は海よりも深い。親にとって、子の成長を見ることが一番の喜びである。一方、子にとって親は、戻るべき「港」のような存在である。掲句から、こうした親子の情愛の麗しさをしみじみと感じる。

子を抱きし親猿の目や梅雨の雷　うしほ
入学やわが子と知れる怒り肩
春宵や親子して結う笹粽
胎動を肩に耐ゆる娘更衣
母となる牛の眼うるみ草の花

再び、掲句に戻る。この句における「親馬」は師匠、「仔馬」は弟子と読むこともできる。俳句のありがたさは、師匠より慈愛・厳愛を賜りながら、句友と共に、師匠と心を一つにして、切磋琢磨できることである。

師を祀り月を祀りて忌日かな　うしほ
結ばれし俳諧のえにし落し文
異心なき一傘の句徒に明易き

鈴木帰心

昭和俳句史
——前衛俳句～昭和の終焉
川名大
俳句史研究の第一人者が膨大な文献資料から分析・考察した、名句の表現法に現れた新風の流れを克明に記した一冊。きら星のごとく登場した俳人たちと、その作品を通して俳句表現の変遷を読み解く好著。昭和俳句史の決定版！
昭和の俳句は鮮烈だった！

定価　3,520円(10%税込)
四六判／並製／504頁
ISBN978-4-04-884543-4
KADOKAWA
発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口 0570-002-008(ナビダイヤル)へ

富田うしほ　句

『好日』『続好日』より

抄出　加古　宗也

句に生きて久し去年の灯今年の灯

墨壺の墨糸乾く二日かな

吉凶もなくて二日の掃除かな

おのづから好日といい三ケ日

兄弟の机並べて吉書かな

寺の子のひとり突きいる手毬かな

石こっぱ踏めば春立つ響きかな

極楽の夕日拝みぬお中日

屋根替や足場に置きし化粧槌

春の灯や袋かけたる琵琶二面

マネキンの歪めし顔や万愚節

ゆう梅の日を失ないし白さかな

二軒家や最合風呂立て麦の秋

姨捨のあたりと思う虹消ゆる

三河吉良（句碑所在）

積翠をもるる日ざしや山泉

盲子の膝撫でている袷かな

八事興正寺境内（句碑所在）

拝み打つかんかん仏や蝉しぐれ

昭和二年、潮児六カ月目に大学病院を不治のまま退院す

くちなわの打ちのめされて這いにけり

三河吉良塩田

昼顔や並んで高き苦塩桶

信州地獄谷

峡の湯へ馬貸すくらし合歓の花

門入りてまたさす傘や杜若

盲子のつれ笑いする夜寒かな

明日は師の忌日の毛野へ秋の風

万座（句碑所在）

重陽や幡雲ひきし大浅間

句に生きて奢りつつしむ新酒かな

白根山

岩盤に凝りし湯花やななかまど

ゆるぎなき赤城榛名や常閑忌

鬼城翁と二人大津に泊る

仮宿の目覚め心や夜半の冬

猫老いて妬心も持たず年暮るる

妻の愚痴逃げられもせず大晦日

大嘘して風邪声の抜けにけり

露座仏の肩辷る日や秋の風

入学やわが子と知れる怒り肩

尾崎士郎忌

ふる里の情あたたかし瓢々忌

蓑虫の風にしたがう命かな

三ヶ根山句碑の句

海を守る御菩薩の眼や青あらし

汗手貫老尼きびしく痩せ給う

わが傘に重たき柄あり秋海棠

富田潮児 一句鑑賞

百五夜の霜まだ厳しお茶の里

この句は若竹創刊五十五年を記念して茶都西尾の稲荷山公園に建立されたもので、私にとっては得難い俳縁へとつながる一句でもあります。碑石は大きからず小さからず自ずと傍に寄りたくなる風情と思いやりが漂い、俳句を知らない私をひきつけるものがありました。前々から叔母に俳句を勧められていましたが、とても難しそうな気がしてなかなか一歩が踏み出せずにおりました。しかしこれがご縁なのでしょうか、句碑を拝したその瞬間固い心がほぐれ先生の教えを仰ごうと決心しました。

「百五夜の霜」という季語も学びの発端となりましたが、茶農家の人々や地場産業の茶の木に対する深い心配りが見てとれお人柄に触れる思いがしました。爾来先生のご指導のままに今に至っておりますが一度たりとも不愉快を感じたことはありません。慎み深いだけでなく頭脳明晰はもとよりユーモアも絶やさぬ先生を神様とまで崇める俳友ばかりというのも納得のいくところです。ご逝去の直前まで句をたしなまれたお姿は、今までに増して私の大いなる支えになっております。一一〇〇号を祝しながら感謝の意をもってこの一句を高らかに口誦する所存です。

深見　ゆき子

ほどほどに焼酎を割り処暑の水

残暑も一息ついたのでしょうね、奥様とご一緒に今夜は焼酎でもと所望されたであろう一句に、ずっと惹かれていました。何といってもただの水でなく、処暑の水とさり気なく詠まれた姿勢につくづく粋を感じました。むずかしい言葉など一切使わずして、この焼酎の旨さはいうに及ばず、静かな語らいや待ちに待っていた秋気さえ届きました。夏の不快感を否応なく引きずる日本の初秋だからこそ処暑の水の透明感が倍増されるようにも受け取りました。「そうですねえ」と処暑の水を用意される奥様とのやりとりからも爽やかなご夫婦像が垣間見えてきてたまらない魅力となりました。

実は惹かれる理由をもう一つ申しますと、実父が先生と同年、風貌も似通って初めてお目にかかった時は大変驚いたものでした。その父は私が嫁いでからも何かと良くしてくれ酒盛りとなると私を相手ににこにこと上機嫌そのものでした。父を思うたび潮児先生が浮かび、潮児先生を思うたび父が浮かぶほど先生との出会いは正に宝物となりました。このたび一一〇〇号にあたり以前のテープレコーダーのお声を聴きながら改めてお礼申し上げたいと思います。

髙瀬　あけみ

咲けるだけ咲けど奢らず草の花

前橋住みの私には、潮児先生のお側に寄らせて頂く機会は余りありませんでした。それはとても残念な事でしたが、そんな私にも忘れられない一日がありました。

平成十三年一月二十日、図らずも頂いた若竹賞の授賞式に初めて西尾市を訪れました。新同人紹介に出席の鈴木玲子さんといっしょでした。式当日の大雪が嘘のように晴れた翌朝宿を出て加古先生ご夫妻と潮児先生と、そして私達もモーニングコーヒーをご一緒させて頂きました。緊張のあまり、何を申し上げたか定かではありませんが、潮児先生の柔和で端正なお姿が、今もって忘れられません。かけがえのない大切な日となりました。

掲句は句集『夢窓庵随唱』に入集の句ですが、季語「草の花」が胸に沁みます。

名の知られた花も人目につかない花も、根を張り実を付け置かれた環境を諾ない、精いっぱい命を燃やします。「咲けるだけ咲けど奢らず」の措辞は、潮児先生の生涯における生活信条だったのでしょう。強い信念のもと自然に身を委ね、自らを見詰めるお姿が浮かびます。潮児先生をして〝奢らず〟と詠まれるお心は尊く、敬愛の念が広がります。

私達に示されたものは大変重い、と感じた一句でした。

工藤　弘子

百五夜の霜まだ厳しお茶の里

池田　あや美

掲句は、西尾市上町地区に広がる茶畑の、小高きにある、稲荷山茶園公園に建つ句碑のものである。

八十八夜は立春から数えて八十八日目、百五夜は大寒から数えて百五日目、同義の季語である。昔から八十八夜の別れ霜と晩霜を恐れたが、これに耐えれば、いよいよ安定した収穫が見込まれる。霜まだ厳しという事であれば、八十八夜ではなく、百五夜の季語が欠かせない。そして茶の産地であるふるさと西尾のお茶の里と親しみを込め、平易なことばで納めている。これから、お茶の里は、茶摘の最盛期を迎える。迷路の様な茶畑には、茶摘女の自転車が並び、摘茶葉を詰めた、大きな袋を運ぶ軽四自動車が忙しく行き交う。そしてよき香を放ちながら製茶工場が稼働する。活気溢れる初夏を迎えるのである。この句からは静なる景を詠みながら、動なる景を想起することが出来る。

客観写生句で、余分なことばは一つもなく、適切な季語の斡旋で一句を詠まれている。よく見て、感じて、一句を詠めたらと願っている私には、句碑に佇つまでもなく常に胸に刻みとどめておく、大切な一句である。

柿食うて懐紙に包む種二つ

酒井　英子

掲句は富田潮児著作集『富田潮児句集』より抄出。昭和十七年、三十二歳の作で落柿舎で詠まれたものである。

落柿舎は、芭蕉の弟子去来の閑居跡で、芭蕉も逗留している。藁葺きの田舎家の入口に蓑と笠がかけてあり、屋根を越す柿の木には柿がたわわに色づいていた。

掲句は眼前にその景を見るような臨場感がある。茶懐石では、器を浄めた懐紙は持ち帰るが、柿の種は今迄どうしていたか思い出せない。柿の種を包むという繊細な心遣いに襟を正さざるを得ない。昭和六年の潮児句集にある〈元日の日記に書きし私則かな〉の句にも先生の生き方が表れている。

「人の話を句にしない」「目で見るような句を作らぬこと」「視覚障害者を詠んで同情の押売りを禁ず」と御自身に課せられ、恬淡と百一歳まで「心耳・心眼の俳人」（主宰の言葉）として生きられた。生涯現役で名誉主宰としても、若竹を育ててくださった。

平成二十三年、村上鬼城顕彰大会の特別講演の中で故有馬朗人氏が「境涯俳句、鬼城のことなど」の講演の中で潮児先生について熱く語られたことは忘れられない。「俳句はいいものですよ。自然と親しみなさい。自分自身の句をお読みなさい。」と言われた先生の澄んだお声が今も聞こえてくるようだ。

行く春の窓に小唄の盲かな

昭和三年六月発行の「若竹」創刊号に掲載された一句です。巡り来た春がまた過ぎ去ろうとする窓辺に、小唄を口遊む。途中までは、ゆったりと過ぎてゆく春の情緒が漂います。そして、おぼろげになりつつある自らの視覚をばっさり「盲（めしい）」ととらえての、万感の「かな」。客観的な視座に立った直截な詠みぶりには、どこか達観したような感じも覚えます。が、このとき潮児師十七才、入院中の身でした。障害というものを受け入れて立つ。この立脚点から体感したもの、感得できたものを自恃とする、潔さのようなもの。私が実際におめにかかれたのは、最晩年に近い数年でしたが、時空を越えてこの句を詠んだ一人の青年の姿に思いが至ります。

そして「若竹」創刊を先駆けて切望、懇願してきたのは、潮児師ご自身でした。発行は賛同者の熱意が実り、父うしほ師の許可も下りて漸く実現。多くの方もご存知のところですが、発送が五月一日、募集締め切りが五月五日という仰天日程でした。それはまた、若き等の迸るような情熱エピソードでもあります。創刊の折には病窓にいた潮児師でしたが、それからゆうに八十年以上、恬淡と句作を続けられました。

今年は潮児師の十三回忌でした。千百号に至る永き流れと共に、創刊当初の熱い想いにふれて、襟を正す思いがしています。ありがとうございました。

今泉　かの子

ステッキはオランダものよ白靴も

『俳句朝日』二〇〇五年十月号の表紙に一枚のセピア色の写真が掲載されました。守石荘の電灯の真下で画帖に目をくっつけるようにして揮毫する青年。若き日の潮児先生です。この写真に添えられた掲句は、潮児先生九十四歳の作。

ステッキというお洒落な言回しが、矍鑠たる上品な紳士を思わせます。オランダ在住の方からの贈り物でしょうか。異国への明るい憧れが涼風のように心地よく、弾む心が実によく伝わってきます。守石荘の廊下を颯爽と歩いてみえた頃の先生が懐かしく思い出されます。

同号では、「心眼の俳人　富田潮児」のタイトルで三十六頁もの特集が組まれました。潮児先生のお人柄と俳句にたっぷり浸れる一誌です。いつも身辺に置く私の宝物です。

潮児先生は簡素を好みました。あれもこれもと詰め込まないで、二つのお皿に分けるといいですよと。日々の生活にじむ詩心は、大らか、誠実、無欲恬淡でした。

与えられた境涯をあるがまま受け入れ、いつも笑顔を絶やさなかった潮児先生は、「生身魂」という静かな境地を教えてくださいました。

一汁一菜さて間引菜に鰹節　　潮児
怪物という名をもらい生身魂　　潮児

荻野　杏子

富田潮児　句

『富田潮児句集』『夢窓庵随唱』より

抄出　加古　宗也

病院にて

行春の窓に小唄の盲（めしい）かな

あらぬ方向いて手出しぬ柏餅

盲人の悲哀

行水やこわごわ脱（は）ずす小褌

外套にくるまって聞くラジオかな

梅雨寒や病窓におく水枕

駈けて来てまきつきし子の裸かな

行水の盥に小さく坐りけり

炎天や象を曳き行く曲馬団

妹の見よとせがむや絵双六

画仙紙の天地はかりて試筆かな

添え書きに招き文あり夏見舞

九月十七日午後五時鬼城先生永眠

薬酒飲みし心地や水団扇

月の秋なれど

翁逝きし九月や雨の降り続く

冬浪の中よりたちし荒鵜かな

鬼城忌や雨にうたるるいぼむしり

柿食うて懐紙に包む種二つ

信州地獄谷

秋静か地獄の釜の噴気孔

噴泉の轟きしずめちちろ鳴く

耳底のつんつん病みて冬ざるる

老妻と肩叩きあう短夜かな

盲中吟

ゆずる癖わが定石や杖おぼろ

美しく死にたいという願いに対し、句魂にあづかる私は自然に委ね切ってしまいたい

括淡として乱れまじ浮いて来い

視聴ともに不調なれど

三猿にまだ徹しかね七日粥

ゆがみしと聞くのみ盲の試筆かな

三和最明寺境内に句碑建立

葉桜となり清風の湧くところ

補聴器を両耳に掛け古稀の春

めでたさも妻まかせなり松の内

蘇生してよりの長寿や菖蒲風呂

人が人嘲う愚かさ木の実独楽

琵琶抱けば背筋もしかと夜半の秋

傘寿ぞと囃され春の夢心地

花冷の掌に弁慶の力餅

信州地獄谷後楽館

粽結う技おとろえず八十路媼

逢えば直ぐ夏痩の身を案じられ

枝豆や媚びず衒わず痩せ詩人

妻臥せば吾も着たまま春を待つ

紙魚だらけなれど門外不出の書

おでん鍋だけの茶屋あり冬の滝

加古宗也 一句鑑賞

最澄の山や消えずの火の涼し

日本仏教の母山とも言われる比叡山。仏教の祖師高僧を多く輩出した延暦寺。そして、最澄が一乗止観院を建立した際にご本尊にかかげられて以来、現在まで消えることのない灯火。その火を下五で涼しと詠む。

宗也先生は、芭蕉の「俳諧は三尺の童にさせよ」という言葉を度々用いて俳句に向き合うようご指導くださる。俳句を志す者として、常に心がけるべきことと理解はしている。

ところが、大比叡の自然、千二百年を超える延暦寺の歴史を前に、私などは詠めるはずのないものを詠もうと焦り、言葉に遊ばれてしまう。そこに童の素直な感性はない。三尺の高さで見る目はない。

この句は、上五中七で自然、時の流れに真正面から向き合い、敬い乍ら、己が感性のままに火が涼しいと帰結する。季語の涼しが生きている。この句に触れるたび、俳句とはこういうものだよと実感させてくれる。

もう随分と前のことだが、実はこの句を詠まれた時、色紙に認めていただいた。その時あいにく落款をお持ちでなかった。宗也先生は「これでいいかな」と、赤のサインペンで手書きの落款を描き込んでくださった。先生の目が、まるで小さな子供のようにきらきらと輝いていたことを憶えている。

高濱聡光

べた凪や五指にからめて海髪を引く

宗也先生は、確かな観察眼による骨太俳句の王道を行かれる方だ。その意味で典型的な一句であろう。「若竹」を継承されてより、俳句への迷いなき情熱を燃やされておられたことが伺われる。吟行を存分に楽しまれており、揚句も吟行先の一場面を感動を持って掬い取られた力強い句だ。

「海髪」は潮だまりの岩などに付着して枝分かれしながら成長する紫褐色の海藻で、天草の一種だ。一旦乾燥させて用いるが、収穫は春まだ浅く冷たく荒れ易い海での作業となる。だからこそ凪いだ日の海はかき入れ時なのだ。「べた凪や」という惜辞は収穫者の嬉しさと、それを見つめる先生の安堵が込められていると感じる。「五指にからめて」から、できるだけ多くを絡め取ろうとする収穫者の心意気に圧倒された先生が浮かぶ。過酷な労働への敬意に裏打ちされているのだろう。

先生の句は「提示」だと思う。目で捉えたことを独自の表現でそっと提示するだけで、読み手に句の奥行の深さを想像させる。語りすぎないことがより伝わると云う不思議を思う。

先生は硬軟両刀使いの方でもある。可愛らしい句もある。

美しき藁を咥へて初雀　　宗也

来る新年号・一一〇一号からの未来への吉兆を呼ぶ句として、この句を最後に取り上げさせていただきたい。

堀田朋子

天道虫吾子は全き百握り

加古宗也主宰の父としての一面が窺える数少ない、貴重な一句なのではないか。息子さんが捕まえたテントウムシを父である主宰に見せに来た。開いた手のひらの中央にテントウムシがいた。ふと、その手のひらにある一直線のすじに目が行く。なんと、見事な百握りだ。わが子が百握りであると知り、嬉しかった父としての感慨がこの句を貫いている。

ところで、手のひらのテントウムシといえば、塚本邦雄の歌がある。〈てのひらの迷路の渦をさまよへるてんたう虫の背の赤と黒〉塚本のテントウムシは、迷路の渦をさまようが主宰の息子さんのテントウムシは、滑走路のごとく一直線のすじに従い、太陽めがけて勢いよく飛び立ったに違いない。百握りを持つ少年の明るい将来を想起せずにいられない。

さて、令和五年の大河ドラマの主人公である徳川家康公も立派な百握りであった。いつか、家族で久能山東照宮に初詣に行ったとき、境内に「家康公御手形」の色紙が置いてあった。あやかって購入しようかとも思ったが、やめた。なぜなら、家族みなの手のひらを確認すると、なんと三人のわが子は、三人とも百握りであったのだ。色紙はいらないだろう。父として、とても嬉しかったことを覚えている。そのときの感慨を主宰のように一句にできたら、なお嬉しいのだが…。

坂口圭吾

極月や香月の柿の赤々と

香月泰男は招集から大陸への動員で、旧満州からシベリアへと移送され収容所での壮絶な体験を描いている為、全体に重苦しい色調の多い中で、闇の明けきらない地平線に濃い朱色の鮮やかな「朝陽」の絵は際だった印象を受ける唯一の絵です。日の出の崇高な美しさに一縷の望みを持ったのでしょう。それを「柿の赤々」と句の中に生きる強さを詠み込まれたのだと思いました。長野県満蒙開拓記念館を訪れた際出会った香月の作品は、いつも画集で観ていたのとは次元の違うまさに体が凍りつく様な衝撃を受けました。

戦争を知らない私ですが、香月のシベリア・シリーズには以前より魅了されていました。飾り絵とは違いデフォルメされた力強い筆使いは心に迫り、厳しい飢えと寒さに耐え戦争の空しさそして平和への祈りも込められていると感じました。

長年絵筆で表現する日本画を学んでいましたが、今は季語の持つ世界観が十七音以上の空間の拡がりを見せる俳句に、自己表現が出来る喜びを見いだしています。

先生の感性の鋭さや幅広い教養に裏打ちされた表現力と、人間味溢れる句に触れる度俳句の素晴しさを実感しています。

折を見て香月が思いを募らせた故郷の山口県へ出掛けて作品をじっくり鑑賞したいと思っています。

加島照子

鳩くくとくくと八坂の夕桜

私は京都出身です。会社の異動で約二十五年前に名古屋に移り住みました。そして「若竹」加古宗也先生との出逢いが有りました。この度「若竹」一一〇〇号を迎えることとなりこの上ない喜びに浸っています。そして先生の一句鑑賞の依頼を受け膨大な句の中から選び抜いた句がこの句です。私は三十五才の時幼ななじみの同級生との結婚に終止符を打ち、二人の子供の為に働くこととなりました。すぐに、京都四条烏丸の大丸京都店の一階宝飾売場のメーカー出向店長として多くの部下と共に毎月の売上げ達成に向けて活き活きと働いていました。あの頃は景気も良く実に良く売れました。そしてそんな春の日のひと夜は、京都一と言われる円山公園の枝垂れ桜の花見が、恒例となり、早番の部下に少し早く勤務を切り上げ場所取りに、又弁当や酒を個々持ち寄っては、あの素晴らしい夜桜の元で人生を語り、励まし合い、花と酒と良き仲間に酔うひとときを存分に楽しんだのでした。この句を先生の句集に見つけた時の衝撃は今もはっきりと覚えています。あの頃のシングルマザーとして必死に生きていた日々、苦しくも実に充実した日々が昨日の事のように甦るのです。今は再婚をし穏やかな日々。私の来し方を省り見つつ、この句は私の琴線に触れ、今も私の応援歌となっているのです。

重留香苗

遠谺して木曾谷の修羅落し

初学の頃、この句の季語は何なんだろうと思ったのがこの句との出合いだった。季語「修羅落し」は、春になって冬季に伐採しておいた原木を、傾斜を利用した「修羅」と呼ばれる樋状に並べた丸太の上を、滑らせて搬出する方法とある。

現場で杣人が馬などを使い、何本もの重い原木を滑り落としている情景が目に浮かぶ。そのときに発する地響きのような音が、「遠谺して」作者の元にも届いているのであろう。たまたま木曾谷に足を踏み入れた作者は、この音を聞いて春の訪れを感じたに違いない。常日頃、肉体を使って働く人々に心を寄せている作者は、春浅い山中で作業に従事している人々の身の上に、思いを馳せたかもしれない。

僅か十七音でありながら、春の訪れを感じさせる遠鳴りや、馬の嘶き、その周辺で働く杣人たちの額の汗までも彷彿とさせる。轟々と音を立てて谷間を流れる雪解川の奔流も、目に浮かぶ。又季語に、闘いの神とされる「阿修羅」と同じ字が当てられているのが興味深い。労働がそれだけ過酷であったということか。多くの聴覚的、視覚的な要素を盛り込んだ師の句は、私の心を捉えて放さない魅力的な一句である。

近年は機械化が進み、木材のこのような搬出方法は無くなったそうだ。「修羅落し」の音を聞けずに残念である。

高　槇　まり子

春宵や水軍の海真平ら

私が大事にしている句は、私が若竹と出会う前から覚えている句です。それは光瞬さんの家に伺った時、葉書にこの句が先生の自筆で記載されていたからです。

水軍とは江戸時代以降の名称で、それ以前は海賊衆と言われていました。日本には九鬼水軍、熊野水軍と沢山の海賊衆がいますが、私は広島ですから水軍と言えば瀬戸内海の村上水軍です。水軍の本城は潮流が速い小さな能島にあって普通の船では近づけませんから、小早舟が重宝されていました。「水軍の海真平ら」とは戦も少なくなり平和に近づいた海の事です。当時因島を収めていた村上武吉は山口県の大島に領地替えさせられ、村上水軍は終わりを迎えました。その後、北前船が行き来するようになり尾道が栄える様になりました。商人にとって堺港へ無事に行けることが念願であり本当に春宵一滴の夢です。春宵と水軍が何も関係ないように思われますが、当時瀬戸内の海が凪で自由に航行できることが、一夜二夜の夢で取りも直さず安心感があります。平らな言葉を連ねて奥深き句です。句のわからなかった地元の私が何故か心引かれて行く我が土着に即した奥深き句です。この句に出会い十五年近くになりますが未だに大事にしている平明で心打つ句です。

村　重　吉　香

ほととぎす鳴く神君の狩場跡

句集「茅花流し」所収の句である。主宰はこの句を奥三河の千万町で詠まれた。簡潔に格調高く神君家康公を褒め讃えた句である。三河で生まれ育ち活動されている主宰の、同郷の大英傑である家康公への尊崇の念があふれている。

千万町は岡崎市の山間部の村落である。近くには、日本武尊が命名したとされる標高七一〇mの巴山があり、豊川・矢作川・男川の水源になっている。山頂にはこの三川を歌った藤原俊成の歌碑が建つ。少し離れては作手の亀山城主奥平貞能と武田軍が戦った石筒ヶ根古戦場跡がある。

千万町は歴史を感じさせる場所である。家康公がこの地を狩場として好んだ一端が伺われる。ほととぎすといえば、有名な狂句がある。「鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす」。家康公の忍耐強さ、優しさを詠っている。

千万町の神君の狩場跡に立ったとき、ほととぎすの声が聞こえた。この時徳川幕府を築き繁栄させた家康公が浮かんでも不思議ではない。還暦を過ぎた主宰にとり、過去の大英傑に思いを馳せ、「若竹」の一層の発展を心に誓ったのではなかろうか。

なお、千万町は三椏の群生地としても有名である。山腹一面が黄金色に輝く早春の景色は見事である。

山田和男

点て出しの菓子は金平糖秋さやか

これはお茶室とかではなく、庭を眺めながらお茶の飲める店で、抹茶を注文した。するとお菓子に金平糖が出てきた。それを見た瞬間に秋の清々しい爽やかさを感じたという句でしょう。ピンクや紫、緑などの色をした、角の立った硬い金平糖が、いくつかころころと器に転がり、そばに細かく泡立った緑の抹茶が置かれている様子。爽やかで気持ちの良い秋の透き通った感じが伝ってきます。

中の句が九音で、そこに句切れがある。先生には珍しい形かと思いますが、お菓子として、きれいでかわいい金平糖が出てきた、小さな驚きを表現されているのでしょう。

茶道の句としては、春の句にこのようなものもあります。

つくばひの溢れてにほひ菫かな

手水鉢からあふれ石を伝った水が、岩のもとに生えている紫色の小さな菫にかかり、花を濡らす様子が、早春の明るさ優しさを絵のように見せてくれます。

先生の句には、大きな景のものも、人への愛情がこもったものも、水墨画のように微かな気配を詠まれたものも、様々ありますが、こんな小さな美しい句もあり、本当に嬉しいです。

竹原多枝子

寒牡丹哀しきまでに朱をつくす

掲句は主宰の第二句集『八ツ面山』より選ばせて頂いた。寒牡丹は、奈良県石光寺のものである。春咲きの品種を冬に咲かせている冬牡丹と違い、人の手を介さず自然が育てた寒牡丹は、生命力に溢れ、厳しい冬を力強く生き抜く。自らの意思で無駄な葉を落とし、息を潜め、ここぞという時に一気に花を咲かせる。そして子孫を残す為、生きた証の如く生命の限り咲く。それは正に掲句の「哀しきまでに朱をつくす」である。

だが、この句を初めて読んだ時、正直私は別な思いで心が震えた。主宰の魂のこもった「哀しきまでに朱をつくす」のフレーズが、季語の寒牡丹と相まって、切なくもとても熱い思いが押し寄せてきた。不謹慎であるが、それはまるで女人が激しく人を恋い慕う、あの情念の様に思えた。何故かふと、鈴木真砂女の「羅や人悲します恋をして」が浮かんできた。寒牡丹を「明」とすると、女の情念は「暗」。真逆である。

純粋に寒牡丹の姿を詠まれた句に、私の解釈は尋常ではないが、全ては掲句の素晴らしさからくるものとしか言いようがない。「句は鑑賞をもって完結する」という事で、どうかお許し頂きたい。この冬、石光寺の寒牡丹を見に、久しぶりに大和路をゆっくり歩こうと思う。

堀場幸子

薫風や良寛に似し師を持てり

令和五年五月、山紫会は前橋藩主酒井家菩提寺の龍海院で吟行会を行いました。当日は五月の風が爽やかに吹き、西尾から駆けつけて来られた宗也主宰をお迎えし、本殿から前橋城主の歴代の墓所を見学されながら、本堂脇に設置されている良寛像をじっと見ておられ、この句をお詠みになりました。

午後一時から句会になり、私は選句の時「良寛に似し師を持てり」の意味が分からず、「山紫会の師は宗也主宰きりいないのに」と思い、選から外してしまいました。しかし、これが主宰の句と知り、主宰の潮児師に対する思いを知ったとき自然と頭が下がりました。

十八歳で失明し、晩年は難聴になられた潮児師を師と仰ぎ懸命に支えきった主宰の真心、誠実さが私の眼の底に浮かんでまいります。幸いにも、平成二十一年の潮児師の百寿祝に参加させて戴き、その時撮った笑顔の師の写真は宝物です。

吟行を終え、句会場まで行く途中、前橋名物の「焼饅頭」の原島屋があり、主宰は「みんなに食べさせたい」と会員分を注文されました。二ヶ月に一度前橋に来られ、こよなく群馬を愛し、会員の一人一人を思う気持ちに、ほんのりと心が温かくなり、私の思い出の一句となりました。

関口一秀

十二月八日鴉の馬鹿騒ぎ

一九四一年十二月八日、日本海軍はハワイ真珠湾に集結していたアメリカ艦隊へ総攻撃をかけました。それが太平洋戦争の始まり。八月六日（広島に原爆投下の日）、九日（長崎に原爆投下の日）、十五日（終戦の日）と共に日本人として忘れてはならない重要な日です。

鴉は不吉な兆候の象徴ともされており、その鴉が集団で騒がしく鳴いている様子は、不安で落ち着かない気分を掻き立てられます。

奇襲攻撃を仕掛けた当時の日本は不安などいっさい感じていなかったでしょうが、その戦争は大きな犠牲をもたらし、国を不幸にしました。そのことがこの句の背後にある情景として浮かび上がります。

戦争開始日と鴉の不吉な描写を配合することで、より内なる不安と憂鬱が伝わり、戦争の苦難と犠牲を思い起こさせます。そして、二度と戦争を繰り返してはいけないという詠み手の平和への願いも感じられます。

この句には深い感銘を受けました。私もこのように人の心を揺さぶるような句を詠むことができるようになりたいと思います。（……世界が不穏な今だからこそ）

先生の句を多く読んで勉学に励みたいと思います。

岡本　たんぽぽ

淋しさをもやひ真昼の鵜飼船

長良川の鵜飼の昼間の景を詠んだ出色の一句である。一三〇〇年以上の歴史を持つ岐阜の鵜飼。漆黒の闇に赤々と篝火を焚いた鵜舟。燃える炎を川面に映し、鵜匠と鵜が一体となって鮎を捕えるさまは、まさに幽玄の世界であり、古くは信長、家康の時代から今日まで続く時代絵巻である。

芭蕉はその光景を〈おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな〉と詠んだ。華やかな鵜飼が果てた後の静寂に、鵜の哀れを感じたのだ。生きるために鮎を獲らねばならない人間と、そのために獲った鮎を吐き出さねばならない鵜。

先生の自註に「長良川河畔では鵜飼を見るための遊船がずらりと並んでいた。ふと芭蕉の句が思い出され『淋し』が口を衝いて出た」とある。鵜の哀れを思いながら、昼間の舫われた遊船に淋しさを抱く。夜の出番を待つ幾隻かの観覧船には、座布団が雑然と積み上げられており、その光景は興覚めでもある。だが、橋の反対側の溜りに目を向けると、十数隻の遊船が整然と並んでいる。かつて賑わった鵜飼遊覧が、社会情勢の変化やコロナ禍で客足が遠のいているのか。

出番なく並ぶ遊船に、ふと垣間見えた淋しさ。そこに視点を合わせる。それが加古先生の繊細さと優しさであり、俳人の豊かな感性なのだと強く思わされた一句である。

天野　れい子

双塔の影を一つに雁渡し

掲句は主宰の第三句集『花の雨』の巻首を飾る句で、平成七年奈良の當麻寺を訪れた時に詠まれた句であるという。

當麻寺は飛鳥時代に聖徳太子の弟によって創建された寺院がその後現在地に移されたと伝えられ、当初は弥勒仏を本尊として平安時代に発展し、空海が滞在して真言宗となり、鎌倉時代になると中将姫伝説で知られる當麻曼荼羅と阿弥陀信仰が結合し浄土宗の寺院としても信仰されるようになって現在は真言宗と浄土宗が並立する寺院である。又當麻寺には日本で唯一、古代の三重塔が東塔西塔として残っている。東塔は奈良時代末期と推定される当寺最古の建物で、西塔は飛鳥時代とも平安時代初期の創建とも伝えられている。

主宰が當麻寺を訪れた時、近くの二上山を越えて心地よく吹く風のなか、木立を背にして立つ両塔の影が一つに見えたと詠んでおられ、両塔の静謐とも云える姿が読者にもよく伝わり「雁渡し」という季語と非常に良く響き合っている。

又當麻寺から程近くに染寺とも花の寺とも呼ばれる石光寺が有り、寒牡丹のお好きな主宰は平成十二年石光寺で「蹋みたるとき息ふれて寒牡丹」と詠んでいらっしゃいます。

奥村頼子

耳剥ぎに来る風のあり虎落笛

無性に髪を切りたくなってショートヘアにしたのは高校一年の十二月のこと。無防備に晒された両耳は登下校のたびに冷えて真っ赤になりました。「なにもこんな時期にしなくても」友人に言われて思わず自分でも笑ってしまった。そんなやりとりもふと懐かしく思い出されました。

音を立てて強く冷たい風が吹き、痛みすらも超えて感覚を失ってしまうほどの厳しい寒さ。「耳剥ぎに来る風」と聞いて真っ先に群馬の冬の光景が思い浮かび、それと同時に高校時代のこの出来事を思い出しました。

十七音の的確な描写は、読み手の心を大きく揺り動かします。言葉から伝わる直接的な感触はもちろんのこと、想像を掻き立てられたり、忘れていた遠い記憶と思いがけず再会したりと、読み手の感性が呼応してその句に引きこまれる瞬間です。そこに確かな感動がなければ成立しない、加古主宰が常に仰っている「作者の思いがにじみ出る生きた俳句」だからこそ生まれる反応だと思うのです。私が俳句に惹かれる理由がまさにここにあります。

あの時の冷えきった両耳の感覚が鮮明によみがえります。このままもう少し、三十年前の懐かしい記憶を辿ってみるのもいいかもしれません。

飯島慶子

加古宗也　句

抄出　田口　風子

麦踏んで麦の青さに吹かれをり
経蔵回転梅雨のいきれの抜けてきし
裏町に書肆ありちちろ鳴かせゐし
一椀の白粥に秋立ちにけり
啓蟄のいま山鳴りか耳鳴りか
黄砂降るとき神鏡のくもるとき
日の匂ひ甘し落葉の潦
送水会達陀の炎のちぎれ飛ぶ
逆さ鐘ついて近江の春惜しむ
かんてきの温み背にある月筵
鈴虫の鈴を奪へるほどの風
かいつぶり潜けば湖の窪みけり
雪割草咲いてお縮小屋といふ
木の芽寒とは骨あげしあとの背
螢臭き手をほうたるの水に浸く
耳鳴りのしんそこ白し寒土用
双塔の影を一つに雁渡し
田仕舞の煙ゆたかに輪中村

香月の絵見て来て落暉まで凍つる

木曽は谷底日盛の屋根つらね

一筋の畦に七草摘み足りし

茅舎忌を祇園囃の中にゐし

でんがくの串干してあり萩の茶屋

花冷ゆるとは太刀墳の太刀の嵩

飛魚北風や沈黙の海碧々と

ぱらぱらと庭にこぼれて寒雀

よき人と近江を歩くのぼり鮎

男晴れとは天抜けて富士開く

恋歌は下の句に凝る京扇子

美しく腰を沈めて風の盆

伊吹嶺の稜線太し神の旅

追儺寺抜けて大須の寄席囃子

雲雀野を来て円空の微笑仏

振り返るとき余呉日照雨春の虹

蟬の穴百まで数へ桶狭間

画布にまだ色なきところ秋の声

斑雪野を来て観音のひねり腰

最澄の山や消えずの灯の涼し

若竹俳句賞受賞作家競詠

三河一色大提灯祭　高橋　冬竹　祈りの刻　酒井　英子

月祀る　荻野　杏子　台風一過　白木　紀子

草戸綴り　服部くらら　矢作川　岡田つばな

秋愁ひ　田口　風子　象　潟　渡邊　悦子

牡蠣筏　工藤　弘子　時雨虹　中井　光瞬

三社祭　市川　栄司　伊吹山　池田真佐子

本證寺　江川　貞代　大浜寺町　中野まさし

八月二十六日・二十七日は天下の奇祭で名高い三河一色の大提灯祭が執り行われた。前日、屈強な勢子たちがカグラサンという万力を回して大提灯を吊り上げた。午後七時勢子たちが梯子をかけて大提灯に大蝋燭の火が入れられ祭はクライマックスを迎える。

三河一色大提灯祭

髙橋冬竹

大提灯吊るや万力軋ませて

大提灯勢子はましらのごと動く

大提灯神話絵巻のひろごれる

大提灯梯子を攀じて灯の入るる

灯を入るるとき大揺れに大提灯

その中に天覧札の大提灯

大提灯神話の将の眼力に

大提灯嶮を競いて十二張

手元にある一番古い「若竹」誌は六三〇号（昭和五九年）。真珠抄の選者は主宰の富田潮児先生。編集長は加古宗也先生。表紙裏に富田うしほ先生の「句に生きて奢りつゝしむ新酒かな」の御句。会報欄を見ると守石荘句会はなんと昼夜二回と豪華。夜の部は仕事が終わってからでも参加できる。真に楽しそうである。

月祀る

荻野杏子

月祀る句に親しみし歳月も
秋声を聴くや遺墨の短冊に
春慶の短冊掛や螢草
城壁を住処としたる穴惑
山姥となつて天上曼珠沙華
捕へたる秋の守宮のまだ子ども
水澄んで石に石置く山の道
やうやくに一息つきぬ秋灯下

遠からず日本も二季の国になるだろう説が耳を離れない。たとえば秋。豊かな実りもさり乍ら文人墨客、芸術家諸氏の季への讃美も実感できぬまま冬に至るのは嘆かわしい。せめて秋を愛で損なわぬよう折々空の通い路にも目をやるのだが本物は一向に。慌てる勿れ、せいぜい心の窓を磨きなされ、とは龍田姫のお声か。

草戸綴り

服部　くらら

秋あきらめぬ蔓先の勢かな

区々なテントのそれも草の市

盆の客月がきれいと声置きて

指切りげんまん撫子の種採らな

つくつくし君デビューすと追白に

処暑の三叉路少年の帽会釈

水遣りのアーチをトンボ赤蜻蛉

朝顔の小ぶりとならば筒籠に

冬の月を見に来て泊る感応寺　鬼城

瀬戸市感応寺にある、初めて出会った鬼城句碑。大正十年十一月十三日、鬼城は高蔵寺駅に降りたという。高蔵寺駅は我が家のすぐ近く。鬼城が感応寺までの道に見た冬の月。十一月十三日の月を見ると、鬼城が見た月を見ているようで、鬼城が身近になる。一番好きな鬼城の句。

秋愁ひ

田口風子

愛知県博物館
チケット売り場秋の雛飾らるる

縄文に舟葬のあり水の秋

舟形木棺深々と秋のこゑ

犬抱きしままの屈葬秋愁ひ

錆しるき手枷足枷秋の声

秋うらら誕生仏の細き指

水木しげる展
塗壁のときに瞬き秋愉し

冷まじや砂かけ婆の白き足袋

※「塗壁」「砂かけ婆」は水木しげるの妖怪

早朝の散歩を楽しんでいます。利根川沿いのサイクリングロードは恰好の場所で、雑木の隙間から朝日を拝み、川音に鳥声に耳を傾けます。
近くの寺への参詣は習慣となり、尼僧の住職と時々挨拶を交わします。
山胡桃や通草や烏瓜の季節ももうすぐ。河岸に立つ白鷺に会えるのも楽しみの一つです。

牡蠣筏

工藤弘子

冷まじや安珍を追ふ絵巻物
冬波にさゆれて海女の待機船
波に消ゆ磯着の白さ返り花
小港や綿虫夕日散らしつつ
海鳴りの崖花石蕗の光りあふ
冬晴や欄干に吊る一夜干し
水やはし冬夕焼の五十鈴川
牡蠣筏巨き朝日を乗せにけり

五月の十七日に近い金曜日から日曜日にかけて行われる、東京の浅草神社の祭礼。祭神の「三社」は、浅草寺の本尊である観音像を網で掬いあげた三人の漁師を祀ったもの。

三基の宮神輿を中心に百余基の神輿が付近一帯を練り歩くさまは壮観。東京の夏の風物詩の最大のものの一つである。

三社祭

市川栄司

板前は浅草生れ祭足袋

仲見世に売る白ふどし三社祭

先駆けは鳶の木遣や三社祭

荒神輿強訴のごとく街を練る

大団扇煽りてをりぬ荒神輿

荒神輿ふどしの男よかりける

男衆（おとこし）の出払ひし路地三社祭

どぜう屋の裏にも干され祭足袋

秋の一日、本證寺を訪れた。戦国時代、三河一向一揆の拠点となった寺である。土塁を備え、水壕に囲まれており、蓮が見事に育っていた。すでに蓮の実はほとんど飛んでしまっていたが、枯れ色をした蓮はまだ天を指して、すっくと立っていた。ちょうどお庫裡様に出会い、お話をきく機会にも恵まれた。

本證寺（一揆寺）

江川貞代

道すがら草の絮とぶ一揆寺

墓守の寒蟬増やす昼下り

秋の蝶墓地の低きを縺れつつ

経蔵に張りつき鳴かず法師蟬（つくつくし）

実の飛んでしまひし蓮（はちす）ばかりかな

けふは白秋庫裡様の話きく

蛇穴に入る家康の黒印状

杉の実ぽろぽろ枢（くるる）を落とす午後の四時

函館朝市は、早朝から威勢の良い声が飛び交い活気に満ちていた。約二百八十軒が出店し、糶落としたばかりの魚介や野菜など北海道の味覚が集まっている。その一角に「朝市どんぶり市場」があり、海鮮食堂やラーメン店などが新鮮な魚介を多彩なメニューで提供しており、函館の味を求める観光客で賑わっていた。

祈りの刻

酒井英子

江差にて

夕蜻蛉日本一小さき道の駅

実玫瑰やレール海から造船所

唄の江差の師匠はやん衆青葉潮

男爵薯の丸焼きバター滑り落つ

茹で上げし毛蟹の足を折りて秋

聖堂へまっすぐな道涼新た

函館ハリストス正教会

新涼やガンガン寺は祈りの刻

啄木の墓へ新涼の切通し

若竹賞は第二十七回新人賞を、その翌々年に正賞をいただいた。その後しばらくは達成感があり応募はしていなかった。しかし、そう収まり返るのはどうかと思い、また応募を始め今日に至っている。今年はどうか。実はもう応募しているのである。この号が出るころには結果が判明していると思うのだが。

台風一過

白木紀子

台風をつきて胃カメラ呑みに行く
空調のひえびえ胃カメラ検査室
処置室に赤子泣く声台風来
台風は言ふほど吹かず蔦かずら
名古屋城けふはお休み台風裡
木の道のいつか土道つくつくし
夫に買ふ処暑のパジャマの八分丈
もうお役ご免のミスト扇風機

のら猫ミー

お隣の主が亡くなられ飼い猫が我が家を覗くようになった。一日に三度ほどは来るのでミーと名付けた。呼ぶとニャーと答えるが近寄っては来ない。この頃「チュール」と言う餌が気に入ったらしく近づいてくるがさわらせない。

気長に待つことに!!

矢作川

岡田　つばな

矢作川渡る風音秋隣

脱ぎすてる物ももう無き残暑かな

のら猫にけさも呼ばるる秋暑し

二人してお盆提灯組み立てる

砕け散る波の白さよ盆果つる

朝の露稲の葉先に並びをり

露に立つ白鷺けふは二羽で立つ

稔り田の水路をのぞく鷺一羽

八月上旬あこがれの象潟へ着く。白波の立つ海、雪渓の輝く鳥海山、その裾野に広がる一面の青田に六十余りの小高い丘が松林を乗せ点在する。国の天然記念物に指定され遊歩道もあるが暑さには勝てず、車で廻ってみる。象潟のもう一つの名物に岩牡蠣がある。一個八〇〇円と値段もなかなかだが、実に美味しい。

象潟

渡邊悦子

顔も無き海月の恋のいかなりき

夏運河「つや姫」抱く山居倉庫

象潟に言葉奪はる青田風

青田波九十九島の名を残し

生でよし焼きもよしかな夏の牡蠣

湯の町の時代に惑ふ日の盛

喉越しに暑さ凌ぐや稲庭めん

柔らかき方言耳に祭の夜

千号から千百号への道私は何を学んだのだろう。今丁度、季節外れの花火が遠くで揚がっています。コロナや雨の線状降水帯が季語の情緒を狂わせて、想像俳句になっていないだろうか心配です。私は背伸びしないで地元に沿った句を皆さんにお届け出来ればと思います。この句は広島の句だねと言って頂けると倖せです。

時雨虹

中井光瞬

赤とんぼ疲れて眠る北枕

揚げ船の碇も錆びて十三夜

廃校の机並べた芋煮会

底引きの漁を継ぐ子の時雨月

戻れば漁師島に住む時雨虹

爆心を離れて生きる冬木の芽

枯野の果ては拉致ありし海に出る

出雲路の恵方道行くちゃんちゃんこ

伊吹山は身近な山だが百名山にも選ばれている名峰である。特に夏のお花畑は見逃せない。又、山頂の日本武尊像は神話を伝え神秘的な処も魅力の一つである。「そのままよ月もたのまじ伊吹山」と絶景を詠んだ芭蕉の句碑が登山者を迎えている。今後も躓かぬ様、滑らぬ様、ハイキングを楽しみたい。

伊吹山

池田　真佐子

気心の知れた同士よ登山帽

足軽し下野草の明るさに

天上に百花揃へてお花畑

雲の峰日本武尊にロマン有り

白南風や視界三百六十度

花崗岩散らす山腹岩ひばり

夏霞びわ湖の静寂隠しをり

蜻蛉に下山の肩を貸しにけり

「ほかの土地の魚は食えん」と云われる程、魚のおいしい大浜は漁師の町でもあります。そして又この地区には寺社や路地が多く残る「てらまち」でもあります。機会が有りましたらぜひ神社仏閣、路地を歩いていただき目にした風景を詠んで下さい。自分も「暮しが俳句になる」コトバの魅力を求め残された余生を楽しんで参りたいと思っています。

大浜寺町

中野　まさし

めぐり行く寺の築地や萩の花

どの路地も寺に続きし秋日和

大仏の鼻梁に触れし秋の風

秋蝶や閉ぢることなき仁王の目

本堂の風鐸鳴らす初嵐

蓮弁に一燈揺れて秋涼し

本尊は一木造りちちろ鳴く

秋の虹拝む仏の慈悲慈愛

若竹巻頭句集

凡例

一、本欄には平成二十七年九月号（第一〇〇一号）から令和五年十二月号（第一一〇〇号）までの真珠抄の巻頭作者四句をそれぞれ集録した。

一、原則として、当時若竹に掲載されたそのままの形で集録した。

（抄出　橋本周策、池田真佐子）

平成27年9月号

緑蔭や耳たぶほどのあぶり餅　西尾　酒井　英子

岩魚焼く炉辺串うつて塩ふつて

梅雨晴れや鉄鍋を干す佃煮屋

棟割長屋洗ひ張りいと涼し

平成27年10月号

かなかなにかなかな応へ命継ぐ　豊田　堀田　朋子

紙魚居るを知りて閉ぢけり智恵子抄

嫁姑少し近づく一夜酒

差し水の波紋にめだか揺蕩ひぬ

平成27年11月号

余呉川を遡るごと曼殊沙華　春日井　田口　風子

稲の香の湖国日和を遊びけり

色鳥や編み笠門に手斧跡

姉川の痩せし流れや狗尾草

平成27年12月号

名月や妹と揃へし十五品　愛知　清水ヤイ子

四股踏んで始まる相撲兄妹

無造作に袋で並ぶラ・フランス

紙張地蔵真つ赤なカンナ足下に

平成28年1月号

しぐるるや声の明るき人来る　前橋　中村ハマ子

冬に入る音なき雨の降り止まず

鉄線の大き一輪返り花

日本晴どうだん紅葉極めけり

平成28年2月号

冬りんご試食の出来る直売所　西尾　稲垣　まき

淋しいと愚痴吐く男冬の雨

トンネルの暗き入口冬ざるる

渋抜きし柿の甘さに酔うてをり

平成28年3月号

初訓示もどかし通りにくき声　碧南　筒井　万司

街の灯の残りて城の初明り

年の瀬やみちのくへ発つ不良処理

喪の葉書くれし友の訃十二月

平成28年4月号

節分やおひねりの豆飛んで来し　伊勢　川端　庸子

節分や少し離れて猫座る

節分のさなか干物の匂ひけり

東風吹くや軒にはんぎり干してあり

平成28年5月号

菜虫蝶と化す汚染土砂積みしまま　豊明　石崎　白泉

蛇穴を出づ防空壕の出口

東風吹くや大黒天の鳥衾

春や夢呼ぶ七宝のネックレス

平成28年6月号

春昼を灯して壁の袖がらみ　前橋　鈴木　玲子

うららかや蔵の埴輪も外にいでよ

春灯低き鴨居に首すくめ

白昼の蛙合戦神の池

平成28年7月号

双耳立つ谷川岳や夏来る　前橋　平井　香

立夏輝くトマの耳オキの耳

奥利根の空や家紋の吹流し

立夏名のみやコンビニに薪売られ

平成28年8月号

笠網の出漁日誌漁具置場　西尾　長村　道子

鮎汲の岩に頬杖ついてをり

三百の鮎汲みし日の漁日誌

水の神信じて鮎の里に住む

平成28年9月号

どことなく幼さ透けて夏烏　豊田　堀田　朋子

燕の子置屋の今は青果店

馬つなぎ引つぱつてみる梅雨晴間

捜し倦むラップの巻き口半夏生

平成28年10月号

漁師みな沖より望む那智の滝　岡崎　高濱　聡光

天文台らし軒先に秋刀魚干す

すべり台逆登りして秋暑し

鳴焼や四股名で判る相撲部屋

平成28年11月号

ちちろ虫鳴かせ鎌倉五山かな　日進　高橋より子

蓮の実のとんで鎌倉源氏池

仏舎利と蔵して白し萩の寺

久に聴く夫の口笛良夜なり

平成28年12月号

比良を出て錆びゆく鮎となりにけり　名古屋　今井　和子

鮎落つる川や天蚕糸に鵜のむくろ

竹生島見えて落鮎力尽く

落鮎や淡海の風の濃くなりぬ

平成29年1月号

蝶が蝶追ふ秋天に垂直に　春日井　田口　風子

青鷺の距離の微妙に池普請

荻の声聞く三方を山にして

警官と立ち話する稲架日和

平成29年2月号

沙悟浄に佇む足裏冷ゆるまで　西尾　岡田つばな

幾度の冬ぞ即身仏の黙

冬ぬくし仏を守る仏達

美濃は冬水に濡らして貼るお札

平成29年3月号

雪晴に青年の画家瞳の凛凛し　西尾　牧野　暁行

快晴や雀のこぼす屋根の雪

雪宿に白系露人ギター弾く

雪晴に干す大人靴子供靴

平成29年4月号

冬ざれや火の神眠る登り窯　前橋　新部とし子

煙突に醜草冬の陶都かな

雪暗れややきもの街道店仕舞

雪しまく土管坂への狭き道

平成29年5月号

原爆を知る木知らぬ木水温む　広島　中井　光瞬

雪解して過疎に新たな空の色

山桜昭和の母校消えにけり

尾道や恋猫の待つ石畳

平成29年6月号

つらつら椿巡礼の通り過ぐ　あま　烏野かつよ

国分寺跡賑やかに土筆摘む

春風や只聞いてゐる波の音

詩を一つ卒業の子に選びけり

平成29年7月号

琵琶鱒の琵琶湖に育ち赤を増す　愛知　嶺　教子

蕗味噌や湧水で炊く近江米

泡ふきあぐ浅蜊しぐれの踊り炊き

しぐれ屋の手に胼胝つくり浅蜊炊く

平成29年8月号

暮れゆくを楽しむ夏の白ワイン　名古屋　東浦津也子

新茶淹れふと人生の持ち時間

母の日のチーズケーキのおいしさよ

菖蒲湯や独り早目に飲むワイン

平成29年9月号

角栄てふ宰相ゐたり錦鯉　西尾　服部くらら

川蜻蛉水切りの子等去るとすぐ

おはぐろの夕風穢すことをせず

蓮ふたたび三河一向一揆寺

平成29年10月号

炎天下賽の河原は影もなし　西尾　岡田　季男

涙して汗して巡る恐山

老鶯の遠き声のみ恐山

夏雲と競へる如し岩手富士

平成29年11月号

竜淵に潜む渡良瀬遊水池　前橋　関口　一秀

葭原や正造の声民の声

葭原の遺跡に放つ鐘三打

蜩の声の消えゆく葭の闇

平成29年12月号

かなかなに森一本の道通す　名古屋　阿知波裕子

子の家の前水平に赤蜻蛉

削ぎ落とすことあれやこれ馬肥ゆる

中年や時には桃にワインふり

平成30年1月号

天高し秘窯を守る屏風岩　豊田　山田　和男

磁石場の掘跡深く秋暮るる

秋興や叩き唐津は石で受く

朝寒や風のぶつかる唐津湾

平成30年2月号

帰りゆくサンタクロース見かけたる　神奈川　田口　茉於

公園に父と子遊びクリスマス

着膨れて小さき拳の見えてゐる

三の酉手締めの声のする方へ

平成30年3月号

水仙のほかは小暗き瑞泉寺　前橋　大澤　萌衣

夕明りして香をほどく雪中花

海鳴りを遠く近くに水仙花

水仙のひとかたまりを冠木門

平成30年4月号

前触れは氷湖の唸り御神渡　名古屋　今井　和子

轟くは神の沓音御神渡

氷堤は神の足跡御神渡

上座又とどろけり御神渡

平成30年5月号

登園の子等より春の歌こぼる　広島　竹原多枝子

ひさかきに花ありしかも朱の差せる

全島の馬酔木咲き出す息づかひ

掘り出され蛙逃げ行く春の中

平成30年6月号

水をゆらして蝌蚪に足出はじめる　みよし　奥村　頼子

花ミモザおしやべり好きな女の子

ゆく春の円空仏の背はたひら

浮世絵の遊女見返る春の宵

平成30年7月号

残花なほ箱根離宮の在りし処　豊明　石崎　白泉

雲助の親分の墓鳥雲に

葉桜や本丸を巻く帯曲輪

筍流しや底深き薬研堀

平成30年8月号

坩堝てふ実験道具夏盛る　豊田　堀田　朋子

櫛挽の興にのりたる梅雨一日

辣韮剝くもともと心白きもの

夏めくや通し柱に手斧跡

平成30年9月号

老鶯や川の名変はる渡月橋　西尾　米津季恵野

潮の香や肌にまとひし梅雨湿り

夜濯や十指に残る草の灰汁

初蝉や上がりしままの温度計

平成30年10月号

ゐるだけでうれしきは嬰夏座敷　広島　中井　光瞬

蝉の木に原爆の歌ひびきけり

蝉時雨止むまで待つか禅の門

空蝉に出合ふも縁極楽寺

平成30年11月号

桐一葉老ゆればまたでる齟齬一つ　西尾　高橋　冬竹

蹲踞の杓の乾かぬけふ白露

禅林に群れてお辞儀の大毛蓼

蚯蚓鳴く寂しきときは笛吹いて

平成30年12月号

露草や廃墟に今も涸れぬ井戸　名古屋　加島　照子

とびきりの色出しきりて毒茸

秋興や刀箪笥のある角屋

身に入むや維新の道の志士墳墓

平成31年1月号

酢造りや粕桶の箍弛みなし　名古屋　加島　孝允

化粧する地蔵ゆかしき小浜秋

冷まじや龍馬撃ちしと細身刀

冬温し人情あつき高座芸

平成31年2月号

通し矢のへこみに触るる小春かな　愛知　清水ヤイ子

千体仏の冷たき程にかうがうし

短日や千体仏は並列に

冬の日や木地師の里に故郷を

平成31年3月号

凍る夜の板敷川に湯の匂ひ　岡崎　荻野　杏子

冬の日の鳶や巧みに笛吹ける

探梅の雨の雫もよかりけり

猪の牙にふれたる寒さかな

平成31年4月号

追儺寺赤鬼青鬼控室　春日井　田口　風子

寒土用歩けばどこか骨痛し

春待つてをり啄木の女々しき字

鈍行を乗り継ぐバレンタインの日

令和元年5月号

大石忌一力亭の犬矢来　西尾　鈴木　恭美

水ぬるむ魚目覚むるに足りぬほど

携帯を肌身離さぬ恋の春

朧夜や背中丸めて爪を切る

令和元年6月号

清明や太く湧水落つる音　前橋　春山　泉

水の春足に浅瀬の懐かしさ

足裏に土の柔さを彼岸道

春の池隅は卵を生む所

令和元年7月号

青空の八風街道谷若葉　名古屋　今泉かの子

退院の荷物分け持つ花の下

鈴鹿山したたり獅子は玉くはふ

やはらかき木地師の口調山若葉

令和元年8月号

六月や降り出せば雨降り過ぎて　西尾　服部くらら

梅雨本番いよいよ重き蔵戸かな

紫陽花やランチに選ぶ五穀米

山梔子や目を閉ぢて聞く馬頭琴

令和元年9月号

天牛や数多童話を生みし里　あま　烏野かつよ

南吉も聞きし葉音か梅雨晴るる

夏の空十八で書くごん狐

梅雨晴や駅のホームのごん狐

令和元年10月号

夕闇や風蘭の香に待ち合はす　西尾　池田あや美

糸蜻蛉連れて乗り来し昇降機

降壇の眉根涼しきチューバの子

山寺の手漕井こぐ子夏休み

令和元年11月号

一行事終り一入秋めきぬ　西尾　深見ゆき子

なす術もなく転がりぬ明日は処暑

虫鳴くを確かめに出る勝手口

ひたすらに飛ぶ翡翠や秋の川

令和元年12月号

一年をうかうか過ごしさうな秋　愛知　成瀬マスミ

橡餅の数限られて売られをり

渡り来し初鴨ひとり遊びして

秋湿りせる貝塚に貝白し

令和2年1月号

南に東に冬日の玻璃戸江戸足袋屋　名古屋　江川　貞代

江戸足袋や文木で計る足の寸

しやがみ見る墨堤に絵図百合かもめ

幇間の襦袢に髑髏神の留守

令和2年2月号

十二月八日時計の針合はす　小牧　川嵜　昭典

雑踏に釦が一つ開戦日

待降節聖樹に吊すチョコレート

ハイタッチする子供の手ラガーの手

令和２年３月号

河馬二頭岩と見紛ふ日向ぼこ　豊田　鶴田　和美

大根の辛き先端生気満つ

大根引き農事暦の染む身体

男らのエプロン厚地大根切る

令和２年４月号

裸木にまき付く蔓もまた裸　みよし　奥村　頼子

寒の夜触れて愛しき犬の鼻

三寒の風少しある四温晴

春立つや絵の額ひとつ掛けかへて

令和２年５月号

病室の日記は句帖魚は氷に　刈谷　鈴木　帰心

退院の母へ春服選りてをり

春暁や教育大は丘の上

棟梁のお国訛りや鳥雲に

令和２年６月号

花山葵田峰の水に三束ほど　西尾　岡田つばな

浜大根地産地消の店が開く

げんげ田の向かうに火力発電所

振り向けば放つてくれし夏みかん

令和２年７月号

外出を猫も控へて籐寝椅子　岡崎　天野れい子

豆の飯三河訛りに西ひがし

きみまろに笑ひ笑はれ心太

巴里祭動かぬメリーゴーランド

令和２年８月号

降り止まぬこんな日も好き濃あぢさゐ　名古屋　重留　香苗

たれかれに上げるマスクを縫ひし夏

父母の墓は山の天辺ほととぎす

竹藪を抜けて隠沼蛇いちご

令和2年9月号

紫陽花の毬柔らかく手に返る　豊田　山田　和男

新緑や筵の先の露天風呂

鉱泉の色青青と百合の花

涼しさや縄文土器の蛇模様

令和2年10月号

槌音の止めば昼来る蝉しぐれ　名古屋　阿知波裕子

重たきをかるく言ひなし水中花

原爆忌広島の児の意志強き

水汲むはいつも長子や墓詣

令和2年11月号

水色が欲し摘み溜めて臭木の実　西尾　酒井　英子

藍甕に藍を満たせば秋驟雨

明日は染古墨摺り溜む夜半の秋

縁側が好きで色なき風の中

令和2年12月号

猿走る影やもろこし直売所　前橋　平井　香

露踏みて登る鎌原観音堂

熔岩の上の開拓村や秋の霜

朝駆けの重き響きや輓馬肥ゆ

令和3年1月号

みそ蔵に染みつく匂冬隣　西尾　長村　道子

桶底の分厚き檜秋惜しむ

行く秋や当主の撫づる仕込桶

飴色の竹の天井秋深む

令和3年2月号

人間の寂しさ温さ頬被り　岡崎　荻野　杏子

今年また飛騨より届く冬野菜

会へぬまま心老いゆく寒さかな

望郷のストーブの上芋茎煮る

令和３年３月号

宇治橋の木除けぴしぴし神渡し　伊勢　川端　庸子

水涸るる底石白き五十鈴川

子供らの嬉しきクリスマス前夜

馬小屋を掃き清めるもクリスマス

令和３年４月号

北窓を開き児の九九カード置く　西尾　磯貝　恵子

冴え返るランドセルにも予備マスク

木の実植うトトロの森を夢に見て

夫の本今もそのまま菜の花忌

令和３年５月号

厚氷裏に動けるもののあり　西尾　鈴木こう子

節分の鬼は作業着作業靴

整理券持つて出直す申告期

ちやん付けて呼びたき名なり春蜜柑

令和３年６月号

真つ向に峙つ雪解伊吹かな　名古屋　阿知波裕子

春の日や隙なく枡をおく枡屋

また一人水いただきに梅の宮

春北風に立ちて孔子の耳長し

令和３年７月号

屑繭の値踏みはざつと目秤で　西尾　稲垣　まき

行く春や仕舞ひしままの薬用酒

老鶯や坂参道を登りきる

目を逸らし受ける注射や青嵐

令和３年８月号

掛かりつけ医師に軽口麦の秋　刈谷　鈴木　帰心

文豪も通ひし母校あふち咲く

老鶯や家事にも慣れてきし男

茅花流しや数百の指揮者たち

令和3年9月号

端でぶぶ漬け弘法の新茶売　名古屋　堀場　幸子

千枚の田へ老鶯の惜しみなく

自転車の鍵を手首にかき氷

半夏生蛸は秤に吸ひつきて

令和3年10月号

刈上げのうなじ清らか初浴衣　前橋　渡邊　悦子

嫉妬とはこびり付くもの髪洗ふ

夏シャツの上に白衣の当直医

鳴き声のまだ慎ましく初みんみん

令和3年11月号

潮待ちの雁木に憩ふ秋燕　東浦　渡邊たけし

首塚や潮騒を聴く曼殊沙華

天空に架かる秋虹遠流の地

秋気満つ彦根に遺る赤備へ

令和3年12月号

捨てられし棚田いろどる桜蓼　群馬　堀田　忠男

朝の散歩白山菊に癒されし

巣立ち鷹ひたすら親の戻り待つ

浅黄斑横断歩道を過りけり

令和4年1月号

胸元にそろり手を差す菊師かな　豊明　石崎　白泉

紅葉且つ散る真田家の檀那寺

地下壕の大本営や熊穴に

木の葉髪拾ひ静かに句帳閉づ

令和4年2月号

牡蠣打ちの男迷彩服で来る　名古屋　小柳　絲子

胴切りの松打台に牡蠣打ち女

正座せねば力は出ぬと牡蠣打女

話す間も牡蠣打ち続け打子の手

令和４年３月号

神は海より冬潮に朱の鳥居　豊田　堀田　朋子

初御空ひと日動かぬ船溜り

冬日滑らか渡船場の石畳

小さきは海へ返すと牡蠣剝き女

令和４年４月号

四温光みな長身の姉家族　春日井　田口　風子

日脚伸ぶキリンと駝鳥隔つ柵

風眩しくるくる動く河馬の耳

立春大吉甥つ子の子沢山

令和４年５月号

耳寄せて大樹の芽吹く音聞けり　前橋　関口　一秀

春光や括り絆の指の先

先染めの十字絆に春の色

銘仙の香る館の吊し雛

令和４年６月号

オーケストラ・ピット空つぽ春の昼　愛知　山科　和子

花冷や返却箱に紛失本

連ドラの予告で泣けり春の朝

春の火事友の和菓子屋崩れ落つ

令和４年７月号

雨あがる麦の穂揺るるあたりより　神奈川　田口　茉於

また坂を行く長崎に枇杷育ち

さりさりとスカート軋む春の雨

春の夢ここでいつでも眠くなる

令和４年８月号

隣り合ふ園舎と校舎麦熟るる　西尾　服部くらら

麦秋や貨物列車の音乾く

麦の秋風河床から須恵器片

桐の花御社抱ふ八面山

令和４年９月号

施餓鬼会の紫陽花寺に聴く法話　前橋　新部とし子

紫陽花やかりがね橋を傘かしげ

三線の哀しき調べ沖縄忌

慰霊の日笑みし乙女のおさげ髪

令和４年10月号

一蔵に杜氏は一人背な涼し　西尾　池田あや美

季夏の酒蔵菌棲みつきゐて閑か

蔵元の冷酒を試飲果実の香

青葉涼しく百年の江戸彼岸

令和４年11月号

秋雨や身動きできぬ岩場道　豊田　山田　和男

雨降れば雷鳥親子木道に

雪渓や池塘育む広き原

低山の賑はふ土曜秋めきぬ

令和４年12月号

舟遊びして十月の嵐山　西尾　鈴木　恭美

悠然と秋の雲泰然と大樹

十六夜や姨捨駅の二番線

飛び交はし鳴き交はし秋の鳥せはし

令和５年１月号

山の木の水満ち満ちて今日の月　名古屋　今泉かの子

用水に冬の金魚や秋葉講

機織りの二人初冬の木綿蔵

銀行は写経サロンへ青木の実

令和５年２月号

黄落のその中の木に攀じ上る　小牧　川嵜　昭典

木の葉舞ふ舞ふ滑り台何度でも

声だけが通り過ぎゆく冬木立

裸木と言ふには二三葉の残る

令和５年３月号

春暁やへその緒切りし子を胸に　藤岡　飯島　慶子

冴返る夜の背中のなほ丸く

放流のサイレン利根は雪解水

おほかたの荷を送り出し弥生尽

令和５年４月号

冬暖か止まることなきチェロの指　豊田　鶴田　和美

冬の夜チェリストチェロを抱くごと

「ありがたう」に温められたり悴む手

春待つやバイクの男女城跡に

令和５年５月号

春一番花嫁の来る島に吹く　広島　中井　光瞬

ピカドンの村と呼ばれて春菜の芽

雀の子原爆ドームの水を飲む

春潮や古代魔除けの朱回廊

令和５年６月号

花の下百歳までは無理と母　名古屋　池田真佐子

土手すべり子はたんぽぽを取り落とす

福祉の店のパン売り切れてあたたかし

リビングに祖母の花箪笥うららけし

令和５年７月号

幣立てて源流といふ滴れり　豊田　市川　栄司

夏燕守礼の門は扉を持たず

麦や節洩るる古民家夏炉焚く

万緑や手にしてかろき形見分け

令和５年８月号

夕薄暑いま夫らしき気配して　名古屋　江川　貞代

夫逝きて余花の明りや七七忌

かなしさがさびしさとなり額の花

足出せば山蟻われを越えゆけり

令和5年9月号

蓮咲く家康攻めし大伽藍　西尾　三矢らく子

太鼓樓も寺家老家も夕立中

梅雨晴や絵伝に太子出産図

一揆寺外堀で鳴く雨蛙

令和5年10月号

刃物砥ぐ音の涼しき厨かな　岡崎　荻野　杏子

送り盆母に倣ひし御膳立て

星流る母の遺品に吾が手紙

少年が叩く太鼓や盆踊り

令和5年11月号

一人づつ登る岩峰天高し　豊田　山田　和男

左鎌の絵馬畳々と秋の声

込合へる初級の岩場秋日和

白檜會の高きに標示夏の山

令和5年12月号

秋うらら干潟に愁ひ吹き飛ばす　西尾　髙橋　冬竹

島の鐘撞いて秋天とどろかす

秋愁や干潟に子蟹追へばなほ

秋干潟歩すや信濃の人も来て

青竹集

治部煮椀

治部煮椀蒔絵も加賀や秋の宿
箔の用具はなべて竹なり秋気澄む
息かけて金箔のばす秋灯下
秋気澄む百八枚の天井画
一つ事にこだはる女猫じやらし

酒井英子

村祭り

棒の手の飛び技さやか決まりけり
幟立つ半土もしかと村祭り
キッチンカーでて賑はへる村祭り
いたいけな子供棒の手村祭り
村祭り支度神域草を取る

高橋冬竹

野菊咲く

伊良湖岬差羽の渡る風を待つ　辻村勅代

いいあんばい腰掛け石ありひよどり来

野菊咲く左千夫のロマン今ひらく

桃吹くや左千夫は政夫民子呼ぶ

園児画く月はみだせり皓皓と

秋果

一目惚れさせる気シャインマスカット　服部くらら

迷ひ癖までも母似と白無花果

毬栗や餓鬼大将の何処へやら

青みかん東三河の波の綺羅

伝へたきものの一つに柿膾

小鰯

水澄むや真水のごとき赤子寝る　中井光瞬

十六夜の鼓動やはらぐ大きな木

小鰯に賞味期限の海残る

水の秋湯治場までは杖を突く

空つぽのバスの終点曼珠沙華

秋濤

玉音の空しさ耳朶に終戦日
秋時雨三十六峰己がもの
秋濤を目瞑り聞くや島弘法
秋興やねね愛用の室内ばき
村芝居悲劇話に貰ひ泣き

渡邊たけし

長久手合戦史跡

木犀の参道を来て観世音
首塚にけふも供花ある柿の秋
秋惜しむ也有筆写の戦役図
天高しどかと家康床机石
秋日燦色金山の幟旗

池田あや美

顔見世

南座にまねき上れり年詰まる
総見の顔見世に急く雪の中
顔見世や桟敷に舞妓ひしめきて
顔見世や義理人情の世に遊ぶ
勧進帳見ての帰路なりぬくめ鮓

市川栄司

トンボロ

海光へ海桐実を爆ぜ実をこぼす
雁渡しトンボロ日和といふべしや
砂紋なすトンボロ踏みて島の秋
飛魚北風や蟹穴に蟹出つ入りつ
トンボロをしかと踏みしめ秋惜しむ

江川貞代

トンボロ

トンボロや秋天叩く波の音
風音の波音となる秋の砂洲
砂洲踏めば地球の裏の秋の声
砂洲渡る三河の国の秋の島
天と地をつなぐきづなや秋の砂洲

岡田つばな

秋日和

秋日和富士の裾野の牧草地
おなもみに触らぬやうに横歩き
どこからも富士の見えゐて天高し
キリシタン灯籠小鳥来てをりぬ
木犀の匂ひ来しこと夫の言ふ

荻野杏子

伊香保にて

腰強きうどん掬へり鬼城の忌
石段の貫く湯町虫の秋
道の辺や色無き風の番所跡
つきまとふ残暑払へり黒船館
秋声のあえか夢二の蔵座敷

工藤弘子

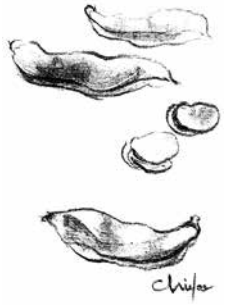
一一〇〇号記念基金御礼

（敬称略）

▽岩瀬みその　五口
▽中野まさし　五口
▽渡邊たけし　一〇口
▽奥村頼子　二〇口
▽米津季恵野　一五口
▽黒野美由紀　一〇口
▽磯貝恵子　一〇口
▽太田小夜子　五口
▽浜島君江　一〇口
▽梅原巳代子　五口
▽鈴木まり子　五口
▽田口茉於　一〇口
▽國松房野　三口
▽匿名　五〇口
▽金原香代子　三口
▽市川栄司　五〇口
▽江川貞代　二五口
▽松岡裕子　五口
▽神谷つた子　一〇口

翠竹集 I

（同人自選）



水郷　加島照子

水郷はくまなく晴れて鵙日和
水郷の橋みな低し色鳥来
目つむりて聴く水郷の鵙の声

コスモス　鈴木静香

歩くことたのしコスモス迷路かな
秋晴や支援二人の送迎車
長き夜のよみふける「八十歳の壁」

無花果　天野れい子

無花果は早や売り切れて二七の市
対岸は商業高校曼珠沙華
秋暑し家康公の鼻めがね

曼珠沙華　奥村頼子

咲く刻を違へず忽と曼珠沙華
田の神の奢りか畦の曼珠沙華
首塚に群れて飛鳥の曼珠沙華

秋桜　濱嶋君江

秋桜災害もなく高く咲く
秋桜活け祝わるる誕生日
秋桜田舎の風にゆれており

寝覚の床　石崎白泉

見下ろせば浦島堂や竜淵に
紅葉且つ散る地崩れの裏寝覚
奥まりし道に掛け札「熊注意」

トンボロ干潟　重留香苗

茶の街の雀干潟の蛤に
トンボロにひしめく命秋晴るる
惜秋のトンボロ潮の香に濡れて

大花野　松元貞子

ゴンドラに揺れる歓声大花野
すれ違ふ声も優しき大花野
大花野遊び疲れし子の寝顔

草紅葉　斉藤浩美

一団で来て一団で去る稲雀
謎多き古墳のロマン草紅葉
すいすいと信号を抜け秋晴るる

徳川園観月会　白木紀子

提灯に葵の御紋月今宵
高々と蓬左文庫の上に月
黒門を出て満月を振り返る

五箇山の夜　鈴木帰心

中腰で踊る麦屋や律の風
白萩やこきりこ節のしでの舞
まいまいを踊る男女やましら酒

間引菜　平田眞子

一握りの間引菜椀に朝餉汁
湧水に放てばきらり貝割菜
軽トラよりどさっと庭に中抜菜

菊日和　関口一秀

菊日和ビエンナーレに沸く山家
皀角子（さいかち）や己を護る強き棘
秋の日や獄舎の中の矯正展

冬虹　桑山撫子

冬の虹弧描き海はるかなり
産土に太鼓響きて農上り
侘助や一日の予定箇条書

バス旅行にて　原田弘子

天主より望む浜松鰯雲
ママの前幼なヨチヨチ秋の昼
湖の上に見る名月の大きさよ

秋　山田和男

そぞろ寒突起だらけの展示椅子
難解な現代アート秋暑し
菊の日やビル十階の俳句会

秋の山　烏野かつよ

秋の山アサギマダラの来てをりぬ
ケーブルの窓を過ぐるや烏瓜
墓参り奈良大阪の県境

浅間山　鈴木こう子

浅間山の溶岩黒し七竈
らば歩すや浅間山より秋の風
溶岩の隙間いろどる草もみじ

落し文　水野幸子

落し文男がそつと拾ひけり
魔女の国の入口めきて烏瓜
綿の実のふはふは雲をふやしけり

運動会　加藤久子

メルヘンな母校の校舎運動会
頑張れの響く校庭運動会
集合も解散も笛運動会

秋彼岸会　服部喜子

秋彼岸会両祖忌案内も秋澄めり
秋彼岸会家康生母まつる寺
並び焼香秋の彼岸の読経の音

今日の月　堀田朋子

この坂は後ろ歩きで今日の月
星消して満満月のほしいまま
地上には芳しき風今日の月

唐辛子　新部とし子

熱々の麺に追ひ打ち鷹の爪
強面の漢の除ける鷹の爪
賑はひのコリアンタウン唐辛子

時の流れ　大澤萌衣

まづ声のわたりて稲架の投げ受け手
菊人形ときの流れもやや疲れ
コンセントに火花みみずまだ鳴くか

雲　平井香

入道雲朝より空のぴつかぴか
乗り来るに座りよき雲盆迎へ
水澄むや流るる雲に風を見て

社家の庭　長村道子

秋澄むや戸隠蕎麦のぼつち盛り
随神門の屋根は茫茫草の花
吾亦紅水音清し社家の庭

鸛　堀口忠男

肌着干し見上ぐる空や鷹渡る
丈高き葦に隠るる鸛
秋空に吸ひ込まれゆく鸛

ノリタケの森　鶴田和美

ノリタケの誇りの白磁秋気帯ぶ
さやけしや皿に素描きの細き筆
秋風や一号窯のひそり立つ

秋の雨　髙柳由利子

秋の夜囁くやうに雨の音
裏山の影を隠して秋時雨
秋の雨子犬を胸に抱つこ紐

トンボロ日和　清水みな子

秋の海アオサと流木トンボロに
トンボロの砂紋締まりて秋気澄む
秋の干潟を歩む人いて海光る

さつま藷　神谷つた子

さつま藷曽孫来る迄掘らでおく
法話後に蕎麦打ちくれし説教師
秋雨のしずく連なる小枝かな

数へ日　飯島慶子

拭き上げて数へ日の窓明るかり
数へ日や時短レシピは救世主
数へ日やさびしさには慣れたつもり

赤とんぼ　池田真佐子

赤とんぼ増えて真昼の船溜
ボケ封じに賽銭はづみ赤とんぼ
山門を抜けて海へと赤とんぼ

更地　磯村通子

身にしむや宅地化の波押し寄せて
杭打たれ見納めとなる大刈田
代替りさら地を照らす芋名月

秋　堀場幸子

足元を水の流るる郡上秋
木匙もて母に掬ひし熟柿かな
チェロの音は父の声とも秋深し

夜長　鈴木玲子

長き夜や相槌打ちてなき小部屋
読みさしの本の嵩増ゆ夜の長し
長き夜の深き静寂や人恋ひし

コスモス　渡邊悦子

コスモスの風を引き寄す大墳墓
コスモスを胸いつぱいに友来たる
リハビリの日々の孤独や秋桜

トンボロ　乙部妙子

鰡飛ぶを遠くにトンボロ浜を歩す
草紅葉トンボロ浜の入口に
秋の浜海行く蝶を見送れり

夜の訪問　荒川洋子

訪ぬればまづ虫の音に迎へらる
草木の香すべて秋なる夜道かな
満天星の夜目にも赤く連なれる

秋しぐれ　小柳絲子

秋しぐれ「灯(あかり)を明(あか)く」と頼みけり
秋しぐれ三連休の永すぎて
秋灯し吾が家は多分あの辺り

唐辛子　春山泉

ジンジンと爪に火照りや唐辛子
きんぴらに刻む差し色唐辛子
来年の種を片寄せ唐辛子

大浜運河　中野まさし

潮の香のつよき運河や秋暑し
橋美しき運河の町や小鳥来る
漁り船消えて運河や秋さびし

初もみじ　米津季恵野

秋惜しむ老には刻の過ぎ早し
花嫁の少し恥らい初もみじ
夕日真赤まっかとなりし唐辛子

ホテルのランチ　髙瀬あけみ

イケメンの孫連れホテルの茸飯
秋の竹島ながめ至福のモカコーヒー
島つなぐ橋を行き交う秋日傘

秋　今泉かの子

石段の続く伊香保に秋惜しむ
つる籠屋消えし湯の町秋夕焼
バイク停むる巡査の長靴秋暑し

上州吟行　髙槝まり子

鳥声も和し鬼城忌の墓参り
閼伽水を墓碑にたっぷり萩の寺
黒猫(黒船屋)は夢二の化身身にぞ入む

思い出す人々

西山　厚　全24回

第12回【山口誓子】

父が徳島大学に勤めることになり、わが家は東京から徳島に引っ越して、私は生まれた。

やがて父は皇学館大学へ移ることになり、わが家は徳島から伊勢に引っ越した。

そして山口誓子を知った。療養のため四日市に居を移した誓子は、伊勢にも足を延ばし、伊勢を深く愛した。句碑が建ち、近年、山口誓子俳句館もできた。

父は、時折、誓子の句をつぶやいていた。

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ

父は学者だった。わが家で調べ物をしたり思索にふけったり原稿を書いている父の後ろ姿は、今も目に焼き付いている。

父は子煩悩で、私は父にとても可愛がられたが、そういう時の父には決して近づいてはいけないと、母に言い聞かされていた。

昭和20年（1945）、誓子は空襲で一切の蔵書と家財を失った。二年後、近所からの出火で、父も一切の蔵書と家財を失った。

学問はさびしい。きびしいのではなく、さびしい。

公益社団法人 俳人協会

「物故俳人展」並びに「冬の俳句展」

期間　令和5年11月1日(水)～令和6年1月31日(水)
（10時～16時・第2金曜日19時半まで）
※休館は毎週木曜日、年末年始は令和5年12月23日(土)～令和6年1月8日(月)、臨時休館日は1月20日(土)

場所　俳句文学館（3階展示室）

展示内容

【物故俳人展】令和4年に逝去された俳人の代表句、経歴、色紙、短冊など。

岡田日郎・根岸善雄・榎本好宏・伊東肇・棚山波朗・鈴木節子・木附沢麦青・千田一路・田中水桜・辻田克巳（敬称略・逝去日順）

【冬の俳句展】冬の俳句を展示。

高浜虚子・山口誓子・皆吉爽雨・石田波郷・深川正一郎・山口草堂・松本たかし（敬称略）

※一部展示替をいたします。

主催　公益社団法人 俳人協会
〒169-8521 東京都新宿区百人町3－28－10
TEL 03－3367－6621(代)

※詳しくはホームページをご参照ください。

十月号巻頭作家紹介

荻野　杏子

畏れ多くも巻頭をいただきありがとうございました。

人生が二度あれば・・と、井上陽水が歌っている。ご両親の苦労した人生を思いつつ、しみじみと歌っている。

親というものはありがたいものである。亡くなってもあれやこれやと助けてくれる。今回は、巻頭の句材にもなってくれたのでモデル料とばかりに栗おこわをお供えした。

母が亡くなった時、小さかった孫に「天国へ行ったんだよ」と教えたのであるが、二年生になり天体や地理に興味を持つようになって、先日こんなことを言ってきた。「おばあちゃん、天国という国はないと思うよ」と。「ざんねんだなあ、行こうと思っていたのに」と答えながら楽しかった。平凡な暮らしが幸せなんだと思う齢になった。しかし、テレビからは頻繁に他国の戦争のニュースが流れるようになり、何もかもが便利になり過ぎて、返って不便だった昔の温もりが懐かしい。それでまた、母が恋しくなるのである。俳句は出会いと感動。私が今恋焦がれているのは鶴である。北海道の鶴居村に出かけて鶴を詠んでみたいと常々思っている。なかなか実現しないからそれがまた恋のようで楽しい。

巻頭作家自選十句

〈雪の記憶〉

豆を撒く母の匂ひの残る家

雪囲ひ解きし生家を一巡り

氷に上る魚山村の輝きに

老医師の折つてくれたる雛かな

力士絵の赤き塗り箸花菜漬

新聞紙敷いて燕に軒を貸す

鳥渡る湖標の石にうしほの句

長身の君をもかくす薄野は

働いて働いて君木の葉髪

豆の餅たつぷり届く寒見舞

真珠抄十二月号より

加古宗也　推薦

黒猫の伸びをしてゐる良夜かな　工藤　弘子

老いたれば能天気よし秋の昼　石崎　白泉

見上ぐればふと声上がるほどの月　田口　綾子

坂がかる参道まづは走り蕎麦　平井　香

秋干潟歩すや信濃の人も来て　髙橋　冬竹

秋桜やリュックサックの異邦人　春山　泉

弥次さんの座るベンチの放屁虫　荻野　杏子

秋の昼小百合映画に老どつと　池田真佐子

メールポロン夜業しづかに始まれり　大澤　萌衣

長靴に長短秋は真つ盛り　服部くらら

大鷲にまぎれて採餌鸛　堀口　忠男

声のない挨拶交わしそぞろ寒　高濱　聡光

震災忌夢二に関東震災図　池田あや美

耳遠き兄へ手紙を秋灯下　加島　照子

曼珠沙華捨田の中を遍路道　大杉　幸靖

珠玉三十句

夢二観て秋の浴衣を浅く着る　堀田　朋子
コスモスや無人駅舎の券売機　新部とし子
目も耳もめつぽふ達者生身魂　奥村　頼子
秋まつり宮掃除より始まりぬ　辻村　勅代
秋惜しむ砂洲に指先ほどの蟹　天野れい子
秋暑し昭和生まれは野球好き　岡本たんぽぽ
秋冷や赤味噌ふやすおみそ汁　今津　律子
穐田にバイク傾け郵便夫　長表　昌代
秋晴れて句徒トンボロに集ひけり　鈴木　帰心
萩活けて昔のままの喫茶店　竹原多枝子
ねこじやらし夫頷きて聞き上手　重留　香苗
枕木の交換作業虫の闇　奥野　順子
菜園の師匠身罷る秋の蝶　鶴田　和美
後ろより肩を抱かるる星月夜　神谷つた子
夫は鬼皮吾は渋皮栗を剥く　堀場　幸子

真珠抄

加古　宗也　選

秋うらら干潟に愁ひ吹き飛ばす　西尾　髙橋　冬竹

島の鐘撞いて秋天とどろかす

秋愁や干潟に子蟹追へばなほ

秋干潟歩すや信濃の人も来て

黒猫の伸びをしてゐる良夜かな　前橋　工藤　弘子

唐辛子くの字に赤を尽くしけり

新涼や「スワニー川」の洩る館

小鳥来てをり赤んぼの湯浴み時

見上ぐればふと声上がるほどの月　桑名　田口　綾子

油絵の架かる回廊秋入日

秋の池濁る緑に刺す光

抗えぬ流れに押され九月尽

力士絵の駿河塗下駄秋の雨　岡崎　荻野　杏子

弥次さんの座るベンチの放屁虫

蟷螂や武将はなぜに字が達者

森町の茶畑の道秋の蝶

メールポロン夜業しづかに始まれり　前橋　大澤　萌衣

バッハはや夜業の胸にとどかざる

夜仕事の闇の深さになじみたる

大いなる手ぶらよ雀蛤に

さはやかやゲゲゲに女房あればこそ　名古屋　池田真佐子

秋の昼小百合映画に老どつと

鹿の糞ぽろぽろ鉄の柵に穴

いわし雲墓苑の区画迷路めく

震災忌夢二に関東震災図　西尾　池田あや美

金鈴子わざと捕はる鬼ごつこ

浮城の切岸仰ぐ雁渡し

乱れ咲く萩こぼしつつ瞽女の墓

馬鈴薯植う芋と芋とに程よき間　豊田　鶴田　和美

菜園の師匠身罷る秋の蝶

村は秋地域葬から家族葬

種袋破ればブルー蕪の種

鉤の手の宿場の造り蚊喰鳥　前橋　平井　香

百草丸土間にちちろの鳴く小店

坂がかる参道まづは走り蕎麦

大鯉に揺るる桟橋豊の秋

寝覚の床蛇のするりと穴に入る　豊明　石崎　白泉

老いたれば能天気よし秋の昼

卆寿なり秋の日を浴び輝きぬ

屏風なす木曽駒ヶ岳冬隣

地下鉄を出て重陽の青き空　小牧　川嵜　昭典

菊の日や教へ子と酒酌み交はす

満月や鯉棲む横に賽銭箱

白菊や嬉しき友の暮らしぶり

秋高し多角形の空ビル谷間　横浜　荒川　洋子

寿司の後のアップルパイや姉妹なり

運動会ツインズともに一等賞

豆板をかじればホロリ落花生

鰡飛んで海にトンボロ現れり　名古屋　江川　貞代

トンボロ現るるかぼちや寺に大南瓜

雁渡し動くものゐる忘れ潮

身にも潮満ちくる思ひかぼちや食ふ（潮満ちくれば）

新涼や干涸ぶ筆をほぐす水　前橋　春山　泉

爽やかや隊列毎の最敬礼

天高し音ずれ出して鼓笛隊

秋桜やリュックサックの異邦人

秋ともし桶屋は釣瓶直しをり　名古屋　堀場　幸子

花魁募る大道町人祭かな

夫は鬼皮吾は渋皮栗を剥く

秋日に透かす母の紬の膝のすれ

余呉駅出づ蝗のはぬる音ばかり　豊田　市川　栄司

地蜂焼野趣も馳走のまたぎ村

高きほど雲は秋なり鹿島槍

木犀や夜更けて辞する通夜の家

核のなき地球は難し蓮の花　群馬　堀口　忠男
したたかに庭木を包む縷紅草
大鷺にまぎれて採餌鸛
羽繕ひする当歳の鸛
声のない挨拶交わしそぞろ寒　岡崎　高濱　聡光
夜半の秋B面ばかり聴いており
防潮堤途切れしままや秋の潮
九月尽カセットテープ巻き戻す
臥す人の窓開けたがる虫の秋　豊田　堀田　朋子
いつもより目蓋軽き日柿熟るる
白露の猫抱きて骨格確かむる
夢二観て秋の浴衣を浅く着る
いつ誰が植えしか古木の柿をもぐ　広島　竹原多枝子
歩む先そのまた先へバッタ跳ぶ
萩活けて昔のままの喫茶店
幸せな気持ちの理由金木犀
レンタサイクル走らせて飛鳥秋　みよし　奥村　頼子
草虱したたかつけて古墳径
無雑作に活けてこそよき草の花
目も耳もめつぽふ達者生身魂

秋まつり宮掃除より始まりぬ　西尾　辻村　勅代
秋祭縄引張って高燈籠
綿菓子を大事に持つ子秋まつり
後の月逆立したるはね釣瓶
穭田にバイク傾け郵便夫　名古屋　長表　昌代
秋高し子ども将棋に桂馬飛ぶ
宇治橋の擬宝珠抱へるいぼむしり
烏瓜背ナを丸めて練る濃茶
秋惜しむ砂洲に指先ほどの蟹　岡崎　天野れい子
秋の日のバイオリニストの背は美しき
ポン菓子のやさしく匂ふ秋の昼
秋彼岸大あんまきを四つ割に
露草のその優しさに歩みけり　名古屋　加島　照子
それぞれの本に位置あり秋灯し
耳遠き兄へ手紙を秋灯下
長き夜や気掛りな文書き終へる
虫しぐれあと幾たびの夫婦旅　岐阜　大杉　幸靖
曼珠沙華捨田の中を遍路道
掌に胡桃鳴らして後期高齢者
衣被無口の口の小器用に

声に色ありお隣も月見らし　西尾　服部くらら

すれ違ふ子の鼻歌よ藤は実に

長靴に長短秋は真つ盛り

縦横に走る鳥声柿日和

寝不足のガイドが来たり秋暑し　豊田　山田　和男

スニーカーで登り来る人赤とんぼ

八月や山の天気の変はり易し

秋暑しダム湖道路の工事中

秋暑し昭和生まれは野球好き　名古屋　岡本たんぽぽ

渋滞のうどん街道秋暑し

上州や頬張る梨のみづみづし

夢二描く伏目のをんな断腸花

トンボロやほら秋の雲つかめさう　西尾　岡田つばな

島二つしかとつかまむ秋の風

波音の耳に張りつく秋の暮

穭田に日暮れの鴉数へをり

ねこじゃらし三本握る小さな手　広島　梅本ちひろ

小鳥来るマルシェを告げる掲示板

芋虫や丸くしゃがんだ園児たち

新品のスニーカー履き大根蒔く

朝冷や赤味噌ふやすおみそ汁　豊明　今津　律子

敬老日二人三脚確かむる

うそ寒し三百万の曼珠沙華

ぶらぶらと金木犀を訪ふ散歩

訪ふ人の絶えし秋日の鑑三碑前　橋　渡邊　悦子

身に入むる野外ステージみみず鰒

頼政の社に絡む葛の花

街の芥流るる濠の鉦叩

かき氷くづして恋の話など　愛知　水野　幸子

若き日のゲーテの詩集水澄めり

一人には贅沢すぎる良夜かな

底紅や村の銀座のカフェテラス

幸せを運んで来たり金木犀　あま　烏野かつよ

ただ黙々と満月を歩きけり

夕日差して稲田さらさら音立てて

鵙の声電柱天辺尾が動く

母屋まで飛石伝ひ蔦紅葉　三重　鈴木　静香

初穂曳く総鉢まきの輩かな

朝日射る葉がくれごしの椿の実

朝寒や庭下駄の冷えつと足裏に

大糸瓜ぶらりぶらりと合掌家　西尾　酒井　英子
明治大正昭和のビール秋暑し
首塚は石の一柱秋の蝶
地蔵堂に隣る井筒や秋気澄む
唐辛子あはき夕日をはね返す　前橋　鈴木　玲子
彼岸花咲きてふるさと近くなる
ハロウィンのお化け南瓜がコロッケに
毬栗を両足で剥く父の技
星月夜射的の当り飴一つ　西尾　乙部　妙子
星月夜外湯の湯冷め持ち帰る
棉吹くや綿を伝えし神祀る
棉祖祭棉打つ埃烏帽子にも
千百号まで指折り数ふ師走かな　西尾　三矢らく子
歳末や元家老家の庭整備
秋薔薇枯れ電信棒の細くなる
茹で上り最高浜の白子丼
能古島を指呼の汀や鳥渡る　福岡市百道浜海浜公園　宗像　高橋まり子
秋高し機影しきりに湾の空
高速船波を蹴立てて秋の水脈
秋潮や波間を低く群れ鴎

身に入むや香月泰男の妻の手記　前橋　関口　一秀
億劫な命を語り星月夜
夜寒さや少し近づく妻の距離
廃校のビエンナーレや蚯蚓鳴く
晩婚と言ふ静かな家のちちろ虫　広島　中井　光瞬
熟柿落ついつの頃から人嫌ひ
神々の遊びの跡や稲を刈る
雀来るほどに落穂を残し置く
長き夜の畳紙に読む母の文字　名古屋　重留　香苗
保育カートに乗る子歩く子小鳥来る
ねこぢやらし夫頷きて聞き上手
山霧のたなびく飛騨路高速道
座りたくなるベンチあり金木犀　名古屋　今泉かの子
色鳥や友の句帳はスケッチ帳
昼の月ワンタン麺の名店へ
風を追ふ旅の途中の花野かな
しんしんと晩秋の夜を目覚めをり　神奈川　田口　茉於
落鮎やよく喋りたる一人つ子
菜箸の先の折れたる芋煮会
秋昼の袖を折りたるストーカー

秋麗の有楽町の食事会　名古屋　鎌田　初子

初めてのハトバス孫と秋日和

二重橋への道のりや秋日傘

深秋の混み合つてをる浅草寺

敬老日英字新聞読む漢　愛知　磯村　通子

田仕舞や田の字作りのわが生家

恥じらいつお代りをする冬瓜汁

むきになり握力はかる体育の日

薩摩芋破裂してをり太りをり　桑名　畑中　淳子

ワクチンを打つてごろごろ秋旱

橡の蜜買ひて橡の実見廻りに

橡の実の殻斗ばかりが転がりぬ

競演の野村三代秋あふぎ　名古屋　田畑　洋子

新秋や卒寿の翁の足拍子

道明寺酩酊の舞秋愉し

古民家に動かぬ時計身にぞ入む

篝火に照らし出されて鵜の潜る　名古屋　白木　紀子

ホウホウとかけ声小瀬の鵜飼船

新参の一羽を囃し鵜見物

もつれたる縄をほどきて鵜飼果つ

一雨ごとに一葩ごとにカンナ老い　西尾　鈴木　恵子

教卓に絵日記の山休暇明け

朝の雨止んでまぶしき秋彼岸

布袋草けさ水に揺れ風に揺れ

走り蕎麦山菜並ぶ道の駅　西尾　濱嶋　君江

煙出し残る街道走り蕎麦

走り蕎麦山と積みある薪の束

桃吹くや綿神さまの畑にも

木犀の一枝を母に入所の日　刈谷　鈴木　帰心

文化祭寂しき顔で見る人も

秋暁や友は仕事に行く頃か

秋晴れて句徒トンボロに集ひけり

一叢のコスモスの揺れ詩の生るる　前橋　新部とし子

コスモスや無人駅舎の券売機

コスモスや嫁ぐ日近き娘との日々

はかどらぬ書架の整理やちちろ鳴く

不知火やうちの人生真つ暗や　西尾　鈴木　恭美

秋蘭や開店初日の灯り消す

再婚を風の噂にましら酒

休講の掲示一枚神無月

時刻表繰る十月の同窓会　豊田　松元　貞子

面影は目尻のほくろ通草爆ぜ

行き付けの八百屋のりんごバケツ盛

鶏頭の風に委ねし赤き色

青空や宝のごとき返り花　前橋　笹澤はるな

水脈を曳く鯉たくましく水澄めり

椿の実はぜどたん場の底力

凝らす目に星の増えゆく夜寒かな

扱がれたる鶏頭首を持ち上げて　西尾　鈴木こう子

青き眼の婿が撥振る秋祭

トンボロに足跡いくつ羊雲

秋うらら小さき指折り俳句授業

新米や水の加減に迷ふ妻　名古屋　橋本　周策

秋の蚊の波状攻撃雨後の庭

別荘に数多の意匠秋の風

染み多き古事記の写本秋湿り

ゴンドラのゆっくりまわる良夜かな　前橋　今村　和夫

初鴨や爆音のない水田へ来

ワンチーム金木犀の開花待つ

黄落の残照淡し櫓門

秋風や下校児渡る歩道橋　愛知　奥野　順子

枕木の交換作業虫の闇

穴惑山の県道渡りけり

秋澄むや台車引く音階下より

着ぶくれにやる気をすべて奪はれて　藤岡　飯島　慶子

底冷のサービスエリア仮眠中

冬耕の畝黒々と整然と

手も口も汚してクリスマスチキン

世界情勢息子の解説を聞く秋夜　碧南　原田　弘子

名月や夫の迎への車中より

森の中に居るようなカフェ色葉散る

秋の雉わが足音にそそくさと

長女にも長女が生まれ柿熟るる　愛知　稲吉　柏葉

山峡の風より軽き秋桜

コスモスを手にして妻は少女の瞳

コスモスの揺れてか細くなる記憶

水澄むや風呂井に今も水の湧く　西尾　長坂　尚子

秋晴や砂洲の波跡踏みて歩す

数多なる命と骸秋の砂洲

トンボロに浅黄斑とすれちがふ

逢へぬ人想ふコスモス揺れる中　前橋　中澤さくら
コスモスは微かな風によく似合ふ
どの庭もコスモス揺れて愁ひなし
唐辛子夕焼けの色吸ひつくす
友と居て友と見上ぐや渡り鳥　西尾　磯貝　恵子
換気扇最大にして焼く秋刀魚
疲労とは心地良きもの星月夜
秋深む夫の居場所に今は我
病窓に太鼓のひびき秋祭　名古屋　小柳　絲子
秋祭猩々朱毛(あかげ)ふり乱し
だつこの子法被に秋の祭足袋
秋祭膝まで届く法被の子
秋惜しむ老いには刻は過ぎ易し　西尾　米津季恵野
石段を登りきれずに秋惜しむ
づかづかと射し込む日差し秋暑し
小鳥来る嬰の手足のよく動く
野仏に色のやさしき草の花　名古屋　稲石　總子
ゆるゆると何か捉まん葛の花
赤信号吹き抜けて行く風は秋
迷い出て風が頼りの秋の蝶

あの人この人兄も逝き水引草　西尾　髙瀬あけみ
横文字の溢るる世にて敬老日
歩きたくば動けと草の花ゆるる
秋祭り子らゴム毬のごと跳ねて
クロスパズルようやく解けて良夜かな　前橋　野中のり子
秋水や地球の熱はまださめず
敗荷の静かに沼に沈みけり
夜業する看護師背筋ぴんとして
灯火親し鬼城句集の十頁　西尾　鈴木まり子
波の音打ち崩したる秋花火
今年また父の忌に来し火焚鳥
母の言ふふかし薯ならもう一つ
ためらひの後の投函十六夜　名古屋　松田美奈子
秋寂びの寺鉄舟の襖書
城郭の瓦にクルス昼の月
冷やかや不戦の城の武者隠し
百年の重みと軽み震災忌　高崎　坂口　圭吾
手土産のつなぐ縁の墓参かな
われ先にと三山きそひ粧へり
つまくれなゐ鎖の先のからの小屋

先づ一献九谷の猪口に今日の月　名古屋　加島　孝允
秋ともし鍛冶屋紺屋のある城下
女手の捌き嫋やか風の盆
八十にして五体満足温め酒
夜なべしてキルト展へと針すすめ　前橋　大山　双葉
どの畔も赤く咲くなり彼岸花
秋天に響く児童の鼓笛の音
豆電球夜の冬木に散りばめて
南から西風になり障子貼る　愛知　井上　昌男
十月や夏日と言ふ語のなつかしむ
松手入して松は風格上げにけり
落下せし桜黄葉の咬まれをり
栗好きの夫はころつと皮を剥く　瀬戸　田村　清美
補聴器は身のうちとなり虫の声
釣瓶落し宅配便のチャイム鳴る
山川の芥のかかる崩れ簗
四季愛す我も旅人吾亦紅　東浦　渡邊たけし
亡き妻の盆踊をば夢に見る
秋さぶや廃校奥に流人墓
赤まんままごと遊びの主顔

秋澄みし海原見えるカフェテラス　西尾　伊藤　恵美
秋晴やアールグレイに南瓜パイ
香をこぼし松茸飯が炊きあがる
道塞ぐかまきり鎌を振り上げて
がらんどうの生家隅つこおけら鳴く　西尾　長村　道子
白壁の厠こびんに草の花
素つ気なき追ひ焚きボタン秋の声
居間に貼る阿闍梨の詞秋ともし
屋上の月見もいいと娘のメール　豊田　石川　桂子
残業を終へ見上ぐ月まぶしくて
秋の風やつと和服で木屋町へ
味噌汁に新米かまど炊き至福
回覧板廻す夜空に流れ星　春日井　水井　峰子
秋の宵ひとり暮しのゴミを出す
卓球の友とお茶して秋涼し
秋の雷遠き戦をしのぶ夕
美しく老いるはしんど女郎花　名古屋　安井千佳子
杖つきて秋の西日を踏み外す
逝く日までリハビリ漬けやスイッチョン
新米の一粒ずつに地の力

月は東に一里速歩に励む妻　豊田　堀田　和敬
統合される小学校や無花果熟る
人の去りコスモスの花増しにけり
顔半分黒き猫なり霧の朝
徹夜踊り今宵は父の博多帯　春日井　野崎　由美
とよもして踊り仕舞の列城へ
月下美人夜更けて匂ひ濃くしたる
奈良墨の老舗の棚のひよんの笛
朝令のナーススピーチ爽やかに　名古屋　浅野　寛
日泰寺の塔堂暗し昼の虫
福分けと友より二十世紀梨届く
重陽や祝い絵葉書利尻より
鰯雲何もせずただ何もせず　前橋　石田　笹良
新涼や時間をかけて茶を淹れる
墓じまひ考へながら墓洗ふ
天高し白秋の詩を唱へけり
出窓とて破れ手付かず秋障子　碧南　服部　喜子
長生きしてね鉛筆書きで敬老日
名月やまあるく居たいこの浮き世
六地蔵の供花が造花に秋さみし

母寝入る床あとにする良夜かな　高崎　平田　眞子
コスモスや遥かな妙義入日影
対岸の音楽祭へ水澄めり
水澄めり皆で歌ひしドレミの歌
柿赤し夕べの村のひつそりと　愛知　中野まさし
眼鏡拭く籠の鈴虫鳴きゐたり
南吉の生家古ぶや曼珠沙華
干拓地風にのり来る祭笛
決めかねて日傘くるくる藍深し　常滑　桑山　撫子
萩咲いて雨を重しとふりこぼす
占領の領地飛び交う秋茜
寝て覚めて起きて大暑の麺すする
過去をまだ引きずりしままとろろ汁　豊川　髙柳由利子
燈火親し思ひを込めて書く手紙
少しだけ歩巾を広げ大花野
虫の夜ペットボトルを潰す音
秋祭りみんな元気な四世代　西尾　朝岡和佳江
標識の傾きしまま秋深む
野分来て老犬ふらつきつつ歩む
秋深む若き日の事あれこれと

木犀の香り再び我に満つ　前橋　柁原　ナナ

すじ雲や一線画し空青し

風呂上り一枚羽織る夜寒かな

コスモスや揺れて絡みて空青し

漆喰に温もり残る秋隣　蒲郡　梅原巳代子

滝壺に湧き立つイオン深く吸ふ

井戸端に盥立てかけ夏を終ふ

夏の蜂石燈籠を我が家とす

天高しまっすぐ立っておれぬ母　東海　斉藤　浩美

秋扇使うふりして策を練る

少子化の国へ小鳥来る小鳥来る

面倒なこと考えず木の実落つ

讃岐富士饂飩巡りの秋日和　西尾　金原香代子

朝霧や金比羅さんへ山陽道

秋深し息切らし行く厳魂社

栗きんとん濃茶をたてる昼さがり

後ろより肩を抱かるる星月夜　西尾　神谷つた子

新蕎麦や夫はそば湯を所望せり

ラ・フランスまずは香りをいただきぬ

秋湿り安祥八景句碑読めず

鬼城忌や上州弁に三河弁　岡崎　黒野美由紀

安祥に井戸の名七つ水の秋

姫塚に笙の調べや律の風

鰯飛ぶや幡豆の漁師の三河弁

椿の実裂けて波板コロコロと　前橋　戸澤ひふみ

毬栗の煙れる里に日暮かな

こだわりの新米愛でて卵かけ

学友の息災聞こゆ今年米

夫一つ私も一つ青みかん　西尾　髙山　と志

大小さまざま茹でたての落花生

時代劇観つつ茹でたて落花生

下駄箱も小さな秋の展示場

鬼女となりし仙台萩を括りけり　西尾　冨永　幸子

ことことと新小豆炊く夫のそば

青空へ風と並べるつるし柿

田鳴ひとつ夕焼色に染まりけり

秋霖や会話の声も消えるほど　名古屋　平井　綾子

秋麗ら親子で祝ふ誕生歌

迢空も行きしこの道葛の花

オカリナの調べは静か萩の花

足裏の砂の感触涼新た　福島　橋本　青舟

もぎたての唐黍の香よ亡き母よ

夏終るつひに出番のなき補欠

ひたひたとさかのぼる汐月見草

読み終へし夕刊落花生の殻　名古屋　水野由美子

穂すすきのはらりと解けてやさしくて

ゐのこづち猿の蚤とるやうに取る

括られてなほ言ふことをきかぬ萩

刈り取つて田面広きに驚きぬ　松山　大石　望子

晩酌の後の一碗栗御飯

芋名月刈田で仰ぐ雲居かな

有明に暉る綺羅星秋澄みぬ

水引や暗き山路を彩りて　半田　松岡　裕子

紅葉狩り母娘で登る金華山

秋の野や狸神社の赤鳥居

鶺鴒の歩幅に合わせ跡を追う

秋の夜やたつぷりと聴く孫の夢　名古屋　廣澤　昌子

日帰りの旅には惜しき秋の古都

人力車秋の京都に似合ひけり

秋澄めり声透き通る大原女

錆鮎の備長炭で焼かれをり　愛知　早川　妙子

新そばの富山産とや城下町

くりきんとんすやとて煎茶碗そろへ

鬼灯をほぐしほぐしてつぶしけり

野分あと苗木いっぽんづつ正し　西尾　犬塚　玲子

烏瓜蔓引けどなおその上に

ありありと乏しき予算秋祭

この辺りは目抜き通りや秋御輿

手相図に未来の予感天高し　岡崎　飯島たえ子

木の実降る朝のミルクを一気飲み

窓越しの無声映画や雁渡る

リンゴ刈片手に大粒梅にぎり

あの暑さ経て金木犀は香る　西尾　三浦　彰

秋の日の広場昭和は映画館

秋深し樹下の社の日御碕

黒々と暮るる岸辺の秋ともし

葉がくれに太る芋虫みのがさず　前橋　藤井　歌子

露しとど鋏さがして小半時

法師蟬今は使わぬ登り窯

空耳に返事をしたる秋の風

秋空や海に蒼さの映りゆく　西尾　鈴木美江子

野仏の花つぼ飾る秋桜

まだ七十もう七十や月仰ぐ

コスモスの縛られてゐる花壇かな

豊の秋曽孫三人目となりぬ　西尾　杉浦　紀子

ゐのころの一本道の里遠し

秋興や暁行師の娘は名ガイド

ぶどうの皮丁寧に嫁剥きくれし

秋日和分相応の小買い物　刈谷　清水みな子

トンボロの強き海風身に入みて

木犀の金銀咲いて風に乗る

トンボロの砂紋の締まり秋闌ける

悪口と恋愛話こぼれ萩　広島　村重　吉香

泣き止まぬ稚児に握らすねこじゃらし

長き夜の終演のなきユーチューブ

曼珠沙華旧家の庭を覗きをり

読めぬ字を画数で引く夜長かな　前橋　新井　伸子

手暗がり鉛筆削る秋ともし

立飲みのおでん屋箸で芋を追ふ

バス待つや夕餉恋しき秋の暮

ちちろ鳴く休耕田の草の丈　西尾　神谷　光彦

秋潮の朽ちし舟引き鳥とまる

蔀戸の桟の深さに秋日影

爽やかに少年荒き岩に立つ

セーターに逝きし猫の毛残りをり　前橋　岩田かつら

口笛を吹きたくなるよ秋の空

音頭とる腰の軽さや秋祭り

稲を刈る夫婦の歩幅揃ひけり

子規忌来る名句鑑賞辞典繰る　西尾　鈴木　隆子

はからずも病床で見る初月夜

竜淵に潜むや名古屋港閑と

句を流し水都の秋を深めけり

捨てられたラジオの鳴らず秋の風　西尾　岩瀬うえの

軋む戸を開ければ真赤唐辛子

軒打つは秋も半ばの夜半の雨

横たわる冬瓜に雨横殴り

敬老日独り昔の日記よむ　名古屋　加藤　典子

秋草を活けて老舗の和菓子店

一つ家に表札二つ小鳥来る

校門はもう少し先こぼれ萩

荒れし山も美しく見ゆ良夜かな　瑞浪　和田　郁江

落花生掘るを見下ろす鴉かな

はびこりし水草紅葉始まりぬ

水澄みて結界に鯉泳ぎけり

みやげ菓子さくりと午後の法師蟬　岡崎　石川佳弥子

古の二人は恋仲風の盆

ふかし藷ひとりは淋しと言はぬ人

手芸店跡に葬儀舎秋高し

穭田の緑や遥か散歩道　西尾　青山　伸一

三河発塩ゆで地豆父偲ぶ

月影や水銹濁る大野鯉

三方五湖の見飽きぬ五彩鳥渡る

宮裏は古里の風秋大河　西尾　中根　静江

満席の海辺の昼や秋涼し

行く秋や防災無線の太き声

鈴生りの重さに堪えて早生蜜柑

山里をピンクに染めて蕎麦の花　前橋　藤井　元美

誰も来ぬ墓を見守り曼珠沙華

地図拡げ秋を見つけに気ままま旅

あらくさに露草ひとつ羽根広げ

秋の大掃除ごみ処理料の値上げ前　西尾　加藤千代美

爽籟や断捨離し部屋広々と

新米抱く夫の遺骨の時のよに

玉子かけごはんおかわり今年米

一筋の光の大河水澄めり　東海　加藤　久子

生涯てふ遠回りあり秋夕焼

鰯雲はがれてこぼる二三枚

小鳥来て空の広がる城一つ

無花果の乳きしきしと唇に　西尾　岡田真由美

蟠蟀やドライブインの自動ドア

爽やかやごみの日翁の竹箒

エプロンを広げ夕餉の秋茄子

大はずれの天気予報や秋日和　豊田　水谷　螢

爽やかやかかりつけ医も山車を曳く

飛び入りで山車の綱引く秋まつり

山車曳きを見送る巫子等秋うらら

秋旅の孫の家苞栗羊羹　西尾　石川とわこ

日本晴れトンボロリレー大歓声

日暮早や南瓜の蔓に足とられ

コスモスの色濃くなりてたおやかに

とびきりの花持ち墓参入り彼岸　碧南　服部　守

秋うらら英語日記を再開す

小ぶりながら割安秋刀魚一尾ずつ

まん丸で大きな月や車椅子

枕辺に孫の写真や夜の長し　西尾　広瀬　香友

穂芒に迎へられたる夕日かな

色づきし筆柿枝をしならせて

星月夜地球も同じ仲間なり

栗の毬蹴れば妹も蹴り返す　安城　浅野　博泉

栗の毬踏んでねじりて栗一つ

大栗をがりりと噛めばほの甘き

妹とジャンケン最後の栗一つ

星月夜羽角山からいづるもの　西尾　乙部加代子

朝霧のすぐに消えゆく儚さよ

綿吹いて取っては紡ぐ祖母の顔

カーデガン羽織り包丁秋の朝

咲き初めて月下美人の垂るるほど　西尾　川角　博

南の島に軍靴の音す秋悲し

名月を過るや飛行機のシルエット

妻大事俳句も大事秋のこゑ

坂上がり喜ぶ親子秋うらら　西尾　國松　房野

本丸御殿出でて木犀香りけり

さざ波や秋の干潟に鷺一羽

秋の日の免許更新ほつとせり

名月の古事は知らねど月仰ぐ　西尾　三宅　真晴

畑からの帰路の灯りや彼岸花

女の子もポニーも駆ける秋祭り

スクリーンの題はレベッカ秋の夜

明月や行きも帰りも同じ道　西尾　渡辺よねこ

仲秋のだんご作りや姑偲ぶ

旅よりも畑が大好き草虱

葛の花茂る葉蔭に愛らしく

秋の日や口が乾いて困ります　東京　井垣　允明

デイサービス筆で字を書く寒露昼

吃逆でむせる昼飯菊日和

秋の雨畳の部屋を掃除する

柿の実を数えつ父の笑顔かな　愛知　吉田　勝美

そっと飲む幸せもありソーダ水

連ねゆく小さき一歩秋の山

椿の実吐き出す力内に秘め

ゆで落花生のにおいもごちそうに　西尾　都築　英之
彼岸花正直に咲く野辺の道
初っ切りや西尾の秋へ四年ぶり
生きるため死ぬために食べ秋深し
銀杏の大木潜りて墓まいり　西尾　味岡　元美
信楽の水指秋のなごり会
床の籠秋の名残の花色々
お茶会の若き点前の菊の帯
秋ぬくし隣は新婚所帯とか　西尾　近藤　竹児
熱柿落ちて赤鬼閻魔堂の前
ひと晩中句作付き合ふちちろ虫
秋蝶や木曽路の旅に思ふ日々
豊の秋田んぼアートを見にいかん　西尾　太田小夜子
無住寺となる参道やこぼれ萩
下戸なれどこれも付きあい月見酒
秋の暮テイクアウトに慣れもして
兄弟の議論好きなり秋灯下　川崎　山村　信子
ガレージを上げる音する秋の朝
くちなはのうろうろ一揆寺の塚
生涯を機織り暮しちちろの夜

産土神の杜にたっぷり新松子　静岡　川上　幸代
秋深みきし魚屋の魚焼く
新米のお握りなれば塩にぎり
爽涼の神苑にあり木太刀振る
盆の月小さき庭を照らしけり　三重　恒川さとし
盆の月少し赤みをおびてをり
山小屋の秋夕焼にまみれけり　名古屋　山下　君代
伊吹山けふ雨らしや風は秋
犬蓼の花高々と咲いて晴
鶏小屋の鶏を放ちて秋日和　茨城　河原　康雄
鶏小屋にどんぐりの実のこぼれけり
芝庭の刈り込まれたり秋の雨
枝豆を肴にビール飲み始む　愛知　塩野　進
枝豆を一人むずむず食べいたり
瀬戸内は終日船が走り秋　名古屋　加藤　正信
秋潮の匂ひ帆船イロハ丸
実石榴やホテルの壁の真白なる　石川　川井　芳男
秋麗ら隣家の窓のオルゴール
赤き手さげぶらさげ桃の実を選ぶ　愛知　村上　悦子
ペティキュアのピンクが似合ひ秋の風
秋麗やパン工房のドア開く　静岡　中村千代子
パンを焼く匂ひが路地に秋の朝
電線に音譜のやうに秋燕　三重　平岩　敏郎
秋燕の帰り仕度と思はるる

選後余滴

加古宗也

秋干潟歩すや信濃の人も来て　髙橋　冬竹

十月十一、十二の両日、俳人協会環境委員会の主催で、西尾市東幡豆海岸から前島まで、大潮のときに出現するトンボロ干潟を歩く、というイベントが行なわれた。北は仙台から西は尼ヶ崎まで俳人協会会員約百人が参加。好天にも恵まれて、最高のトンボロ日和になった。若竹長老の一人、髙橋冬竹さんも参加、その盛り上がりは最高で、長いコロナ鬱も一気に霧散した。この一句はその時の作だろうと思う。おだやかな一句だが、この句のポイントは「信濃の人も来て」にある。信濃即ち長野県は海無し県、トンボロを歩きながら東北から関西まで、広範囲から集まった俳人たちの交流が非常に活発であったことも、トンボロでの収穫であったと思う。秋日和とトンボロ干潟、爽快そのものの感慨をすっきり詠み切ったところは、ベテランならではと思う。

いま三河は徳川家康ブームで湧いている。今回、集ってくださった会員の皆さんが、吉良公ゆかりの華蔵寺、文豪尾崎士郎のふるさと吉良、岡崎城及び家康三大苦境といわれる安城の野寺本證寺をはじめとする三ヶ寺。安祥城址。さらには伊良岬へ渡って鷹の渡りを見にゆかれた人など、その余波が広くひろがったことはうれしいことだった。〈鷹ひとつ見つけてうれし伊良虞崎　はせを〉

黒猫の伸びをしてゐる良夜かな　工藤　弘子

十月の村上鬼城顕彰全国俳句大会の途次、伊香保の夢二記念館に立ち寄った。ちょうど夢二の最高傑作といわれる「黒船屋」の特別展観が行なわれていて、観賞する機会を得た。この絵は、夢二が深く愛したといわれる彦乃を描いたと伝えられるもので、黄の着物を着た彦乃が黒船屋の屋号の入った箱に黒猫を抱いて腰掛けた図だが、黒猫の心のうちまで透けてくるような描写になっている。

弘子さんが黒猫を抱いて坐った姿が重なり合って良夜の情調と見事な調和をなしている。

見上ぐればふと声上がるほどの月　田口　綾子

さりげない表現のように見えて、寸分の隙も見せていない。「ふと声あがる」がそれだが、何となく、いつだったか、自分もそんな経験をしたことのあるような気がしてくるからうれしい。しかも、「ほど」が絶妙な措辞だ。さらに加えるならば、月の明るさが、とことん表現されているといっ

ても過言ではない。

弥次さんの座るベンチの放屁虫　荻野　杏子

「放屁虫」は「へひりむし」と詠む。弥次さんといえば江戸後期の戯作者。十返舎一九の作と言われる『東海道中膝栗毛』の中に登場する弥次さんのことだろうと思う。喜多さんと一緒に繰りひろげる珍道中記は今なお人気がある。仲良しの二人旅にしばしば例えられたりもする。ところでこのベンチ、私のあやしげな記憶では、東海道五十三次の終点に近い京都、三条大橋の袂にあった。弥次さんと喜多さんが長旅を終えてくつろいでいるブロンズ像から発想を得たものだろう。弥次喜多道中の終章として放屁虫を登場させるところはさすがに手練だ。

メールポロン夜業しづかに始まれり　大澤　萌衣

作者にとっては夕刻になれば仕事が終了する、というわけではないのだ。それが自営の難しいところ。メールの音で夜業は始まるのだ。そして、何故か、作者は仕事が好きで、夜業もむしろ楽しんでいるようにも読み取れる。

秋の昼小百合映画に老どつと　池田真佐子

私が若かりし頃、「サユリスト」と呼ばれる吉永小百合ファンが多勢いた。彼らはいまも熱烈な小百合ファンだ。小百合映画が上映されようものなら、どっと押し寄せる。

じつは私も「サユリスト」で、先年、なかにし礼の小説「長崎ぶらぶら節」が映画化され、上映されたときには、わざわざ長崎吟行会を企画しただけではなく、その舞台となった丸山の料亭で卓袱（しっぽく）料理を食べに行ったほどだ。

小百合はすでに八十歳に近いのにいまも美しいのは彼女の誠実な生き方にあるように思われるが如何？

秋惜しむ砂洲に指先ほどの蟹　天野れい子

この砂洲は先に紹介した三河湾に出現したトンボロでの作だろう。幡豆漁業組合長が「トンボロの生き物」と題して講演をしていただいたのだが、実際、トンボロを歩いて、さまざまな魚貝類が生息しているのに驚いた。その一つに「指先ほどの蟹」、いかにもかわいい。そんなトンボロでの感動がじつに素直に表現されているのがいい。

耳遠き兄へ手紙を秋灯下　加島　照子

電話ならわけなく済むことを、耳が遠いゆえに手紙にしたためなければならない。手紙を書くことが面倒というのではない。容赦なくやってくる老いとの格闘。肉親ゆえにそれがせつなく辛い。いつまでも元気でいてほしい、という妹の願いが惻惻と伝わる一句。「秋灯下」という季語が厳しく効いて過不足がない。

俳句をユネスコへ！ 第14回

「大田原市と松尾芭蕉」

大田原市長　津久井富雄

大田原市は、東側に八溝山地が南北に延び、中央から西側にかけて那須野が原扇状地が広がり、県北の政治経済の中心的役割を担っています。南部には、上下待塚古墳（共に国指定史跡）や那須国造碑（国宝）があり、東部は黒羽城を中心に発展し、西部は大田原城の城下町および奥州道中の宿場町として繁栄してきました。

俳聖松尾芭蕉は「おくのほそ道」の旅で、黒羽に最長の十三泊十四日逗留しました。これを踏まえ、平成元年度から「黒羽芭蕉の里全国俳句大会」と「子ども俳句大会」を継続して実施しています。前者においては小学生の英語俳句も披露されています。また近年は市内の俳句愛好団体による「俳句の学校出前講座」の需要も増えています。

平成元年開館の「大田原市黒羽芭蕉の館」には、黒羽藩主大関家伝来資料等の展示室とともに、「おくのほそ道」の概要、旅の行程や芭蕉の画像・彫刻作品などを常設展示する芭蕉展示室があります。また年間を通じて講座「近世の版本で読む『おくのほそ道』」を継続して開催しています。

平成三十年度に展開した栃木デスティネーションキャンペーンでは、芭蕉の訪ねた雲巌寺など、多くの観光客でにぎわいました。本市としては、今後とも芭蕉と「おくのほそ道」を通じて俳句の魅力を発信し続けていく所存です。貴協議会におかれましても、俳句という素晴らしい日本文化の魅力を広く世界に発信し続けていただきますようご期待申し上げます。

（俳句ユネスコ登録推進協議会自治体首長エッセイ）

二〇一九年十一月末発行 HI誌145号より抜粋、転載）

＊肩書は二〇一九年十一月のものです。

俳句

特別作品　高橋睦郎・三村純也・井上弘美

12月号予告

11月25日発売

予価1,100円（本体1,000円）⑲

大特集

写生

―言葉を見出す面白さ

▼総論　観察と写生／なぜ写生が大事なのか

［論考］写生句の変遷　明治から令和まで

観察のコツ、言葉の探し方

写生における発見

［鑑賞］写生の名句50選

鑑賞特集　夜の名句

六か月連続企画！

全国結社マップ vol.3 南関東

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

とりごよみ ⑮

髙橋　伸夫

十二月の野鳥　ユリカモメ（百合鴎）

冬の西尾市の沿岸部で最も多いカモメはこのユリカモメです。

カモメの中では小型で、翼をたたんでいる時は背中が淡い灰色なので、他のカモメより色は白く見えます。

風切羽は黒いので、飛んでいる時に下から見ると体は白く見えて翼の先端は黒く見えますが、その前縁に白い線があるのがこのカモメの特徴です。

八月の野鳥で紹介したウミネコより小さなカモメで、初冬になると西尾市の沿岸や矢作川、矢作古川では夏のウミネコと入れ替わるように数を増やして冬を過ごします。

ウミネコと同じ位の大きさで標準和名を「カモメ」というカモメも冬鳥で、ユリカモメと一緒に、例年であれば十一月頃から数を増やしてウミネコと入れ替わるのですが、近年は両種共に飛来数が減少しているようです。ウミネコを除くカモメの仲間は全て冬鳥です。

例年であれば若鳥は繁殖しないので、夏になっても繁殖地に戻らずこの地方で夏を過ごすのですが、その数が多いのもこのユリカモメです。

ユリカモメ 2007.11.03 髙橋撮影

しかし、今年の夏は例年になく長く、暑かったせいか、越夏をする冬鳥のカモメは一羽も居らず、例年であれば十月頃から飛来を始めるのですが、十一月に入っても未だ一羽も飛来していません。この「とりだより」が届く頃までには飛来してくれると思われますが、近年の猛暑は野鳥の世界にも大きな影響を与えています。

カモメに限らず冬鳥のカモも同様ですが、冬鳥の羽は寒さに備えた構造にできていますので、近年の夏の暑さはこうした冬鳥にとって命に関わる程危険なものなのです。

ユリカモメの成鳥は春の渡りが始まる四月頃になると、その顔は頭巾を被ったような黒色になります。そして胸や腹の白い部分がほんのりと赤味を帯びます。この色が百合の花の色に似ていることから「百合鴎」と名付けられたようです。

古来「都鳥」と呼ばれてきた鳥はこのユリカモメのことです。カモメの仲間の中でもこのユリカモメは川を遡って内陸でも見られますので、京都や岡崎でも普通に見られます。カモメの仲間は海や川の掃除屋とも呼ばれるように、川や海に排出される残飯などを好んで食べるからです。

しかし、近年の日本ではゴミの収集が徹底し、下水道が完備したことで、岡崎市の川でも見られなくなっています。

俳句の自由

嶋田青峰と『土上』（35）

橋本　直

ここ数回、大正、昭和初期の青峰や虚子らの言う「主観」「客観」にかかわるいくつかの言説をみてきました。前回は川端康成が若い頃に書いた評論における彼らの考えていたあたらしい「主観」について確認し、ほぼ同時代の最新といえる文芸思潮と虚子の書いた「主客両観の混一」の、おそらく無関係ながら共通性をもつことにふれました。今回は、前々回の末尾にふれた西田幾多郎の「主客合一」という用語について少しふれておきたいと思います。良く似た言い回しですが、虚子のものは大正十年のもの、西田のものは初出は明治四十四年と先の出版ですが、広く世に読まれるようになったのは大正十二年以降のことなので、両者の間に直接の関係があったとは思いにくいのですが、ほぼ同時代にでてきた一見似ている表現として、両者の違いについて確認しておくことは無駄ではないと考えます。

西田幾多郎は、明治三年の生まれなので、子規と虚子とほぼ同世代の人であり、ほぼ二人の中間の年代ということになります。日本近代を代表する哲学者であり、彼の思想は「西田哲学」と呼ばれ、またその学統は「京都学派」と呼ばれています。大事なことは、西洋からの知識を取り入れていくことに必死だった明治近代において、はじめてオリジナルの思索を行い、独自の哲学を打ち立てたことであり、その西田の第一著作『善の研究』は、現在岩波文庫で読むことができますが、難解で知られていて、戦前はいわゆる旧制高校の生徒の間で必読書のように言われていたこともありました。

その『善の研究』のなかで、西田が冒頭から使っているのが「主客合一」という用語です。先ほど書いたように、西田の思想は素人には分かりづらいのですが、できるかぎりテキストに即してどういうことを言おうとしたものか見ていきたいと思います。西田がまず「主客合一」を使うのは、「純粋経験」について述べる文脈においてのことです。この「純粋経験」とは、「経験するというのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粋というのは、普通に経験といっている者もその実は何らかの思想を交えているから、毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。（中略）純粋経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している」（『善の研究』第一編第一章「純粋経験」より）ことだと西田

は書いています。つまり、主観や客観という認識の働く以前の状態（主客未分の意識の状態）における経験のことであり、たとえば、世界に対する知識の定まっていない幼児においては、その経験が大人と比べれば圧倒的に主客未分の状態にあることは哲学に疎い者でも納得のできることではないかと思います。西田はこれを論じるなかで、「我々は少しの思想も交えず、主客未分の状態に注意を転じて行くことができるのである。たとえば一生懸命に断岸を攀じる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏する時の如き、全く知覚の連続 perceptual train といってよい（中略）また動物の本能的動作にも必ずかくの如き精神状態が伴うているのであろう。これらの精神現象においては、知覚が厳密なる統一と連絡とを保ち、意識が一より他に転ずるも、注意は始終物に向けられ、前の作用が自ら後者を惹起しその間に思惟を入るべき少しの亀裂もない。これを瞬間的知覚と比較するに、注意の推移、時間の長短こそあれ、その直接にして主客合一の点においては少しの差別もないのである。（同前書。傍線は引用者による）」といいます。つまり、幼児ではなくとも、人が崖を登攀することに集中しているときや音楽家が演奏に没頭している時がそうであり、あるいは「動物の本能的動作」であっても、そのようなことはあるのであって、そこに違いはないのだということを言おうとして「主客合一」と言っていると思われます。すると、この「主客合一」は、「純粋経験」の中の「主客未分」の主観と客観のありようの言い替えとみることができそうです。近年、国会図書館のデジタルコレクションに全文検索が実装されたので、『善の研究』（https://dl.ndl.go.jp/pid/1038592/1/3）の本文の「主客合一」と「主客未分」を検索して見ると、「主客合一」は全体で十二回使われているの対して、「主客未分」はこの冒頭の一回しか使われていないことがわかりました。つまり、はじめに「主客未分の状態」の語るのに「主客合一」を言葉として引き出し、あとはこちらの方を使って論を進めていることがわかります。

ところで、やや話が逸れるのですが、ここで西田が、「主客未分の状態に注意を転じて行くことができる」例に用いている「一生懸命に断岸を攀ずる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏する時」と、「動物の本能的動作」の「断崖」「音楽」「動物の本能」のセットを見ていると、赤尾兜子の代表作である〈音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢〉が想起されます。赤尾兜子は京都大学で中国文学をまなんでいますが、在学中は西田が京大で教鞭を執っていたころと重なります。単なる偶然かもしれませんが、面白い連関ではないかと思われます。

さて、西田の思索は、机上ではなく現実の意識の現在に目が向いており、一見、俳句という言語化した領域を扱う虚子とは異なるように見えますが、その辺りを次回確認したいと思います。

（はしもと　すなお　神奈川大学講師）

竹林のせせらぎ

青竹集・翠竹集作品鑑賞（十月号より）

今泉　かの子

裏門を入る給食青田風　工藤　弘子

広い敷地をもつ学校の裏門へ給食の配送車が、ちょうど入って行くところ。校舎の周辺には青田が広がり、みずみずしい苗が、波のように美しく風に靡いています。その青田風の清々しさは、人けのない裏門を通って、校舎へも吹いていくのでしょう。子ども達の健やかさを育む給食と、これから実をつけ稲穂になっていく青田と。配送の車の動きとともに、一句の中に青田風が流れていくようです。

晩涼や宗匠の手の井戸茶碗　酒井　英子

井戸茶碗は、井戸を覗き込むような深さからとも、発見が韓国の「井戸谷」だったからとも、由来は諸説。ろくろ目やひび、釉薬の縮れをさす梅花皮（かいらぎ）などの見所をもつ、茶道では最高位の茶碗だそうです。きっと宗匠の掌にも納まりのいい茶碗。手にされた茶碗や宗匠の御姿に、涼し気な雰囲気を感じられたのでしょう。昼間の熱が収まりつつある夕まぐれ、静かさの中にある涼しさが伝わります。

たこ焼き屋鉢巻汗を止められず　平井　香

汗止めのための鉢巻きは、実景なのでしょう。汗をかきつつ奮闘する人の姿に、鉢巻をした「たこの八ちゃん」のあのキャラクターが重なって、しかも「汗」が季語として立っています。田河水泡の漫画から、今もある、日間賀島歓迎のねじり鉢巻のモニュメントまで。実景の向こうに、記憶に結ばれた虚の像も浮かんで、ちょいとたのし。

ひまわりやソフィアローレン大股に　加島　照子

戦争で引き裂かれた夫婦を描いた映画「ひまわり」。戦後、妻役のソフィアローレンが、行方不明の夫を捜しに行くと、記憶を失くした夫は現地の女性と家庭を築いており、その後記憶が戻って夫が会いにきた時には、彼女はもう別の人生を歩いていた、という悲劇。でありながら、ひまわりの光景は圧倒的に強く美しい。あの広大なひまわり畑のロケ地は、ソ連時代のウクライナ南部。そしてひまわりは、ウクライナの国の花。残酷で悲惨な戦争、でもいつか終わりは来るのです。生命力の象徴、ひまわりに万感の思いが込められています。

寝るまでの団扇大好き秋はじめ　神谷つた子

寝つくまでの暫く。団扇の風の心地よさを感じつつ、次第に記憶が遠のいて、そのまま眠りに入っていけたら。それは小さな幸せ。クーラーに頼らなくても、程々に暑さをしのげ

る秋はじめ。ところでこの団扇の風は寝顔を見ながら送っている？ それとも自分に送られている？ 大好きの措辞が優しい。

夏雲を突き抜け一路長岡へ　清水みな子

青空に立つ夏雲のエネルギーを上回る、勢いの良さ。「一路」から目的地へと向かう、旅の高揚感も感じます。長岡の花火の豪華さは日本でも屈指です。ここ数年通い続けている作者にとって今年もまた、の期待が込められているのでしょう。

竹やりの夢をまた見る終戦日　濱嶋　君江

今、こんな生々しい体験を詠める方がどの位いらっしゃるでしょうか。昭和二十年の夏からすでに七十八年。日本全土を覆う軍国主義、竹やりの無力感、そして今も夢にみる現実。様々な思いが交錯します。終戦日は、ずっと遠い日のようでいて、今もこの時代に繋がる、平和を願う日でもあります。

風鈴の鳴るバス停や峡の町　山田　和男

風鈴の音が、聞く人によっては迷惑となる、との認識が広まったからでしょうか、軒先の風鈴を見かけなくなりました。でも、掲句の場なら安心。人気のない山峡の町では、共にバスを待ち、また人を出迎えるような存在の風鈴なのかもしれません。風鈴の音に、利用する人は里の涼しさを頂きます。

はらほろとノート解れる翌は秋　川嵜　昭典

「翌（あす）は秋」は、水無月尽の傍題。たまたま手元にあった山本健吉編「最新俳句歳時記」（文春文庫）で見つけました。最新とはいえ、一九七七年の版。掲句。はらほろのハ行の語感が、ベタッとしていないノートの手触りのようで、涼しくなりつつある秋の気配を誘います。感覚の新鮮さ。

団扇風老々介護の日課いま　稲吉　柏葉

その日の体調をみながら介護されているのでしょう。人の手から送られる団扇風は、ときに強さを変え、送るところを変え、随意。介護の日々を団扇風に託して客観的に叙述。

八月六日富士山の水届く　安井千佳子

八月六日は広島忌。多くの人が水を求め、求め続けたまま命を落としていった、あの日。同じ日に作者の元へ、日本の名水を誇る富士の水が届きました。歩かずして簡単に物が届く、平和な日本のありよう。それを享受できる幸せと共に、忘れてはならないとの戒めも、詠み出しの七音から感じます。

墓洗ふ柄杓薬缶の水重ね　今津　律子

ねんごろな墓参です。柄杓から薬缶から繰り返し水をかけて。亡き人を偲び、草や掃除、花や線香など手厚く供養されている様子が浮かびます。毎年、年を重ねるごとく「水重ね」。

一句一会

川嵜昭典

鳥獣も虫も息して草いきれ　岩岡中正

（『俳壇』十月号「雲の峰」より）

この句の「虫」は秋の虫ではなく虫一般であるから、当然重点は「草いきれ」にある。自然はいつもごった煮だ。世の中に純粋な自然というのは存在しない。同じように純粋な草むらというのも無く、目の前の草むらが単なる草むらに見えたとしても、そこには大小さまざまな生き物が生息している。そして、不快に感じる草いきれも、そんな生き物たちの出した息をも吸い込んでいるということになる。それは確かに不快だが、一方で自分を含めた自然が、それぞれの個性を勝手に出しながら生きているという証でもある。その勝手さ、てんでばらばらさが、いつの間にか調和している、というのが自然というものだろう。

団栗やこころころころ盗まるる　鹿又英一

（『俳壇』十月号「飯粒」より）

中七「こころころころ」、団栗がころころ転がっているのかな、と思ってよく読むと「心ころころ」となっていて、味わい深い。もちろんこの言葉の面白さを楽しむ句だが、一方で、団栗は見つけると拾いたくなってしまうが、それは心が盗まれているからだ、という発想も妙に納得がいく。俳味のある句。

しつかりと店の奥より生身魂　長谷川耿人

雲梯のにほひ残暑のもろ手より　同

（『俳壇』十月号「崩れ簗」より）

「しつかりと」の句。「しつかりと」がいい。いくつになっても自分の領分、やるべきことを為すという気概を感じる。そういう店も最近は少なくなっているように思うが、やはり清々しいものである。

「雲梯の」の句。確かに雲梯をした後の手は、鉄のような、独特の匂いがする。その匂いが「残暑」という季語と合わさると、むしろどこか懐かしい気持ちになるから不思議だ。

霧分けゆき己れに戻る五体かな　衛藤能子

（『俳壇』十月号「霧分けゆき」より）

霧の中を歩いていくうちに、だんだんと前後不覚になった自分が、はっと我に返ったという句。「己れに戻る五体」という表現が面白いが、よくよく考えると、今の生活は頭ばかりを使い、体をきちんと使っていないのではないかとも思

い、反省する。本来、手を使い、足を使いして、その感覚を頭にインプットしていくべきなのに、頭ばかりで想像している生活は、やはり自然ではない。そういう意味で「五体」という表現はとても力強く、心地よい。

街路樹の色甦る夏の雨　太田　節男

（『俳壇』十月号「水の星」より）

おそらく筆者は交通量の多い道の街路樹を見て、淋しい気持ちになったのだろう。しかしそこに、夏の雨が降った。それは作者の心にも、砂漠の中のオアシスのような潤いをもたらしたのではないか。夏の雨は、全てのものに命を吹き込ませるような、そんな印象を与える。「夏の雨」のみずみずしさ、生命力を感じさせる。

曖昧な明日の約束秋の暮　明隅　礼子

（『俳壇』十月号「休航」より）

同じ約束でも、子供の約束と大人の約束とは違う。「曖昧な」約束をしても、子供の約束は、希望のある約束だ。つまり、実行することは確定している上で、子供ながらの詰めの甘さによる曖昧さだ。それに対して、大人の約束は、それが曖昧になされたものであるならば、どこか気乗りのしない約束だ。掲句の約束はどちらだろう、と考えるが、「秋の暮」という、どこか懐かしさを感じる季語から考えると、子供の頃の約束を、ふと、作者が思い出したのかもしれない。明日も、と約束をしたものの、次の日にはなぜか会えなかったという思い出は、誰しも持っているのではないだろうか。

川は木曾川山は伊木山風五月　武藤　紀子

（『俳壇』十月号「弱法師」より）

伊木山は岐阜県各務原市にある、標高一七〇メートルほどの小さな山である。その麓には木曽川が悠々と流れている。そして向かいには犬山城がある。私の部屋からも、伊木山は見えたので、私はずっと伊木山を見て育った。木曽川が流れているせいか、砂っぽい土地柄だが、初夏にはとても心地よい風が吹く。その土地に住む人は、まさに掲句のような、川と言えば木曽川で、山と言えば伊木山、という感覚だろう。この地を知る者ならではの爽やかさが伝わる。

触れながら秋の暮てふ別れかな　茅根　知子

（『俳壇』八月号「十返りの花」より）

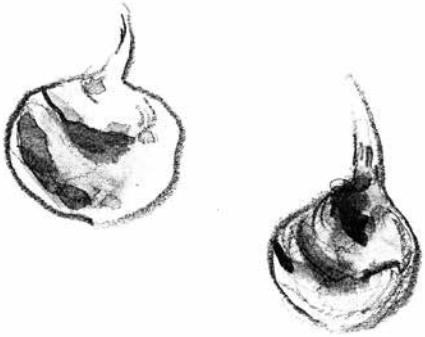
「触れながら」は、何に触れているのだろう。相手の顔か、手か、それとも人ではない花か何かか。そんな曖昧さも「秋の暮」だからこそ、きっと美しくも名残惜しい何かなのだろうという想像が働く。瑞々しい別れだと思う。

（筆者　〒四八五―〇〇二九　愛知県小牧市中央一丁目二〇七―三〇三）

同人13人が選ぶ

若竹この一年の成果

’22年9月～’23年10月



田口風子

《一推しの句》

一揆寺出る真白な春日傘　酒井　英子

この一揆寺は安城の本證寺だろうか、徳川家康が三河一向衆と激しく対立した拠点となった寺。今でも城郭寺院の面影は見ることが出来る。多くの血が流された時代を経て、今では静かな時間が流れている一揆寺。春日傘が「白」ではなく「真白」に見えた作者の感性に感銘。

《その他の注目句》十句

枯蟷螂目の色残し枯れゆける　高橋　冬竹

秋一日書斎代はりの四畳半　渡邊たけし

鴨ゐれば人は足止め鶴を見る　烏野かつよ

春に夫夏におとうと沙羅の花　池田あや美

夕薄暑いま夫らしき気配して　江川　貞代

鳥曇廃校に立つ金次郎　加島　孝允

初伊勢や外宮せきやの御饌の粥　長表　昌代

断ち切れぬ未練ふらここ揺れ残る　新部とし子

再会の従姉妹手つなぐ聖五月　田口　綾子

雀の子被爆ドームの水を飲む　中井　光瞬

荻野杏子

《一推しの句》

熟れ柿のどうにもならぬ二等分　工藤　弘子

この作品、作者を通して柿好きの子規が見えて来るから不思議だ。いつの間にか熟柿になってしまった柿を前に手こずる様子が微笑ましく俳味があり「二等分」がよく効いている。仲良く二つに割って食べたいのであるが柔らかすぎてどうにもならない。柿好きにはうれしい秋到来である。

《その他の注目句》十句

秋暁や丹頂の鳴く十勝川　酒井　英子
五箇山や平飼ひ鶏の寒卵　鈴木　帰心
冴返る毒薬瓶の黒ラベル　奥村　頼子
麦秋や出荷の豚の尻を押す　髙橋　冬竹
葛若葉大和八木までバスで行く　高濱　聡光
榛名より驟雨一陣来たりけり　坂口　圭吾
朝の正門先生は白日傘　今泉かの子
盆用意佛具みがきの小半日　辻村　勅代
作文の初めての嘘夏休み　堀田　和敬
来世も連れ添ふつもり門火焚く　市川　栄司

江川貞代

《一推しの句》

雀の子被爆ドームの水を飲む　中井　光瞬

世界で唯一の被爆地広島。広島は彼の在。彼は「一年を通じ爆心地をテーマとして取り組む」との覚悟を示す。今迄発表された句群の一句「原爆忌八時の空はまだ消えず」。八月六日午前八時十五分原爆投下。凡そ十六万人の市民が爆死。この重いテーマに取り組まれる彼に敬意を以て期待しています。

《その他の注目句》十句

一人来て雨の茅の輪を潜りけり　田口　風子
残る柿みなこの里の鳥のもの　池田あや美
夏燕守礼の門は扉を持たず　市川　栄司
一揆寺出る真白な春日傘　酒井　英子
子は蟻を母は子供を見てをりぬ　加島　照子
夜の艶は雨の向かうに盆の家　大澤　萌衣
残る鴨幸せだからここにゐる　堀田　朋子
一月や遠くに父の故郷がある　川嵜　昭典
日と影と流れて行かぬ秋の川　田口　茉於
秋惜しむ佳き日の写真みな黄ばむ　池田真佐子

川嵜昭典

《一推しの句》

空蟬をいくつも付けて被爆の木　中井　光瞬

作者は広島を、そしてヒロシマを詠み続けている。「空蟬」には、既にそこにはないのに、その名残があるという寂しさと、既に旅立っていった希望とが同居しているが、掲句では後者だろう。被爆してもなお、その下に命を集め、それらを旅立たせる。木の奥にある力を感じずにはいられない。

《その他の注目句》十句

観音の千手賑やか淑気満つ　田口　風子
風穴に顔近づける残暑かな　山田　和男
昨日まであり し冬木の伐られけり　飯島　慶子
折鶴を一羽置き呉れ卒業子　重留　香苗
みどり児の爪やはらかき聖五月　黒野美由紀
七七忌あなたに柏餅たんと　池田あや美
子は蟻を母は子供を見てをりぬ　加島　照子
新聞紙敷いて燕に軒を貸す　荻野　杏子
春暁や死にゆく人と聴くバッハ　江川　貞代
鷹鳩に化し吉良人は赤穂へと　鈴木　帰心

池田あや美

《一推しの句》

近くともかなかな遠くより聞こゆ　堀田　朋子

蜩の声を聞くと、一瞬にして蘇える景がある。十余年前になるが、娘と信州の旅をした。その宿で聞いた蜩の声と、今聞いている声が交叉して不思議な感覚をおぼえる。近くとも遠くより聞こゆと詠む詩情に共感した。かなかなの鳴声の持つ儚なさの所以であろう。

《その他の注目句》十句

小鳥来る耳で数ふる二羽三羽　堀田　和敬
星の入東風父の尺八聞こえさう　江川　貞代
山の木の水満ち満ちて今日の月　今泉かの子
幣立てて源流といふ滴れり　市川　栄司
子は蟻を母は子供を見てをりぬ　加島　照子
虎杖の紅き芽吹きや火山灰の山　山田　和男
みどり児の爪やはらかき聖五月　黒野美由紀
手話の「き」はきつねのかたち梅雨満月　田口　風子
つくつくもみんみんもゐて泡子塚　鈴木　帰心
汲み置きの水の熱さや原爆忌　工藤　弘子

工藤弘子

《一推しの句》

蝶生る王土一夜に亡びしか　大澤　萌衣

得体の知れないウイルスや、終りの見えない戦争が今、人間を脅かしている。ましてこの句の時代の人々の暮しは、想像を超えたものだったと思う。しかし人間は盛衰を繰り返しつつも、歴史を命を繋いできた。「蝶生る」の季語は、一夜で亡びたかの王土にあっても生命は繋っていると、希望を示している。

《その他の注目句》十句

爽やかや直球でくる子の返事　服部くらら
冴返る二十六聖人素足垂れ　酒井　英子
父の忌や実家の焙炉の匂ふ頃　重留　香苗
おぼろ夜のおぼろの夫に寄りかかり　江川　貞代
風光る赤の好きなる女絵師　関口　一秀
草に鳴く子猫に今日は鈴の付く　稲石　總子
担ぎ出すトルソーの肌冷えきつて　飯島　慶子
舎利木のりんりんと鳴る野分かな　堀田　朋子
靴音に声に色鯉寄り来たる　今泉かの子
水音も風もさびゆく下り簗　水野　幸子

服部くらら

《一推しの句》

梅漬ける今年もそばに妻の居て　稲吉　柏葉

一読胸に迫るものがあった。切なさでなくご夫婦の寄り添い支え合うお姿が映像となって押し寄せてきた。妙に静かにしかし熱く。「今年も」の「も」が歳月を、「梅漬ける」の「梅」がお二方の品性や普段を物語るのも句力と信じ得た。失してはならぬものは何かを改めて教わりもした。

《その他の注目句》十句

七種や関八州の晴れ続き　工藤　弘子
一輪は一輪の香や梅二月　稲石　總子
封筒はふつくらふきのたう入れて　今泉かの子
香を聞く雨の八十八夜かな　市川　栄司
今朝の夏いよよ傘寿の髭を剃る　関口　一秀
なんじやもんじや昨日よりまた白くなる　岡田真由美
風のぼり行く凌霄の花梯子　米津季恵野
ハンカチは大判が好き干す時も　清水みな子
朝顔や疲れて眠る人愛す　田口　茉於
カウベルの音冷ややかに牛帰る　渡邊　悦子

関口一秀

《一推しの句》

防空壕ありし辺りの蛍かな　工藤　弘子

我が家の竹林にも防空壕があり、空襲警報が鳴ると、二歳の頃の私は、何も分らず母屋の板の間で飛び回っていると、今は亡き姉が私の手を取り防空壕に連れて行ったようです。家の周りの川辺にはよく蛍が飛んでいました。そんな戦後の記憶を蘇らせ、平和の尊さを教えてくれた大事な一句です。

《その他の注目句》十句

春暁の夫の温もり腕にまだ　江川　貞代
花野行き行きて夢二のアトリエに　髙橋　冬竹
手の窪を食み出す薬雀の巣　鈴木　玲子
秋一日書斎代はりの四畳半　渡邊たけし
白息や目覚めの馬の胴震ひ　平井　香
厠にも志功の天女竜天に　鈴木　帰心
一月や遠くに父の故郷ある　川嵜　昭典
春に夫夏におとうと沙羅の花　池田あや美
雀の子原爆ドームの水を飲む　中井　光瞬
夫抱きて逝かせし妻よあたたかし　堀田　朋子

堀田朋子

《一推しの句》

木の瘤は明日も木の瘤油蟬　中井　光瞬

〝ヒロシマ〟を詠まれた一句。祈りの心情が底流している。「木の瘤」が明日もここに「木の瘤」である当り前のことが、一発の原子爆弾によって叶はないことがある。「油蟬」は消え失せるのだ。詠み続けられる光瞬さんの句によって、私も〝ヒロシマ〟を思い続けてゆきたい。

《その他の注目句》十句

山小屋の道は崖沿落葉掻く　山田　和男
雑巾を干して帰りぬ寒稽古　加島　照子
春暁や死にゆく人と聴くバッハ　江川　貞代
花の雨指に食ひこむ絞り糸　堀場　幸子
あたたかや子等余さじと骨を上ぐ　池田あや美
長身の神父涼しき歩幅かな　田口　風子
荒梅雨や狂はぬ時計買ひに行く　高濱　聡光
血の滲む両膝を持つ夕焼けて　田口　茉於
補聴器もすでに身の内昼寝する　松元　貞子
防空壕ありし辺りの螢かな　工藤　弘子

酒井英子

《一推しの句》

木の橋に木の湿りあり小六月　三矢らく子

岡崎市の乙川に架かる桜城橋は、人道橋として設置された。欄干も床もすべて額田産の桧で作られている。この橋は、毎月、子供からお年寄りまでのボランティアが、雑巾掛けをして大切にしている。私は、思わず裸足になって、木肌を感じながら歩きたくなった。木の湿りは木の温もりである。

《その他の注目句》十句

雨降れば雷鳥親子木道に　山田　和男
一月や遠くに父の故郷ある　川嵜　昭典
蝋梅の香や貫木は神木に　天野れい子
五箇山や平飼ひ鶏の寒卵　鈴木　帰心
草餅や粗にして甘き母の味　市川　栄司
少年が作文を書く雛の間　荻野　杏子
おぼろ夜のおぼろの夫に寄りかかり　江川　貞代
靴音に声に色鯉寄り来る　今泉かの子
一人来て雨の茅の輪を潜りけり　田口　風子
秋燈を集め平積み新刊書　工藤　弘子

飯島慶子

《一推しの句》

熟れ柿のどうにもならぬ二等分　工藤　弘子

夕陽のように色濃く熟れた柿。いざ包丁を入れてみると、二等分すらままならないほどやわらかい。指にもまな板にもとろりと甘い果肉が残り、思わずひと口。そんな一連の様子が五感を伴って目の前に広がりました。私自身の経験でもあります。十七音の的確な描写に心を打たれました。

《その他の注目句》十句

老父母はアイスモナカを待つてをり　山科　和子
手を打てば降り注ぐかに星月夜　加藤　久子
百才を待てずの別れ秋の蟬　稲吉　柏葉
小鳥来る来てくれたんだなと思ふ　堀田　朋子
夜長楽し夫は寝言でも笑ひ　神谷つた子
湯ざめさすまじみどり児を手から手へ　髙橋まり子
まづはハグ御慶申すはその次で　服部くらら
蟻出るや一粒づつの土咥へ　荻野　杏子
喪のわれに春の蠅虎出で来　江川　貞代
いつからかレシピを見ずに麻婆茄子　鶴田　和美

荒川洋子

《一推しの句》

車座の十二神将秋灯　奥村　頼子

薬師如来の周囲、四方八方を守護する武装神、十二神将。彼らは四六時中、緊張の解けない任務を遂行している壮年の男達だ。ある秋の夜、如来様が珍しくお留守になった。男達に束の間の休憩が与えられた。武具を置き、車座になって、一体何を語り合っていたのだろう。想像するだに楽しい。

《その他の注目句》十句

桐の実のからからと死は忽然と　江川　貞代
秋寒し魚は口から串さして　稲吉　柏葉
冬めくや声捨ててゆく夕鴉　工藤　弘子
括られてなほ冬菊の匂ひけり　重留　香苗
鈴ならば楽しからうに花あしび　橋本　周策
二ン月の街見おろして車椅子　岸　玉枝
あないびとの訛親しく山笑ふ　鈴木　帰心
半島を乗せて膨らむ春の潮　三矢らく子
夫陽気青大将に声かけて　髙瀬あけみ
水流る早乙女の足洗ひけり　松岡　裕子

髙橋まり子

《一推しの句》

凧揚げや父と子が引き天が引く　酒井　英子

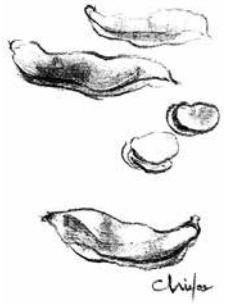
掲句の「天が引く」という措辞に心引かれた。天というのは気象学的には風のことだ。ただそれを「天」と言い換えたのがこの句の妙味。天が相手をしてくれてこそ、凧は揚がるのだ。天という途方もなく大きな力を持つものを相手に、綱引きに興じる親子の姿が見える佳句である。

《その他の注目句》十句

薄墨桜（うすずみ）の色をつくして一日老ゆ　田口　風子
忘れ物あるかに年の夜のひとり　工藤　弘子
春暁や死にゆく人と聴くバッハ　江川　貞代
春一番城下の二十七曲り　天野れい子
父の忌や実家の焙炉の匂ふ頃　重留　香苗
蝌蚪浮いてくる身の程の泥煙　堀田　朋子
初夏の少女目覚むるときの伸び　田口　茉於
低山の賑はふ土曜秋めきぬ　山田　和男
竈猫そろそろ夫の帰る頃　岡本たんぽぽ
野遊びや母になる娘となりし娘と　松田美奈子

翠竹集 Ⅱ

（同人自選）



冬を待つ　廣澤昌子

ワクチンを待ちつつ秋を老いてをり
落葉浴ぶ雑木林といふ世界
ふるさとの景おだやかに冬を待つ

収穫　今津律子

収穫や刈取り依頼書掲げらる
見納めの稲の秋かも宅地化と
軽トラに新藁積まる嵩高く

草の花　水野由美子

名を呼べば猫が顔出す草の花
おろし金荒く使いて野分晴
女郎花見て男郎花捜す

再生医療　安井千佳子

落蟬の再生医療の身にすがる
けら鳴くや人には見えぬ後遺症
薬袋かさこそさする夜寒かな

秋遍路　大石望子

秋遍路伊予路半ばの堂泊まり
ねんごろに鐘撞き行きぬ秋遍路
呼び止めて風呂の接待秋遍路

上州吟行　岡本たんぽぽ

秋高し遠くに望む観音像
秋思ふとロシア兵士の墓の前
数へながら登る石段秋暑し

浜鳴　冨永幸子

浜鳴の潟探る嘴せはしなく
釣瓶落とし自転車立ちこぐ女学生
素十の忌隣家へ葡萄お裾分け

金蓮寺　長坂尚子

爽やかや児童と学ぶ金蓮寺
縋(すがる)屋根美し秋日差す檜皮葺き
腰を折る観音勢至秋深む

寒露　金原香代子

もらい受く菜花を植える寒露かな
町内の諸掘り行事申し込む
枝豆をたっぷり入れてかき揚げ丼

祝　黒野美由紀

秋晴れや新婦はブーケ投げ上げる
四十年守りし店や今年酒
友と酌む新酒本音の溢れ出す

湯の町　田畑洋子

湯の町や何はさておき走り蕎麦
湯の町のたちまち墨絵秋驟雨
秋ともしひとつひとつに物語

秋の空　鈴木恭美

雲ひとつなき青空よ栗落つる
空青く木犀の香と鳥の声
雲に乗り流れてゆけよ我が秋思

夏　渡辺よね子

殿にいてたんぽぽのわたとばす
姑の櫛なじみし髪や夏に入る
夏立つや田水に雲のあふれをり

トンボロリレーマラソン　石川とわこ

トンボロの鳶も翔び立つ賑やかさ
着ぐるみのラジオ体操秋の浜
遠方の車並ぶや秋干潟

朝顔　橋本周策

倒れたる竿に朝顔みだれ咲
朝空の青に溶け込む牽牛花
糞で知る大芋虫の潜みたる

秋の雲　稲吉柏葉

木犀に足音路地は行き止り
貨車動き出すぽっかりと秋の雲
たたみ来る波の白さの秋意かな

戦国オペラと落語独演会　浅野寛

ひたに舞ふ四人の女御爽やかに
独演会二席とトーク爽やかに
アンコールに止まぬ拍手や秋惜しむ

尾道水道の朝　堀田和敬

学園生の溢れる渡船朝の秋
朝の秋始発渡船の薄明り
父と子の釣船海へ朝の秋

良夜　飯島たえ子

束ね挿すほら独り言吾亦紅
図工室翅をしずめて秋の蝶
大声に夫をさがせし良夜かな

霧　和田郁江

深き霧すれちがふ人無口なり
朝霧の湖に一点舟を置き
塩沢の朝霧どつしり村包む

トンボロ干潟　伊藤恵美

引く潮を待ちつつ銀杏飯を食ぶ
天高しトンボロの道踏みしめて
寄せ波の小さきウェーブ秋澄みぬ

敬老日　村重吉香

祝金一村配る敬老日
秋日傘笑いはみ出す黒い髪
利き腕の古希に力の落し水

秋まつり　水谷螢

境内はごった返して天高し
紙吹雪色なき風を染め上げり
秋まつりメの花火の一時間

待宵　杉浦紀子

名月や隣の人も庭に出て
待宵や「産声姫」とメール来る
明々と十五夜どこか孫の顔

金木犀　鎌田初子

朝な夕な金木犀の自己主張
雨風を凌ぎ酔芙蓉の彩
秋深き名古屋駅へは四年振り

秋の畑　鈴木美江子

まだ残るとてもよく成る秋の茄子
畑均し一列二列大根蒔く
隅ずみまで鍬で整理の秋の畑

秋彼岸　鈴木まり子

亡き義母に話たきこと秋彼岸
ごつごつの手作りおはぎ秋彼岸
萩の雨レジに寝転ぶペルシャ猫

初鴨　笹澤はるな

とんぼの空風に追はれて消えにけり
上へ下へ寄りつ離れつ秋の蝶
初鴨や夕日の中のシルエット

彼岸花　岩田かつら

あの人も彼の人もいる彼岸花
杖ついて過ぎゆく背なや彼岸花
直売の道案内は彼岸花

ひやおろし　坂口圭吾

百薬の長のあぢはひひやおろし
あらたまる磁器の白さや新豆腐
そば猪口に新そばのそば湯をそそぐ

輪中　加島孝允

舟吊るす輪中の住まひ秋湿
爽涼や義士へ千本日向松
秋出水輪中屋形の上げ仏壇

月　磯貝恵子

十六夜やどっち付かずの恋をして
今頃は君も見上ぐやこの良夜
月光を浴びし頃より君青く

唐辛子　中澤さくら

鷹の爪散りてひと味南蛮酢
花束のごと束ねられ唐辛子
逆らはず今日も吊らるる唐辛子

秋果　犬塚玲子

相触れぬよう桃大切に置かれ
桃は豊田産と太文字で書かれ
凶作や色づきて知る柿の数

星月夜　太田小夜子

星月夜路地より出でる介護タクシー
ベランダに煙草の煙星月夜
星月夜旧舎銀座はシャッター閉じ

芒　田口茉於

日を集め秋の海いま青くなる
芒揺れ夜の来ることを怖れけり
日矢差して秋の逝きける波の色

同人推挙

次の皆さんを令和六年一月号より、若竹同人の列に加えます。

主宰　加古宗也

今村和夫（前橋）
石川裕子（安城）
松田美奈子（名古屋）
梅原巳代子（蒲郡）
國松房野（西尾）
松岡裕子（半田）
高山と志（西尾）

俳句四季新人賞
受賞記念作品20句　犬星星人

俳句四季新人奨励賞
受賞記念作品20句　内野義悠
早田駒斗

新人賞最終候補者
競詠5句

◇巻頭三句
池田澄子
小杉伸一路
高田正子
鹿又英一
島村正
千々和恵美子

◇今月の華
今瀬一博
藤本はな

◇俳句と短歌の10作競詠
こしのゆみこ
阿木津英

◇好評連載
成瀬政博　とりあえずの日々
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西朋　俳句へのまなざし
神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
毬矢まりえ　諸家書架
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2023年12月号
11月20日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

句集の扉

天野　れい子

句集「彼此」　西池　冬扇

「ひまわり俳句会」主宰の第五句集。二〇一四年から二〇二〇年までの四〇〇句を収録。

オオイヌノフグリを踏んで知らぬ顔
ホオジロが近所へ寄つただけという
口笛のアバンティぽぽろ春は尽き
柚子の実の空に浮いていることもある
海荒れるひとり酸奨揉む夜は
特別の切符一枚銀河濃し

「彼岸と比岸、命とモノ、聖と俗、理と情、人間は常に異なる次元が共存する世界に存在している。異次元の世界との壁は時によっては穴がぽっかりあき『あわい』の世界に入り込む」「俳句は異次元の世界との「あわい」を往来することのできる切符である」とあとがきに。

一九四四年　大阪生まれ

（二〇二一年七月　ウェップ　二七〇〇円）

句集「父の夜食」　細谷　喨々

「螻蛄の会」宗匠の第三句集。二〇〇七年から二〇二〇年までの三七〇句を収録。帯文・栞、詩人の工藤直子氏。

往診の父の夜食に子が集る

「農村で小さな医院をしていた父が自転車で往診をしていた時代の我家の風景を懐かしく詠んだ一句から句集名に」と。

屋上に一人の月を祀りけり
ふらここや順番待ちの子が歌ふ
八月やオルガンの蓋軋みけり
陽のあたる場所に必ず初雀
あはれ蚊の縋りつきたる栞紐
忘れ汐いそぎんちやくに指吸はせ
てんと虫離れて遊ぶ子がひとり
小児科医である著者。万物を慈しむ温かいまなざしを感じる句集である。

一九四八年　山形生まれ

（二〇二一年一二月　朔出版　二六〇〇円）

句集「寸法直し」　津高里永子

「小熊座」同人、「すめらき」「墨ＢＯＫＵ」代表の第二句集。二〇〇六年から二〇二〇年までの四五六句を収録。帯文・池田澄子氏。題字・深見けん二。

寸法直しせずやしぐるるわが裾野

「句集名は、近所の洋服直しをしてくれる店のご主人の言葉と、ちょっと手を加えるだけで着具合がよくなる不思議さに感心して」とあとがきに。

掃除機を動かすまでの春うれひ
たんぽぽの絮よわが夢何だつけ
髪洗ふ排水口を見つめつつ
新米を研ぐや余計なこと言はず
歩みたき方角に径なき花野
はぢらひの色の鮟鱇すりつぶす

「自分のことは後回しにする優しさ。その優しさが対象を凝視させ、深い思い入れとなり自身への微苦笑となり、俳句になる（帯文より）」と。

一九五六年　西宮市生まれ

（二〇二二年二月　角川書店　二五〇〇円）

句集「一粟」　堀本 裕樹

「蒼海」主宰の第二句集。第一句集から後の一〇年の三四八句を収録。巻末に季語索引。句集名は次の句から。

蒼海の一粟の上や鳥渡る

「宇宙における人間の存在の微塵を、広大な青海原にきわめて微小な一粟が漂っている事に譬えた北宋の詩人の『赤壁賦』から」とあとがきに。

花冷をたまはる花の老樹より
春コート輝くものを追へば旅
なき魂をさがすや蛍ひた集め
夏蝶の口くくくくと蜜に震ふ
眠りゐる水の夢なる花藻かな
目に見えぬ傷より香る林檎かな
冬蜂の事切れてすぐ吹かれけり

「私という人間はこの宇宙において、一粒の儚い粟に過ぎない。大海の波間に漂い翻弄されながら生きていくしかない」との著者の言葉に共感する。

一九七四年　和歌山県生まれ

（二〇二二年四月　駿河台出版社　二二〇〇円）

句集「雲は友」　岸本 尚毅

「天為」「秀」同人の第六句集。全二八八句を収録。巻末に初句索引。

風は歌雲は友なる墓洗ふ

句集名はこの句に拠るか、自選一五句はすべて雲の句である。

芋の葉や見れば名残の雲の峰
絵の如き雲に冬来る思ひあり
埼玉は草餅うまし雲白し
秋の雲子供の上を行く途中

「これまで『老人』という言葉を避けてきたが、還暦を過ぎ、自分が老人に近づいたので、老人という言葉を使ってみた」とあとがきに。

戦争を知らぬ老人青芒
置いてあるやうに老人初大師
顔焦げしこの鯛焼に消費税
焼蕷をすこし食はされ抱つこの子
日常の何気ない風景を飄々と詠んで、あるあると思える楽しい句集である。

一九六一年　岡山県生まれ

（二〇二二年八月　ふらんす堂　二五〇〇円）

句集「はだかむし」　恩田侑布子

「樸」代表の第五句集。二〇一六年から二〇二二年までの三七一句を収録。

うちよするするがのくにのはだかむし

句集名は、「人間は毛も羽も甲羅も鱗もないはだかんぼうの虫だが、陰陽のまじりけのない精をを受けて生まれるという『大戴礼記（だたいらいき）』に拠る」とあとがきに。

咲きみちて天のたゆたふさくらかな
仙薬は梅干一つ芽吹山
雲根のみなもといづこ夕涼み
母てふ字永久に傾き秋の海
山茶花や天の眞名井へちりやまず
淡交をあの世この世に年暮るゝ
初富士や大空に雪はらひつゝ

「コロナ禍でふるさとの山河を一人歩いた」という著者。故郷の豊かな自然を存分に味わい尽くしたであろう句集。

一九五六年　静岡市生まれ

（二〇二二年一一月　角川書店　二七〇〇円）

（筆者　〒四四四―〇八七九　岡崎市竜美中二―一―八）

第14話

山暮らしの日々

平野　雷太郎

熱中症

「今日は日本全国何処もたいへんな暑さ、熱中症で倒れる人が続出して救急車は出動でおおわらわ。和歌山県本宮町では五十八歳の森林組合作業員が作業中に倒れて診療所に緊急搬送されたほか、全国では〇〇人が病院へ……」

午后七時のＮＨＫテレビがこんなニュースを報じた。

「よせやい、俺のことじゃないか」

危うく、あの世逝きとなるところだった熱中症のドタバタ劇が、まさか、テレビで全国に放送されようとは……。

梅雨が明けたとたんの猛暑、連日、強烈な陽差しが照りつけ、誰もが青菜に塩を振ったようにげんなりへなへな。その日も、朝七時をまわったばかりだというのに、一歩外に出れば、目眩（めまい）するほどのカンカン照り。はてさて、どうなることやらと、先が思いやられた。

組合住宅のすぐ横を流れ下る三越（みこし）川対岸の、植林してまだ間もない一メートルにも満たない若木ばかりで身を隠せる影ひとつない南東向きの急な斜面、ここがその日の下草刈りの作業現場だった。

腰をおろしゆったり寛げる場所もない急斜面にへばりついて、ジリジリ陽に焼かれながら、昼食をとり休憩時間をすごすくらいなら、多少時間はかかっても、山を下り川を渡って住宅まで戻り、涼しい日陰で昼休みにしようと話が決まって、刈払機と半日分の燃料、それに冷やした飲み水だけの軽装備で山に入った。

作業が始まってしばらく、ちょっと力が入っただけなのに指がつる。そのたび、刈払機のエンジンを止め、こわばった指を揉みほぐしては作業を続けた。

〝今日はどうも体調がいまひとつだな〟と、気にはなったものの、それでも、なんとか午前中の作業をやり終えた。

「おーい、ぼちぼち、昼にするか。」

声をかけると、待ってましたとばかり、皆は先を争うように山を下っていった。

最後のひとりとなった私は、途中、三越川の深みで、どっぷりと首まで冷水につかり、火照る体の熱をとってから家に戻り、濡れた作業を脱ぎすて、乾いたパンツ一枚だけで扇風機の風に吹かれながら、のんびり食事を口に運んでいた。

〝イテッ!!〟

なんの前触れもなしに右の脹脛（ふくらはぎ）から太股にかけて、筋肉

が引きつり激痛が走った。身をよじったとたん、左の脚にも……。両足が痙攣して身動きができない。痛みを堪えようと息をつめると腹筋がひきつり、ついには背筋まで。あまりの痛さに息もできないほど……。

呻き声を聞きつけとんできたかみさんに

「救急車!!」

このひと言を口にするのが精いっぱい。

ひっきりなし、ところ構わず襲ってくる痙攣と激痛、歯を食いしばり体を丸め、必死に堪えているうちに、意識が朦朧となって、じきに、なにもわからなくなってしまった。

後々、かみさんが話してくれたことによると、到着した救急隊員が声をかけても、なにも反応がない。血圧を何度も計っては「血圧、やけに低いな」とか、「なかなかあがってこんな」などと、小声で囁きあい、しきりにペンライトで瞳孔反射を確かめていたらしい。

〝ひょっとして、このまま逝ってしまうんでは……。そんなことになったら、この先、どうしよう……〟

かみさん、随分と気を揉んだみたいだ。

どれほどの時間だったか、くねくね曲がる山道を診療所へと直走る救急車のストレッチャーの上で、右へ振られ左へ揺さぶられるうち、ようやく意識が戻った。せいぜい十分ほどの道程が永遠に続くかと思えるほどに長かった。

筋弛緩剤なんだろう、点滴を受け、数時間、安静にしていたら、硬直も緩み激痛も収って、夕刻には「もう帰ってもいいですよ」と、帰宅を許された。

さあ、帰ろうとして、ハタと困ってしまった。パンツ一枚の姿で救急車に積まれ診療所へと運ばれてきた。同乗のかみさんは気が動転して、衣服や履物にまでは思いが及ばなかったようだし、帰る車もない。

こんな姿を人目に晒すのかと、参ってしまったけれど、どうしようもない。タクシーでも呼んでもらおうと、処置室から待合室に向かうと、急を聞いて駆けつけてくれた荒尾課長が、治療の終るまでの間、ずっと待っていてくれた。

――持つべきは友――。胸がジーンと熱くなる。この友情にどう報いたものか。いつもなら、

「まあ、あがってくれよ。一杯やろうじゃないか」

と、なるところだが、この日ばかりはそうもゆかない。なんの礼もなしに帰ってもらうしかなかった。

夕食ができるのを待つ間、横になってテレビを見ていたら、冒頭のアナウンスが耳にとびこんできたのだった。

暑さで疲れがたまっていたところへ、冷水浴で急に体を冷やしたため、熱中枢が狂ってしまい、暴走してしまったんではないだろうか。それにしても、日頃見慣れた三越川が、危うく、三途の川になるところでありました。

若竹ウェブ便り（40）

第四十回若竹ウェブ句会（二〇二三年十月募集）

7点　畝一本起こして仰ぐいわし雲　荒　一葉

（彰特選）昔から変わらぬ農作業。疲れたら休める幸せ。新鮮さを感じます。

（百代特選）情景が鮮やかに目に浮かびます。

5点　秋澄むや木立の中の観音堂　みな子

5点　捨てた句をまた拾ひをり秋灯下　西村青夏

（こう子特選）秋の夜長に句作を頑張っておられる様子がうまく詠まれていると思いました。

4点　漆黒の富士は正面星月夜　すーちゃん

（みな子特選）星月夜にすっくと立つ富士山の黒さを漆黒というのが良い。星たちの輝きが美しい。

4点　黄落や陽をゆずり合ふ木のベンチ　佳楓

3点　クレープを焼く香の中に並ぶ秋　こう子

3点　障子貼り残りの余生に張りもたす　佳楓

3点　認知機能検査予習の夜長かな　百代

3点　くれなゐに結ぶひと日や酔芙蓉　荒　一葉

3点　もろこしを茹でる妻ゐて昼下り　垣内孝雄

（帰心特選）ご夫婦二人暮らしの静かな昼下がりを想像しました。お二人には時間がゆったり流れているのでしょう。

3点　食卓の「ムンクの叫び」ラ・フランス　光雲2

（燕太特選）ムンクとラ・フランス、そこに気がつかなかったなあ。

3点　一枚のはがきをさがす秋暑かな　垣内孝雄

2点　千の田の風ひきしめて稲は穂に　佳楓

2点　ことごとく南へなびく芒の穂　蒼鳩　薫

2点　算盤をはじく老舗の新酒買う　かめしち

2点　秋天へ弾けるディープインパクト　ケン

2点　秋夕焼巨人になって歩く影　こう子

（すーちゃん特選）自分の動きにつれて動く大きな影を意思あるごとく捉えたところが楽しい。実物と影法師。実と虚が足元で繋がっている。

2点　願はくば米寿までもと林檎食む　かめしち

2点　秋日和分相応の小買い物　みな子

（はなこ特選）身の丈に合った小さな幸福の穏やかさ。

2点　黄帽子の右に左に追ふばつた　百代

2点　おろそかに食へぬ秋刀魚と思ひけり　燕太

（垣内孝雄特選）上五「おろそかに」に導かれる句意。

（加藤春海特選）旬のさんまは高嶺の花？　高値ですから。

2点　秋の蝶百花の中の黄を選び　西村青夏

1点　あつぱれの棋士は七冠秋高し　荒　一葉

（西村青夏特選）立派立派。もう八冠だけどね。

1点　観念の入所の便りそぞろ寒　　百代

（荒　一葉特選）心を決めてホームへの入所を決断したとの便りが身につまされる。

1点　蜻蛉羽の煌めく風を手に掬ふ　　光雲2

（蒼鳩　薫特選）丁寧で繊細な感覚、描写がいいなと思いました。

その他の一点句はHPのウェブ句会選句結果をご覧ください。

〈俳句気まぐれエッセイ㉛　千号記念百年展〉　今泉　かの子

この十二月号をもって、俳誌「若竹」はめでたく千百号となる。千号から八年。もう随分前のことのように思えるが、その際、千号記念事業の一つとして「目で見る俳句一〇〇年展」を開いた。宗也主宰の指示のもと、下働きとして会場申請から作品のデータ化、目録やキャプションづくり等、同人の清水みな子さんとともに作業に励んだ。遠い思い出であり、また熱い思い出である。

今思い返しても、圧倒的だったのは、主宰の所蔵する作品の多さである。それは、富田うしほの時代から培われた、当代の俳人方との広い交流が基盤となって、蒐集されたもの。その膨大な所蔵品を厳選のうえ厳選して頂き、それでも条幅、短冊、色紙、扇面等々、合わせて約四百五十点に及ぶ展示となった。虚子の「花鳥諷詠」の扁額をはじめとして、四十五幅もの条幅の壮観さ。色とりどりの短冊の華やぎ。目録に載せた写真ともに少し振り返ってみたい。

多くの関心が集まったのは、富田潮児が失明前の十代の頃に描いた里芋の条幅であった。うしほの句に、紙面をはみ出して描かれた葉の大胆さ。貴重な一幅である。

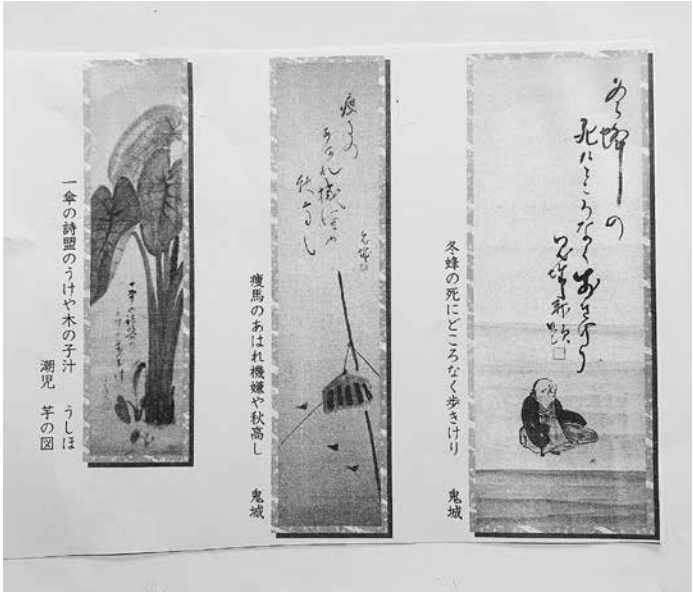
また、鬼城の「冬蜂の死にどころなく歩きけり」や「痩馬のあはれ機嫌や秋高し」これらの条幅の絵には、穏やかな明るさが感じられ、多面体である人間鬼城の一面が垣間見える。

さらに「流れ行く大根の葉の早さかな」虚子の認めた文字の流れや筆はこびは、まさに半切を川として大根の葉の流れるさまがそこに見えるよう。河東碧梧桐の、角ばったような字体と一字ずつ大きくなっていく「五月雨」のおもしろさ。また、書家宇佐美魚目から主宰に贈られた「鬼城忌の火種のごとき蜂を見し」の堂々。

そして、短冊では、教科書でよく目にした秋元不死男の「鳥わたるこき〳〵と缶切れば」「鳥」の字のかわいらしいこと。教科書には表現されなかったくりかえし記号も、飛んでいく鳥のようでおもしろい。色紙では、上田五千石の「あたたかき雪がふるふる兎の目」余白からもやわらかさが伝わる。その他、万緑の草田男、炭をつぐ誓子、しだれざくらの風生等々、書ききれない。

一堂に会した俳人の直筆を目にしての驚きや発見。そして、さりげないように見える筆致から、伝わる息遣いのようなもの。時空を越えた出会いに、熱い思いがしたことも、今は懐かしい。

それぞれの道違えずに鳥渡る



冬蜂の死にどころなく歩きけり　鬼城

痩馬のあはれ機嫌や秋高し　鬼城

一傘の詩盟のうけや木の芋汁　うしほ

潮児　芋の図

流れ行く大根の葉の早さかな　虚子

寺に寄る村の会議や五月雨　碧梧桐

鬼城忌の火種の知き蜂を見し　魚目

鳥わたるこきくくと縄切れば　不死男

あたたかき雪がふるふる兎の目　五千石

ふた葉ガーデン　服部くらら選

秋の葉でつくってみたよハンバーガー　一年　はると
バッタつかむあと六ぴきはつかむんだ　一年　ひかる
ふじの実さん剣になりそうこのかたさ　一年　なると
むかごとる長いながいつるがじゃま　一年　敏秋
ふじの実に太い細いがあるんだよ　一年　いちか
なつめの実くすりになるからありがとう　一年　はるき
秋あかねぼくのところへ来てくれよ　一年　さくや
いちょうの木秋になったね実があるね　一年　さなお
ちくちくざらざらむかごってなんかへん　一年　こなつ
秋のはっぱ風といっしょにとんでくね　一年　まおり
むらさきのなぞの実の名はシキブの実　一年　春人
くすの実さんボールみたいなかたちだね　一年　まはる
赤いろがとてもかわいい赤のまま　一年　りこ
ぎんなんがくさかったんだぼくの場所　一年　いつき
秋いいね元気な虫がいっぱいで　一年　祥春

秋の葉でつくってみたよ
ハンバーガー
まあおいしそうだこと。そまった葉の色を上手にくふうしたね。黄色はチーズかしら、これいただいてもいいかな。

ふじの実さん
剣になりそうこのかたさ
ちから持ち君もついに割れなかったね。花の姿を知っているだけにびっくりだったね。

秋あかね
ぼくのところに来てくれよ
右手の人さし指を高くあげていたのに気づいてくれなかったね。飛ぶのに夢中だったのね、きっと。

ちくちくざらざら
むかごってなんかへん
むかごはとろうとすると逃げやすいのにうまくとれたのね。ところが手ざわりときたら、ええっ、こんなはずではなかったんだ。知るってすてきね。

会報

服部くらら　抄出

中畑句会（九月）

神谷つた子報

新蕎麦や夫はそば湯も所望せり　つた子
そぞろ寒猫を寝床に招き入れ　竹児
望の月娘らに感謝の日々ありて　明女
鬼城忌の旅の途中や走り蕎麦　君江
新蕎麦や天麩羅少しあればなを　妙子
使ひ古る大き塗椀走り蕎麦　冬竹

土筆野句会（九月）

鈴木　帰心報

施設には施設のドラマ秋日和　帰心
おはやうはまづ犬のハルゑのこ草　あや美
栗飯や全き栗のほくほくと　英子
人通りなき道猫じゃらしの道　恵美
ゑのころや一本道の里遠し　紀子
埋め立てし売地一画猫じやらし　季恵野
檜皮葺の屋根反返り秋澄みぬ　尚子
若い世代の歌はわからん地虫鳴く　千代美
猫じゃらし学校帰りの二年生　つばな
猫じゃらし一本くはへ句を作る　宗也

はなぼうの会（九月）

池田あや美報

馬鹿提灯は間浜の矜持秋うらら　帰心
鰡飛ぶや氏子張り合う大提灯　こう子
蝋の香の漂ふ秋の諏訪神社　裕子
神降りて諏訪の社に秋気澄む　佳弥子
秋うらら稲竹はんぺい食べ歩き　あや美
梶の葉や大扉に仕舞ふ大提灯　まり子
パステルの祢宜の装束秋うらら　美由紀
秋さびし老いという名のひとくくり　恵子

煤竹の会（十月）

堀田　朋子報

時刻表繰る十月の同窓会　貞子
おつかひは小鍋をもつて新豆腐　美根子
お向とお隣さんから栗御飯　桂子
釣瓶落し宅配便のチャイム鳴る　清美
樺黄葉急な岩場の鉄梯子　和男
灯を消してちちろと同じ闇に臥す　頼子
芋虫の電車のように走りけり　勝美
月は東一里速歩に励む妻　和敬
秋霖やお琴立てある奥納戸　朋子
郷は秋晴カリヨンは童歌　宗也

日曜句会（十月）

田口　風子報

左手は地獄谷なり秋の山　和男
菊の日や教え子と酒酌み交はす　昭典
ためらひの後の投函十六夜　美奈子
麝香草岩場となるや七合目　真佐子
目つむりて聴く水郷の鵙の声　照子
晩成と言われ続けて八十の秋　孝允
チェロの音は人の声とも秋深し　幸子
臥す人の窓開けたがる虫の秋　朋子
冷まじや死せるイエスのあばら骨　貞代
凄まじや千手の一手髑髏持つ　頼子
夫病むや棗に色の来つつあり　香苗
草原を来て草の実の裾模様　周策
十五夜の等身大の影法師　風子
秋渇く日や水辺りに歩を向ける　宗也

朋友会（九月）

大澤　萌衣報

鱗粉ぬぐふ蟷螂の眼のきよろり　萌衣
ミキサーに踊る食パン小鳥くる　淳子
独り居の庭の葉擦れや小鳥来る　澄子
閉めきりの窓大開き涼新た　元美
過ぎし事これからの事曼珠沙華　ゆき江
小鳥来る今日開店のチョコショップ　伸子
熟れるまで初なりの柿見守りぬ　のり子
八月尽蔵書へ入れる養生訓　和夫
雨上がり行きつ戻りつ群れ蜻蛉　恒子
草原に揺れる芒の波光る　双葉
秋涼しモデル気分でハイヒール　笹良
新涼や水を使へば水跳ねて　弘子

山紫会（十月）

工藤　弘子報

コスモスの倒れては起き一万本　弘　子
秋桜迷路行く子ら見え隠れ　ひふみ
いわし雲移動販売過疎の村　ユキ子
コスモスや揺れて絡みて空青し　ナ　ナ
宙船やコスモスに浮く二子塚　圭　吾
一叢のコスモスの揺れ詩の生るる　とし子
百歳の媼と吟行菊日和　玲　子
最後はどっちコスモスの花占　はるな
コスモスの波に乗りたる古墳船　眞　子
リハビリの日々の孤独や秋桜　悦　子
四方山四方峰雲奈良井宿　香
日の出待つ榛名湖畔の秋桜　一　秀
おすすめはシイラの刺身新走　文
逢えぬ人想ふコスモス揺れる中　さくら
コスモスの風の流れに傾ぐ畑　泉
人の死に慣れてはならぬ秋桜　慶　子
筆跡のか弱き母や秋の蝶　かつら

青の会（十月）

犬塚　玲子報

相触れぬよう桃大切に置かれ　玲　子
見定めて大きな熟柿だけを捥ぐ　尚　子
異形なる枝に林檎や愛らしき　真由美
心細き一夜を過ごす野分かな　千代乃
ラ・フランスまずは香りをいただきぬ　つた子
野分中工事の音を大きくす　みその
標識の傾ぎしままに秋深む　和佳江
食べるのが勿体なくてマスカット　あけみ
握り飯たべて野分を遣り過ごす　ゆき子
空を行く機体きらめく野分晴れ　とわこ
初生りをレモンケーキに新嫁は　英　子
ことことと皮ごと煮込む白無花果　紀　子
「川中島」てふ名が気に入りて桃を買ふ　らく子
野分立つとき鳥どちの声尖る　くらら
汁したたらせ幸水も豊水も　宗　也

つるしろ・桔梗句会吟行会（十月）

黒野美由紀報

先生の胸ポケットに椿の実　美由紀
切岸の岸の跡地の薄紅葉　恵　子
秋の雨安祥山の扁額映え　房　野
地蔵堂にとなる筒井や秋気澄む　英　子
身に入むや人の一生想ふ時　まり子
秋雨や安城城の跡辿る　裕　子
加賀鳶を兼ねる庭師や松手入　栄　司
秋湿り安祥八景句碑読めず　つた子
律の風笙のオブジェの建つ公園　帰　心
小鳥来て午後のランチは味噌バーグ　紀　子
秋湿り目鼻の薄き地蔵尊　あけみ
水澄むや風呂井に今も水の湧く　尚　子
忠高の亀趺墓大き秋の雨　あや美
亀趺に乗る墓しとしとと秋の雨　宗　也

碧句会（十月）

片岡みさ代報

山車囃子笛の師匠は八十才　勝　子
名月や夫の迎への車中より　弘　子
三河路やスカイラインは萩の道　久　子
曼殊沙華教へし子らの顔をふと　幸　与
犯されし心よ秋に泣き叫べ　美　恵
一人旅夫の土産に芋羊羹　みさ代
清掃日隈無く付きし駒の爪　とみ江
秋さやか友金婚の二人旅　喜　子
うそ寒し三百万の曼殊沙華　律　子
処刑場跡とや秋の落し文　宗　也

白菊句会（十月）

杉浦　紀子報

待宵や「産声姫」とメール来る　紀　子
烏瓜蔓引けどなおその上に　玲　子
満腹の誘うは眠気寝待月と　志
今もなほ彼岸のお仏供湿地飯　とわこ
満月の兎は微か右を向き　光　彦
草臥れて山の終ひの椎茸丼　彰
玄関に歩行器備え秋を待つ　ゆき子
となり家はもう真つ暗や二十日月　くらら

米津句会（十月）

米津季恵野報

南の島に軍靴の音す秋悲し　ひろし

コスモスに声かけ朝の深呼吸　君江
風邪薬かすかに甘き麦門冬湯　妙子
さつま芋曽孫来る迄掘らでをく　つた子
土塁模す大石垣や小鳥来る　英子
小鳥来る嬰の手足のよく動く　季恵野
ミュージジャムあり栗林の奥の奥　宗也

朋友会（十月）

大澤　萌衣報

実石榴の落つるを忘れ乾びたる　萌衣
クロスパズルようやく解けて良夜かな　のり子
観覧車ひとまわりして良夜かな　和夫
天高し赤城嶺を越ゆ今朝の風　恒子
比叡山湖面に映る良夜かな　元美
いつまでも良夜にはしやぐ我であれ　笹良
集会に杖をお共の良夜かな　淳子
秋高し０番線の発車ベル　双葉
湯の宿に旧交深む良夜かな　ゆき江
約束のベンチ黄落の盛んなる　伸子
新米の二字際立たせ宅配便　澄子
黒猫の伸びをしてゐる良夜かな　弘子

如月の会（十月）

山田　和男報

首塚は石の一柱秋の蝶　英子
どんぐりを山路に踏んで戦跡　つばな
首塚は死を悼むため熟柿落つ　朋子
床机石によぢのぼりゆく秋の蟻　尚子
首塚は石塔ひとつ秋日濃く　貞代
秋惜しむ也有筆写の戦役図　あや美
家康の欣求浄土や萩の道　和敬
生垣は金木犀の資料館　和男

好日句会（十月）

乙部　妙子報

棉吹くや綿を伝えし神祀る　妙子
星月夜今輝ける憶光年　加代子
子等の靴洗い並べて星月夜　勅代
満月を心しづかにあおぎ見る　香友
法師蟬鳴きつかれてか鋳物墓　竹児
独り居や窓を開ければ星月夜　美子
疲労とは心地良きもの星月夜　恵子
喧騒の下界をてらす星月夜　君江
星月夜路地より出でる介護タクシー　小夜子
フルートを吹く人と会ふ星月夜　宗也

守石荘句会（十月）

乙部　妙子報

お運びの帯は胸高秋袷　妙子
扱ぎ置かる鶏頭は首持ち上げる　こう子
何十年振りの工作秋日和　和男
直売の茄子から柿へ秋深し　彰
茸狩の上手な祖母のしめじ飯　紀子
甘き香あふる金木犀の木立　尚子
呼べば子に御仏優し秋麗　光彦
清秋や懐紙折る手の生真面目さ　恵子
昼の月ワンタン麺の名店へ　かの子
母思うとき木犀のかおりふと　あけみ
とみた家の自慢のたまご食の秋　君江
生きるとは忘るることよ蛇穴に　勅代
友と酌む新酒本音の溢れ出す　美由紀
木犀の甘き香われにきつすぎし　美千代
草の花遅筆なれども心込め　杏子
秋蝶や戦場跡の供養塔　つばな
秋気澄む百八枚の天井画　英子
木犀の一枝を母に入所の日　帰心
首塚に今も供華ある柿の秋　あや美
木犀や美しかりし荼枳尼天　宗也

福地俳句教室（十月）

岡田つばな報

栗きんとん濃茶をたてる昼さがり　香代子
片付かぬ本を再読夜長かな　房野
秋高し触れし子拝受天皇杯　靖治
山梔子の実を碾く里の薬研臼　静山
うどん屋の前に行列秋深む　つばな
観世音の後ろ暗がり秋の声　裕子
声援と世界の国旗秋空へ　久枝
爽籟や海中渡御の山車軋む　巳代子
今年また父の忌に来し火焚鳥　まり子
法師蟬移る季節を知らせけり　英之
この引きは大もの黒鯛かときめにけり　季男
青空へ風と並べるつるし柿　幸子
馬防柵高しあけびは口を開く　宗也

岡崎句会（十月）

荻野　杏子報

山城の跡は平らか秋深む　和男
天龍川をはさんで空木岳霧まとふ　かの子
四方八方から手新酒の試飲　恭美
龍角散服まず捨てれず冬隣　香苗
ちとせ川黒く動くは全て鮭　みな子
トンボロに影を残して秋の蝶　幸子
秋日和猫背の影を連れ歩き　勝美
猫どちの食欲増して冬隣　れい子
茶碗蒸しの銀杏の数予想する　ひかる
川を背に鏡花の歌碑や秋の声　英子
リハビリに追はれてる間に冬はそこ　千佳子
冬隣娘は猫を飼ひはじむ　杏子
ぼら飛んで飛んでトンボロ日和なる　宗也

中畑句会（十月）

神谷つた子報

唐弓に白き原棉　棉祖祭竹　児
秋祭息子は宮の埒係　つた子
三宝に棉を飾りて里祭　君江
宝前に御神酒林立秋祭　妙子
いたいけな子供棒の手村祭　冬竹

日本写実派の殿堂2023

第85回　水彩画・油彩画・パステル画・日本画

大潮展
だいちょうてん

ご高覧ご高評を賜りたくご案内申し上げます

入場無料

会　期　12月13日（水）～12月20日（水）
休館日 12月18日（月）
9：30～17：30（入場は17：00まで）
最終日は14：00終了（入場は13：00まで）

会　場　上野公園　東京都美術館
2階 第2展示室

令和5年12月

大　潮
代表　加古千恵子

事務局　〒444-0532
愛知県西尾市吉良町瀬戸宮前115-2
加古 千恵子　TEL.0563-35-3586　FAX.0563-35-3586

《訂正》
十一月号
十七音の森を歩く　3行目
誤「伊・鳥遊」→正「小・鳥遊」

各 支 部 句 会 案 内

詳細は幹事にお問い合わせ下さい。　　編集部まとめ（1）

会の名称	日時	場所	幹事	連絡先(TEL)
守石荘句会	第3木曜日　13：30～	西尾市　総合福祉センター	乙部妙子	0563-52-2807
山紫会	第1・3火曜日　13：30～	前橋市　教育プラザ第三コミセン	工藤弘子	027-253-1567
岡崎句会	第4月曜日　13：00～	岡崎市　竜美丘会館	荻野杏子	0564-54-8088
煤竹の会	第1木曜日　13：30～	豊田市　総合福祉センター	松元貞子	0565-80-0302
米津句会	第1火曜日　13：30～	西尾市　米津ふれあいセンター	米津季恵野	0563-56-2644
白菊句会	第2火曜日　13：30～	西尾市　八ツ面ふれあいセンター	杉浦紀子	0563-56-4387
つるしろ句会	第2月曜日　9：30～	西尾市　総合福祉センター	黒野美由紀	0564-43-1292
中畑句会	第4火曜日　13：30～	西尾市　総合福祉センター	神谷つた子	0563-59-4561
好日句会	第3火曜日　9：00～	西尾市　総合福祉センター	乙部妙子	0563-52-2807
福地俳句教室	第3土曜日　9：30～	西尾市　福地ふれあいセンター	岡田つばな	0563-56-4368
土筆野句会	第4火曜日　9：30～	西尾市　総合福祉センター	鈴木帰心	080-3614-0562
風の会	第2水曜日		田口風子	0568-92-6525
吉良俳句の会	第2木曜日　13:30～	吉田地区コミュニティセンター	鈴木帰心	080-3614-0562
豊友会文芸部句会	第2金曜日　18：30～	刈谷市　豊田織機文化センター	高濱聡光	0563-57-7269

各 支 部 句 会 案 内

詳細は幹事にお問い合わせ下さい。　　編集部まとめ（２）

会の名称	日時	場所	幹事	連絡先(TEL)
朋友会	第２・４木曜日　13：00～	前橋市　中央公民館	大澤萌衣	027-223-6633
桔梗句会	第２水曜日　10：00～	西尾市　総合福祉センター	池田あや美	0563-54-2711
碧句会	第２火曜日　10：00～	碧南市　あすかふぇ	原田弘子	0566-48-5228
			片岡みさ代	0566-48-4727
若竹日曜句会	第１日曜日　13：30～	ウィルあいち	田口風子	0568-92-6525
青の会	第１金曜日　13：30～	西尾市総合福祉センター	犬塚玲子	0563-52-1422
如月の会	毎月１回	随時	江川貞代	052-704-9986
はまぼうの会	毎月１回	随時	池田あや美	0563-54-711
朝日カルチャー	第２・４金曜日　13：00～	丸栄スカイル	加古宗也	052-261-3866
朝日カルチャー	第２・４土曜日　13：00～	丸栄スカイル	加古宗也	052-261-3866
朝日カルチャー	第１・３月曜日　13：00～	丸栄スカイル	加古宗也	052-261-3866
朝日カルチャー	第２・４水曜日　13：00～	丸栄スカイル	服部くらら	052-261-3866
朝日カルチャー	第１・３土曜日　10：00～	丸栄スカイル	田口風子	052-261-3866
名鉄カルチャー	第２・４土曜日　10：00～	名鉄本社ビル	加古宗也	052-526-0845
名鉄カルチャー	第１・３水曜日　13：00～	名鉄本社ビル	加古宗也	052-526-0845

＊都合によって日時・場所が変更することがありますので、詳細は幹事にご照会下さい。

犬塚　房江
〒445-0025
西尾市和気町横14

犬塚　玲子
〒445-0026
西尾市江原町屋敷129

今泉かの子
〒458-0008
名古屋市緑区平手北2丁目421

今津　律子
〒470-1131
豊明市二村台1-43

今村　和夫
〒371-0803
前橋市天川原町1の27の7の101

岩瀬うえの
〒444-0427
西尾市一色町大塚上古新田9

岩瀬みその
〒444-0322
西尾市巨海町佐円24

岩田美智子
〒371-0052
前橋市上沖町214-5

梅原巳代子
〒443-0034
蒲郡市港町5の6の905

江川　貞代
〒465-0054
名古屋市名東区勢子坊2-1201
ライオンズヴィアーレ弐番館118

大石　望子
〒791-1125
松山市小村町354の7

大澤　萌衣
〒371-0805
前橋市南町4の16の3　蔵内

太田小夜子
〒445-0062
西尾市丁田町五助49-3

岡田　季男
〒444-0515
西尾市吉良町大字富好新田
字上川並49-2

若　竹　同　人　名　簿

池田あや美
〒445-0082
西尾市八ツ面町熊子山43-6

池田真佐子
〒458-0827
名古屋市緑区鳴海町字細根4-11
ユニーブル鳴海セゾン1-310

石川　桂子
〒471-0066
豊田市栄町5-8-4

石川とわ子
〒445-0874
西尾市菱池町蜂ノ尻12

石川　裕子
〒444-1163
安城市木戸町南屋敷6

石崎　白泉
〒470-1131
豊明市二村台2丁目8の8

磯貝　恵子
〒445-0075
西尾市戸ヶ崎2丁目15-2

磯村　通子
〒487-0016
春日井市高蔵寺町
北1丁目236の1

市川　栄司
〒471-0873
豊田市秋葉町8-21-75

伊藤　恵美
〒445-0851
西尾市住吉町6-5

稲垣　まき
〒444-0322
西尾市巨海町佐円16

稲吉　柏葉
〒444-0113
額田郡幸田町大字菱池字欠間28-6

加古　宗也
〒445-0852
西尾市花ノ木町2-15
（0563）56-5847

浅井　静子
〒445-0071
西尾市熊味町山畔101

浅野　　寛
〒464-0801
名古屋市千種区星ケ丘2-71-903

朝岡和佳江
〒444-0322
西尾市巨海町西脇46-2

天野れい子
〒444-0879
岡崎市竜美中2-1-8

荒川　洋子
〒230-0048
横浜市鶴見区本町通3-164-2

安藤　明女
〒444-1332
高浜市湯山町8-6-10

飯島　慶子
〒375-0037
藤岡市三本木727-28

飯島たえ子
〒444-0874
岡崎市竜美南3-6-16

井垣　清明
〒175-0082
東京都板橋区高島平1-22-9

生田　令子
〒451-0053
名古屋市西区枇杷島5-32-22

沢戸美代子
〒445-0802
西尾市米津町種木35

重留　香苗
〒458-0910
名古屋市緑区桶狭間森前2811

清水みな子
〒448-0025
刈谷市幸町3の5の4

白井ユキ子
〒371-0836
前橋市江田町329-10

白木　紀子
〒462-0807
名古屋市北区御成通3-9-4-1308

杉浦　紀子
〒445-0075
西尾市戸ヶ崎2-16-3

鈴木　帰心
〒448-0001
刈谷市井ケ谷町池之浦55-604

鈴木こう子
〒444-0816
西尾市吉良町吉田亥改181

鈴木まり子
〒445-0055
西尾市市子町大宮東25

鈴木　静香
〒514-0061
津市川添町7-26

鈴木美江子
〒444-0703
西尾市西幡豆町前田5

鈴木　恭美
〒445-0864
西尾市錦城町290-3

鈴木　玲子
〒371-0027
前橋市平和町1-4-22

関口　一秀
〒371-0044
前橋市荒牧町2-52-7

烏野かつよ
〒490-1107
あま市森3丁目7の15

川嵜　昭典
〒485-0029
小牧市中央一丁目207
ライオンズ小牧グランライズ303

金原香代子
〒444-0314
西尾市下矢田町岐路12-8

工藤　弘子
〒371-0837
前橋市箱田町643-3

國松　房野
〒444-0324
西尾市寺津町白山3の15

黒野美由紀
〒444-0226
岡崎市中島町後屋敷15-3

桑山　撫子
〒479-0003
常滑市金山字西申堂58

後藤さかえ
〒448-0857
刈谷市大手町1-26

小柳　絲子
〒468-0069
名古屋市天白区表山1丁目1824

近藤くるみ
〒445-0894
西尾市上町寺山44の6

斉藤　浩美
〒477-0032
東海市加木屋町辻ケ花3-19

酒井　英子
〒445-0802
西尾市米津町野寺道39-1

坂口　圭吾
〒370-0846
高崎市下和田町4-1-11

笹澤はるな
〒370-3572
前橋市上青梨子町239

岡田つばな
〒445-0043
西尾市鵜ケ池町茅場54

岡本たんぽぽ
〒462-0805
名古屋市北区八龍町1-25-1
ライオンズマンション八龍町705

荻野　杏子
〒444-0874
岡崎市竜美南3丁目6-7

奥平ひかる
〒451-0077
名古屋市西区笹塚町2-70-1106

奥村　頼子
〒470-0224
みよし市三好町弥栄14-2

長村　道子
〒445-0075
西尾市戸ヶ崎三丁目20-12

乙部　妙子
〒445-0011
西尾市上羽角町湯田74

小原　玲子
〒444-0305
西尾市平坂町北新田24-2

加島　孝允
〒467-0033
名古屋市瑞穂区弥富町円山54-403

加島　照子
〒467-0033
名古屋市瑞穂区弥富町円山54-403

加瀬　恵子
〒371-0123
前橋市高花台町1-8-17

加藤　久子
〒477-0032
東海市加木屋町大清水323の3

鎌田　初子
〒458-0812
名古屋市緑区神の倉4-82

神谷つた子
〒444-0303
西尾市中畑町神明前1の1

春山　　泉
〒371-0007
前橋市上泉町2887-11

濱嶋　君江
〒445-0012
西尾市下羽角町雲母落36

原田　弘子
〒447-0082
碧南市湖西町2-22

平井　　香
〒371-0034
前橋市昭和町1丁目11-17

平田　真子
〒370-3525
高崎市三ツ寺町乙1105

平野　　文
〒371-0811
前橋市朝倉町4-20-16

廣澤　昌子
〒467-0025
名古屋瑞穂区松栄町1-48

深見ゆき子
〒445-0075
西尾市戸ケ崎1-5-10

堀田　和敬
〒470-0353
豊田市保見ヶ丘3-3-2

堀田　朋子
〒470-0353
豊田市保見ヶ丘3-3-2

堀口　忠男
〒370-0603
群馬県邑楽郡邑楽町中野853-1

堀場　幸子
〒463-0072
名古屋市守山区金屋1-22-8

松岡　裕子
〒475-0005
半田市横川町2丁目15番北の4

松田美奈子
〒463-0027
名古屋市守山区弁天竺130の1

辻村　元喜
〒445-0873
西尾市川口町中切50

辻村　勅代
〒445-0026
西尾市江原町屋敷82

鶴田　和美
〒470-1205
豊田市永覚町中山畑19

冨永　幸子
〒445-0043
西尾市鵜ケ池町上屋敷20

中井　光瞬
〒731-5103
広島市佐伯区藤の木4丁目4-28

長坂　尚子
〒445-0879
西尾市住崎4-82

中澤さくら
〒371-0811
前橋市朝倉町2-9（Ⅰ）-205号

中野こと葉
〒464-0014
名古屋市千種区御影町1-31-202

中野まさし
〒447-0879
碧南市沢渡町58

新部とし子
〒371-0035
前橋市岩神町1-5-14

橋本　周策
〒452-0822
名古屋市西区中小田井1-327-412

畑中　淳子
〒511-0851
桑名市西別所1200-94

服部くらら
〒445-0012
西尾市下羽角町高旗72-1

服部　喜子
〒447-0001
碧南市北町4の19

髙瀬あけみ
〒444-0427
一色町赤羽上郷中44の3

高橋すゞ子
〒453-0863
名古屋市中村区一社2-16

髙橋　冬竹
〒444-0302
西尾市田貫3丁目3

髙橋まり子
〒811-4162
宗像市青葉台1-25-4

高濱　聡光
〒444-0826
岡崎市若松町字川向6の6

高柳由利子
〒442-0845
豊川市為当町市木40-1

高山　と志
〒445-0081
西尾市志籠谷町乾地41-27

田口　綾子
〒511-0811
桑名市東方1620-39

田口　風子
〒487-0035
春日井市藤山台6-2-21

田口　茉於
〒216-0004
川崎市宮前区鷺沼4丁目14-2
ドレッセ鷺沼の杜C-409

竹原多枝子
〒738-0054
広島県廿日市市阿品2-7-16
谷野方

田畑　洋子
〒468-0062
名古屋市天白区弥生が岡117-405

田村　清美
〒489-0911
瀬戸市北松山町2丁目117

丹波美代子
〒478-0001
知多市八幡字曽山7-51

復本　一郎　氏
〒222-0022
横浜市港北区篠原東2-24-21

加古千恵子　氏
〒444-0532
西尾市吉良町
大字瀬戸字宮前115-2

徳田　次郎　氏
〒330-0844
さいたま市大宮区3-7-1 F308号

橋本　　直　氏
〒215-0023
川崎市麻生区片平2-29-15-1

高橋　楽斎　氏
〒529-1851
甲賀市信楽町長野1433

山下　英一　氏
〒445-0841
西尾市馬場町19

髙橋　伸夫　氏
〒445-0879
西尾市住崎2-104

平野雷太郎　氏
〒647-1741
田辺市本宮町大居1047

渡辺　悦子
〒371-0054
前橋市下細井町22-1

渡邊たけし
〒470-2101
知多郡東浦町大字森岡字下今池61-16

渡辺よね子
〒444-0403
西尾市一色町
大字松木島字宮東181

松元　貞子
〒471-0802
豊田市志賀町香九礼1の327

水谷　　螢
〒471-0078
豊田市昭和町2-22-3
イトーピア豊田Ⅱ 1202号

水野　幸子
〒444-2149
岡崎市細川町字窪地77-17

水野由美子
〒454-0912
名古屋市中川区野田3-92

三矢らく子
〒445-0854
西尾市永楽町4丁目35

村上いちみ
〒227-0038
横浜市青葉区奈良4の1の1
ルクサージュ E201

村重　吉香
〒731-5137
広島市佐伯区美の里1丁目8-22-10-409

茂原　淳子
〒371-0037
前橋市上小出町1-3-8

安井千佳子
〒455-0021
名古屋市港区木場町2-8
名南一番館705

山科　和子
〒444-0115
愛知県額田郡幸田町荻下66

山田　和男
〒473-0912
豊田市広田町富田20

米津季恵野
〒445-0802
西尾市米津町天竺桂11-5

和田　郁江
〒509-6103
瑞浪市稲津町小里1849-1

角川『俳句』別冊（カドカワムック）

俳句年鑑 2024 年版

2022.10 ▸ 2023.9

12月7日発売予定　予価3300円（税込み）

口絵◉ 二〇二三年 一〇〇句選……野中亮介 選
写真でたどる 二〇二三年の俳壇

【巻頭提言】……宮坂静生

年代別 二〇二三年の収穫

諸家自選五句……約六〇〇名！

今年の句集ベスト15
今年の評論ベスト7
四協会の一年
各俳句賞のひとびと ほか

【合評鼎談 ―総集編―】
奥坂まや・津高里永子・堀本裕樹
今年の秀句を振り返る
〈令和俳壇「心に残る秀句」発表！〉

◉全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き！

◉全国俳人住所録 約二〇〇〇名を一挙掲載！

※内容は変更になる場合があります。

KADOKAWA

発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
● お問い合わせ先（注文） TEL.0570-002-008（KADOKAWA購入窓口）

NHKテキスト

NHK俳句 12月号

月刊20日発売 ■定価700円（税込）

12月のテーマ

夏井いつき ＊凡人からの脱出 類想から脱ボン
おでん

山田佳乃 ＊俳句とエコロジー 滋養強壮の薬
薬喰

村上鞆彦 ＊人生を詠う 病、介護
ストーブ

高野ムツオ ＊語ろう！俳句 ことばを梢に（ティーエス）（執筆 田中亜美）
靴

特集 先生の俳句 医師と俳句の関係性
石井露月・中田みづほ・相馬遷子・阿部完市
岸本尚毅

◆巻頭エッセイ……武井 壮
◆わたしの第一句集『跳足』……藤本美和子
◆アンソロジー「野」……岩岡中正
◆誌上添削教室……高柳克弘
◆誌上句合わせ……西村和子×岸本葉子
◆旧かな入門ドリル……山西雅子
◆入選句掲載

NHK出版　NHK出版 お客様注文センター　TEL 0570-000-321 午前9:30～午後4:30（年末年始・小社指定日を除く）
NHKテキスト電子版も発売。https://nhktext.jp

新発売！
NHK俳句
添削でつかむ！
俳句の極意
7つのメソッドで力がつく
高柳克弘　定価1,650円（税込）
俳句が好きなすべての方へ、上達の極意をわかりやすく解説

令和六年版　俳人協会編「俳句カレンダー」

体　裁　月別　表紙とも十三枚綴り壁掛用

内　容　表紙　細見綾子
西山睦・三村純也・山口青邨・大石悦子・坂本宮尾
鈴木直充・仲村青彦・松尾隆信・深見けん二
古舘曹人・後藤比奈夫・鷹羽狩行・亀井雉子男
和田華凜・大串章・大野林火
（掲載月順）表紙を含み四九七句掲載
（ジュニアの俳句十句掲載）

頒　価　一部　一，二〇〇円（協会渡し）

送　料　一部七五〇円／二部一，〇五〇円／三部一，一〇〇円（郵便料金）
四部以上については実費（宅配便）
※なるべくグループでお申込みください。
※郵便事情等により送料が変わる場合がありますのでご了承ください。

発送予定　十月初旬より

申込先　各俳句結社又は各俳句会
個人の方は、直接俳人協会カレンダー係へ。
お申込みは早めにお願いします。
〒169-8521
東京都新宿区百人町三―二八―一〇
公益社団法人　俳人協会
電話　〇三（三三六七）六六二一
FAX　〇三（三三六七）六六五六
振替　〇〇一六〇―二―二七三

特集　述志の俳句
対談　句を生きる、句に生きる
長谷川　櫂・坂井修一

巻頭作品10句
蘭草慶子・伊藤政美・柏原眠雨
古賀しぐれ・辻　恵美子・遠山陽子
村上鞆彦・森田純一郎

俳壇
12月号
11月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
マブソン青眼

八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅲ期］……松尾隆信
特別作品30句……陽　美保子

連載
俳人の住む町……中川雅雪・加藤耕子
俳句文法　そこが問題、そこがポイント……井上泰至
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……坂本宮尾
十二か月添削教室……前北かおる

俳句と随想12か月　井上論天・清水和代

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

2023年度「若竹」主要　行事・関係行事

1月	15日（日）	若竹新春俳句大会　三河湾リゾート・リンクス
2月	12日（日）	瓢々忌句会
		西尾市横須賀ふれあいセンター　受付 10：00
	16日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
3月	7日（火）	俳人協会総会　新宿京王プラザ　12：45～
	23日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
4月	20日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
	23日（日）	俳人協会愛知県支部総会　名古屋通信ビル
5月	18日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
6月	15日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
7月	20日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
8月	17日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
9月	10日（日）	三師を偲ぶ会　西尾市総合福祉センター
	18日（月・祭）	村上鬼城顕彰全国俳句大会（高崎）
10月	12日（木）	俳人協会主催　三河湾1泊2日俳句セミナー
	15日（日）	大垣芭蕉蛤塚忌　奥の細道むすびの地　10：00～
	19日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
	29日（日）	俳人協会愛知県支部秋季俳句大会　刈谷俳句大会
		刈谷市産業振興センター小ホール　10：00～
11月	16日（木）	守石荘句会　西尾市総合福祉センター　13：30～
	26日（日）	第52回西尾市民俳句大会
		西野町ふれあいセンター　10：00～
12月	14日（木）	義央忌献句会　華蔵寺　8：30（毎歳忌）
		ホワイトウエイブ　13：30（句会）
	21日（木）	守石荘忘年句会　西尾市総合福祉センター　13：30～

守石荘だより

▽一一〇〇号をお届けします。今回、一〇〇〇号を知らない新しい仲間が増えたことを嬉しく思い、「若竹」の歴史を発信する必然性を感じました。そこで今号では「俳句一筋、鬼城一本」として、鬼城、うしほから「若竹」創刊への流れを書いてみました。資料として読んでいただけると幸いです。前々号の「若竹」九〇〇号の「座談会」の中で、主宰が「鬼城一本を大事にしながら、一方で、一度しっかり屈んでみる。屈んでみないと大きなジャンプは出来ない。足元をよく見て、それをバネに大きくジャンプする」と言われています。歴史ある「若竹」の会員であることを誇りに、しっかりと屈み、足元をよく見て、次の一二〇〇号を目指し「若竹」の皆様と大きなジャンプを試みたいと思います。

諸先生方のご寄稿、若竹の皆様のご協力ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

（風子）

▽一〇〇〇号に「四十代の読む鬼城」を掲載し、八年が経ちました。私の四十代もこの八年とともにあり、鬼城の四十代を意識しながら過ごしたようにも思います。今号でも諸先生方からご執筆いただき、実りある記念号となったのではないでしょうか。一二〇〇号までの時間も大切に過ごしていけたらと思っています。

（茉於）

▽一〇〇〇号の編集をしたのが八年前の二〇一五年、その時は一一〇〇号はずっと先のことだと思っていましたが、あっという間にそのずっと先が来ました。若竹の、一〇分の一くらいに関われたのは、とても幸せなことだと思います。次の一二〇〇号もずっと先だと思っていますが、やはりあっという間に来るのでしょうか。

（昭典）

▽一一〇〇号が出ました。記念号はいつも俳壇全体を俯瞰しつつの編集になっています。本号は田口風子編集長を中心に、田口茉於・川嵜昭典・橋本周策・池田真佐子同人らが編集同人として活躍してくれました。十分、読み応えのあるものになりました。さて、次号は一一〇一号です。

（宗也）

2023年11月25日　印刷
2023年12月１日　発行
編集発行人　加　古　宗　也
若　竹　吟　社
〒445-0852 西尾市花ノ木町２－15
☎〈0563〉56－5847
FAX　同　上
印刷所　ブラザー印刷株式会社

★若竹規定

- **真珠抄**（雑詠５句）
  加古宗也選
- **翠竹集**（自選３句）
  同人に限る
- **締切（前々月20日）**
- その他，評論，随筆紀行，句会報，めずらしいできごとなどの原稿を編集部宛にお送り下さい。
- 各支部の活動状況200字以内但し原稿の取捨選択は編集部にご一任下さい。

◎送り先

若竹編集部
〒445-8691 西尾局私書箱９号
ホームページ
俳句「若竹」
http://haiku-wakatake.jp

◎支部

若竹支部は７名以上の若竹誌友（会員）をもって結成できます。支部になりますと会報欄に句会報が掲載されます。

本誌定価

誌友（会員）	一　部	1,000円（送料共）
	半年分	6,000円（送料共）
	一年分	12,000円（送料共）

誌代は前納です。
なるべく１年分まとめて直接発行所にお申込下さい。
振替　００８３０－７－４１５９３
若　竹　吟　社

守石荘忘年句会

12月21日（木）
受付 13：30～
西尾市総合福祉センター

二〇二三年十二月一日発行（毎月一回一日発行）
第九七巻第十二号（通巻一一〇〇号）

特価　二五〇〇円（〒共）